

大館市文化財調査報告書 第22集

中仕田Ⅱ遺跡
金坂遺跡(2)
大館市内遺跡詳細分布調査報告書(8)

2025

秋田県大館市教育委員会



大館市文化財調査報告書 第22集

中仕田Ⅱ遺跡
金坂遺跡(2)
大館市内遺跡詳細分布調査報告書(8)

2 0 2 5

秋 田 県 大 館 市 教 育 委 員 会

例 言

1. 本書は、個人住宅建築に伴う中仕田Ⅱ遺跡（秋田県教育委員会登録番号204－15－38）及び金坂遺跡（同204－4－47）の発掘調査、市内遺跡の試掘・確認調査の報告書である。
2. 調査は、国及び秋田県の補助を受け、下記の体制・期間で実施した。調査を実施した地区の遺跡名、所在地、調査面積、調査期間等は表1に示すとおりである。

(1) 調査体制

教 育 長 高橋 善之

教 育 次 長 成田 浩司

歴史文化課長 小松 工（令和6年3月31日まで）

歴史文化課主幹 関 智仁（令和6年1月1日から。令和6年4月1日から歴史文化課長）

歴史文化課長補佐 加賀 至（令和5年3月31日まで）

歴史文化課長補佐 篠村 朋子（令和5年4月1日から）

埋蔵文化財係長 滝内 亨（調査担当）

埋蔵文化財係 嶋影 壮憲（調査担当）

馬庭 和也（調査担当）

調 査 補 助 員 高橋 光大（会計年度任用職員、令和5年4月から）

(2) 調査期間

現地調査

中仕田Ⅱ遺跡

自：令和5年4月27日 至：令和5年5月24日

金坂遺跡

自：令和6年7月9日 至：令和6年7月27日

令和4年度小館町遺跡

自：令和5年3月17日 至：令和5年3月18日

令和5年度市内遺跡

自：令和5年4月1日 至：令和5年11月30日

令和6年度市内遺跡

自：令和6年9月12日 至：令和6年11月27日

整理作業 自：令和5年8月1日 至：令和7年3月31日

(3) 調査面積

中仕田Ⅱ遺跡 87m²

金坂遺跡 40m²

令和4年度小館町遺跡 37.7m²

令和5年度市内遺跡 716.7m²

令和6年度市内遺跡 113.1m²

3. 本書の作成にあたり、現地の基準点測量、土層断面図のトレースは高橋、土製具及び呪具の実測は嶋影が担当し、それ以外の遺物実測は山田勇治、遺物のトレースは佐々木菜摘の協力を得た。室内での遺物写真撮影は(株)ワールドプラン社に委託し、金坂遺跡出土遺物の一部を滝内が撮影した。

4. 本書は高橋の協力を得て、滝内、嶋影、馬庭が執筆し、嶋影が編集した。執筆分担は以下のとおりである。
- I、II、III－1(3)～(6)、(11)・(13)…嶋影
- III－1(1)…馬庭・嶋影
- III－1(2)・(7)・(9)・(10)・(12)、3(1)…滝内
- III－1(8)・2・3(2)…馬庭・滝内
5. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図、並びに秋田県教育委員会発行の秋田県遺跡地図（北秋田地区版）、大館市発行の「都市計画図 1/2,500」である。
6. 本調査で出土した遺物並びに記録類は、大館市教育委員会が保管する。
7. 金坂遺跡及び大館城跡、餅田地区出土陶磁器については佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二名誉顧問にご教示いただいた。
8. 調査にあたっては、下記の機関、方々よりご教示・ご協力をいただいた（順不同、敬称略）。
- 秋田県北秋田地域振興局農林部農村整備課、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室、秋田県信用保証協会、秋田県埋蔵文化財センター、M's設計室、大館市建設部下水道課、大館市総務部総務課、大館市消防本部消防総務課、株式会社一条工務店、株式会社シムコ、株式会社JES設計、株式会社ヤナギヤ、古河林業株式会社、三浦木材株式会社、浅川十三子、飯村均、宇田川浩一、大橋康二、佐藤金生、成田滋彦、久松由佳子、藤嶋幸子、藤嶋大佑、森田賢司（五十音順、敬省略）

凡 例

1. 本書遺構図等における各基準は、下記のとおりである。

略記号・縮尺

遺構位置図	1 : 100・1 : 200
掘立柱建物跡（S B）	1 : 40
竪穴建物跡（S I）	
柱列（S A）	1 : 40
土坑（S K）	1 : 20・1 : 40
井戸跡（S E）	1 : 40
溝跡（S D）	1 : 40
池跡（S G）	
炉跡（S L）	1 : 30
柱穴・柱穴様ピット（S P）	

図の方位

発掘区のX軸正方向が図面天方向に合致する。

遺構図等の標高

遺構位置図の標高値は海拔高度による。単位はメートル。

スクリーン・トン

焼土 網目

遺物の実測図及び写真図版の縮尺

土器・陶磁器・礫石器・石製品	1 : 3
剥片石器・呪具・土製品・磁製品・鉄製品	1 : 2

土層の色調

『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局2006年版）を使用し、カラーチャートの番号を記した。

2. 一覧表における遺構の規模のうち、確認面・底面の項は、長径×短径で表した。
3. 今回の調査における作業と遺物の分類基準は、大館市文化財調査報告書第11及び第15集に準拠する。近世の陶磁器・土器等の器形分類や個体の定義名称は『内藤町遺跡』（新宿区内藤町遺跡調査会編1992）に、肥前・肥前系の時期区分は『肥前陶磁』（大橋1989）、『九州陶磁の編年』（九州近世陶磁学会2000）に従った。

本書に掲載した遺物の分類基準の概要は、以下のとおりである。

土器・陶磁器（P）

- 2群 縄文早期後葉～前期前葉の土器群
- 3群 筒形土器群
 - 8類 円筒上層d式土器
- 4群 縄文中期後半の土器群
- 5群 縄文後期～晩期の土器群
 - 5類 後期末～晩期初頭の土器群
 - 6類 晩期前半の土器 大洞B・BC・C1式土器
- 8群 中世以降の陶磁器・土器
 - 中世以降の陶磁器・土器。
 - 1類 磁器
 - 2類 陶器
 - 3類 土器

石器・石製品（S）

- 1群 石器

定形化した石器、使用を目的とした二次加工や使用痕のある剥片・礫など。なお、1群の石器は次のとおりに細分される。

- 1類 ポイント類
- 3類 ナイフ・スクレイパー類
- 4類 U. フレイク
 - 部分的な刃部をもつ剥片類
- 6類 擦石・敲石類
- 7類 砥石・石皿・台石類
- 9類 その他の石器
- 2群 剥片
 - 二次加工や肉眼での使用痕の認められないもの
- 3群 石核
- 4群 礫

呪具 (M)

主として通過儀礼に使用されたと考えられるもの。葬祭製品

土製品 (C)

土製品は次のとおり細分される

1 群 土器破片を再利用した円盤

9 群 塊状土製品

金属製品 (I)

自然遺物 (N)

目 次

例言	i
凡例	ii
目次	iv
I 中仕田 II 遺跡	1
1 遺跡	1
(1) 調査の経緯	1
(2) 調査の経過	1
(3) 遺跡の位置と周辺の環境	2
(4) 発掘調査の方法	2
(5) 層序	2
2 遺物	5
(1) 土器	5
(2) 石器	5
(3) その他の遺物	5
II 金坂遺跡	14
1 遺跡	14
(1) 遺跡の概要	14
(2) 調査の経緯	14
(3) 調査の経過	14
(4) 遺跡の位置と周辺の環境	15
(5) 調査の方法と層序	15
(6) 調査結果の概要	17
2 中世～安土桃山時代の遺構	18
(1) 概要	18
(2) 遺構	18
3 近世の遺構と遺物	20
(1) 概要	20
(2) 遺構	20

4	発掘区の遺物	25
(1)	陶磁器・土器	25
(2)	その他の遺物	25
5	要約	28
(1)	中世～安土桃山時代について	28
(2)	侍屋敷の遺構について	28
III	試掘・確認調査	37
1	大館地区	37
(1)	小館町遺跡	37
(2)	雪沢地区（芋ヶ岱Ⅱ・Ⅲ遺跡）	40
(3)	金坂遺跡	52
(4)	大館城跡	59
(5)	大館城跡隣接地	64
(6)	柄沢地区	68
(7)	釈迦内地区	71
(8)	萩ノ台Ⅱ遺跡	73
(9)	中山地区	78
(10)	餅田地区①	81
(11)	餅田地区②	83
(12)	曲田地区	85
(13)	上聖遺跡	92
2	比内地区	95
(1)	市川遺跡	95
3	田代地区	98
(1)	早口地区	98
(2)	茂屋下岱遺跡隣接地	101
	引用・参考文献	104
	報告書抄録	105

表1 令和5・6年度 発掘調査実績

令和5年度（本発掘調査）

事業	登載番号	遺跡（地区名）	調査地	調査対象 面積(㎡)	調査面積 (㎡)	調査期間	報告
個人住宅新築	204-15-38	中仕田Ⅱ遺跡	早口字中仕田50	71	87	4/27～5/24	I

令和6年度（本発掘調査）

事業	登載番号	遺跡（地区名）	調査地	調査対象 面積(㎡)	調査面積 (㎡)	調査期間	報告
個人住宅新築	204-4-47	金坂遺跡	字八幡9-2	43	40	7/9～7/27	II

試掘確認調査

事業	登載番号	遺跡（地区名）	調査地	調査対象 面積(㎡)	調査面積 (㎡)	調査期間	報告
----	------	---------	-----	---------------	-------------	------	----

令和4年度

アパート新築	204-4-141	小館町遺跡	小館町10-31	660	37.7	3/17・18	Ⅲ-1(1)
--------	-----------	-------	----------	-----	------	---------	--------

令和5年度

ほ場整備事業	204-4-173・174	雪沢地区（芋ヶ岱Ⅱ・Ⅲ遺跡）	雪沢字預ヶ岱319ほか	65000	547	4/1～4/25、 10/24～11/14	Ⅲ-1(2)
個人宅地造成	204-4-47	金坂遺跡	字八幡9-2	300	31	5/25～6/8	Ⅲ-1(3)
事務所新築	204-4-46	大館城跡	字三ノ丸87-1	503	23	6/10～6/20	Ⅲ-1(4)
家畜埋却予定地		早口地区	早口字菅谷地27-1ほか	34000	4	7/4・5	Ⅲ-3(1)
アパート建築	204-4-46	大館城跡隣接地	字金坂13-3ほか	1452	16	7/13～7/21	Ⅲ-1(5)
店舗新築		柄沢地区	柄沢字山王台22-1ほか	1583	16	9/5～9/7	Ⅲ-1(6)
農業施設建設	204-15-4	茂屋下岱遺跡隣接地	山田字茂屋土栄口16-1	998	9.7	9/7～9/9	Ⅲ-3(2)
消防団車庫建設		釈迦内地区	釈迦内字二ツ森44-1	225	6	9/26・27	Ⅲ-1(7)
公共下水道	204-4-67	萩ノ台Ⅱ遺跡	小館花字萩野台4-36ほか	905	48	10/2・3	Ⅲ-1(8)
ほ場整備事業		中山地区	中山字中谷地35ほか	35000	6	11/15・16	Ⅲ-1(9)
個人住宅新築	204-12-18	市川遺跡	比内町扇田字本道端63-1	660	10	11/29・30	Ⅲ-2(1)
計					716.7		

令和6年度

消防団車庫建設		餅田地区①	餅田2丁目105	80	10	9/12～9/14	Ⅲ-1(10)
店舗新築		餅田地区②	餅田2丁目29-1	2153	35.6	10/1～10/8	Ⅲ-1(11)
ほ場整備事業		曲田地区	曲田字下堰下60ほか	282000	60	11/14～11/26	Ⅲ-1(12)
ため池等整備	204-4-146	上聖遺跡	曲田字上聖4-1	1154	7.5	11/26～11/27	Ⅲ-1(13)
計					113.1		



図2 遺跡位置図（大館地区東部 1:50,000）

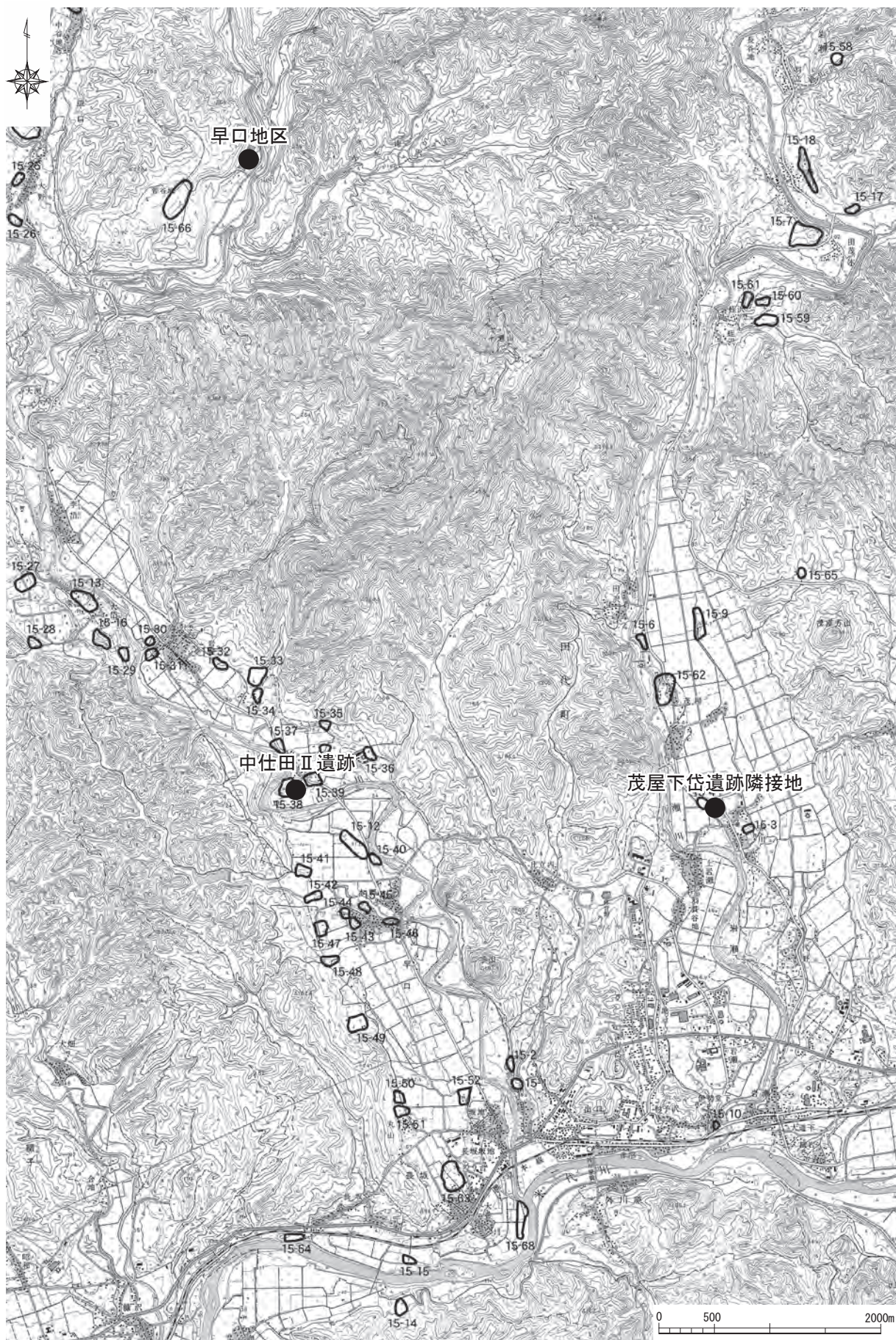


图3 遺跡位置図（田代地区 1:50,000）

I 中仕田Ⅱ遺跡

1 遺 跡

(1) 調査の経緯

中仕田Ⅱ遺跡（秋田県教育委員会登録番号204-15-38）は、大館市早口字中仕田に所在する平成9年度に発見された先史遺跡である。令和4年11月、建築主が依頼した工務店より早口字中仕田50番で住宅建築を行いたい旨協議があった。大館市教育委員会（以下、「市教委」という。）は、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地内であることから、土地所有者の了解を得て、当該地の詳細分布調査を行い、遺跡の内容を確認することとした。この結果、当該地番内には縄文時代中期の集落を構成するとみられる遺物の分布が明らかになったことから、土地所有者に対し遺跡の内容について通知した。この結果については大館市文化財調査報告書第20集に報告したとおりである。したがって、土木工事等の際には事前に発掘調査が必要であると判断し、事業者が文化財保護法第93条の規定に基づき、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の届出書を提出するよう求めた。事業者からは3月30日付で同届出書が提出され、3月31日付けで秋田県教育委員会宛進達した結果、4月10日付で工事前に発掘調査が必要である旨回答があった。市教委は事業者と協議し、工事の実施計画の変更が困難であり、事業が個人住宅建築であったことから、令和5年度文化財保存・活用事業費補助金の計画を申請し、同補助金事業で発掘調査を行うこととした。ただし、令和5年度についてはほかの実施事業もあり、発掘調査と整理作業を行うこととし、調査報告書の刊行については、令和6年度文化財保存・活用事業費補助金の交付を受けて、市教委が実施した。2年次にわたる調査の期間、体制等については例言に記したとおりである。

(2) 調査の経過

1) 発掘経過

- 4月27日 発掘調査開始、表土掘削、グリッド杭打設
- 4月28日 器材運搬、調査区壁面精査、遺物包含層掘削
- 5月2日 事業者が設定した調査位置が数m西へずれていたことが発覚、調査位置の再設定、表土掘削
- 5月9日 事業者が位置出しの杭を復元、調査位置の再設定
- 5月10日 調査範囲計測、グリッド杭打設
- 5月11日 表土掘削、遺物包含層掘削
- 5月20日 調査区内清掃、調査範囲計測
- 5月23日 調査区内全体清掃、全体写真、調査区北壁断面実測、器材搬出
- 5月24日 発掘調査終了、現場引き渡し

2) 整理経過

- 令和5年8月1日から整理作業開始、遺物洗浄・注記、破片接合。
- 令和6年1月4日から遺物実測開始。2月10日から報告書執筆開始。

(3) 遺跡の位置と周辺の環境

中仕田Ⅱ遺跡は、大館盆地と鷹巣盆地に挟まれた丘陵地を早口川が開析した沖積段丘上に位置している。早口川は早口ダム付近を源とし、途中枝沢を集め米代川へと続く全長26.5kmほどの河川である。流域の丘陵は幾筋もの沢に開析されており、早口地区に所在する遺跡の多くは、これらの沢沿いや丘陵の縁辺部に立地している。

遺跡は、この早口川の米代川との合流部から4kmほど遡った左岸に位置している。早口川流域の川や沢沿いには、本遺跡のほか33箇所の遺跡が分布している。縄文晩期前半の石棺墓などが分布する矢石館遺跡、縄文時代後期の集落跡の菅谷地遺跡等の調査結果を考え合わせると、流域は先史時代において格好の生活の場であったことが言える。

本遺跡は、JR早口駅の北西4.2kmほどに位置し、中仕田集落を縦断する市道の南西側に広がっている。包蔵地は、平成9年に田代町史編集委員が実施した分布調査により所在が確認されたもので、面積は約2万㎡と推定される縄文時代中期の遺跡である。今回の調査地区は遺跡の南東寄にあり、110m程度で早口川に面する河岸段丘上にある。調査地内の標高は海拔64mほどで、南西側に向かって緩やかに下る。調査地点の位置は北緯40度17分55秒、東経140度24分56秒付近にあたる。この付近は畑地となっており、遺跡の保存状況は比較的良好い。

(4) 発掘調査の方法

本遺跡では、次年度以降も宅地造成に伴う発掘調査が継続して実施される可能性があるため、遺跡全体に統一した発掘区を設定することにした。街区基準点を基準とし、遺跡全域に基準（A-0）から東西方向をY軸、南北方向をX軸とする座標系によって5m方眼のメッシュをかけた。発掘区の名前は南東側の座標点（Y・X）で表示される。また、調査記録上この発掘区を4等分した小発掘区を設定し、反時計回りにa～dとした。発掘区における公共座標は、F-10区でX=33,250.000、Y=-35,455.000である（世界測地系）。

(5) 層 序

本遺跡の層序は基盤層（申ヶ野軽石質火山灰層）に腐植土層が堆積するだけの単純なものである。層序は以下のとおり。

- I 層 表土・耕作土。平均層厚50cm。
- II 層 黒色～暗褐色土。遺物包含層で平均層厚は25cm。
- III 層 黒褐色～にぶい黄褐色土。漸移層で平均層厚9cm。
- IV 層 黄褐色ローム層。申ヶ野軽石質火山灰の風化層と考えられる基盤層。



図4 中仕田Ⅱ遺跡周辺の地形と調査区 (1 : 2,500)

1 遺 跡

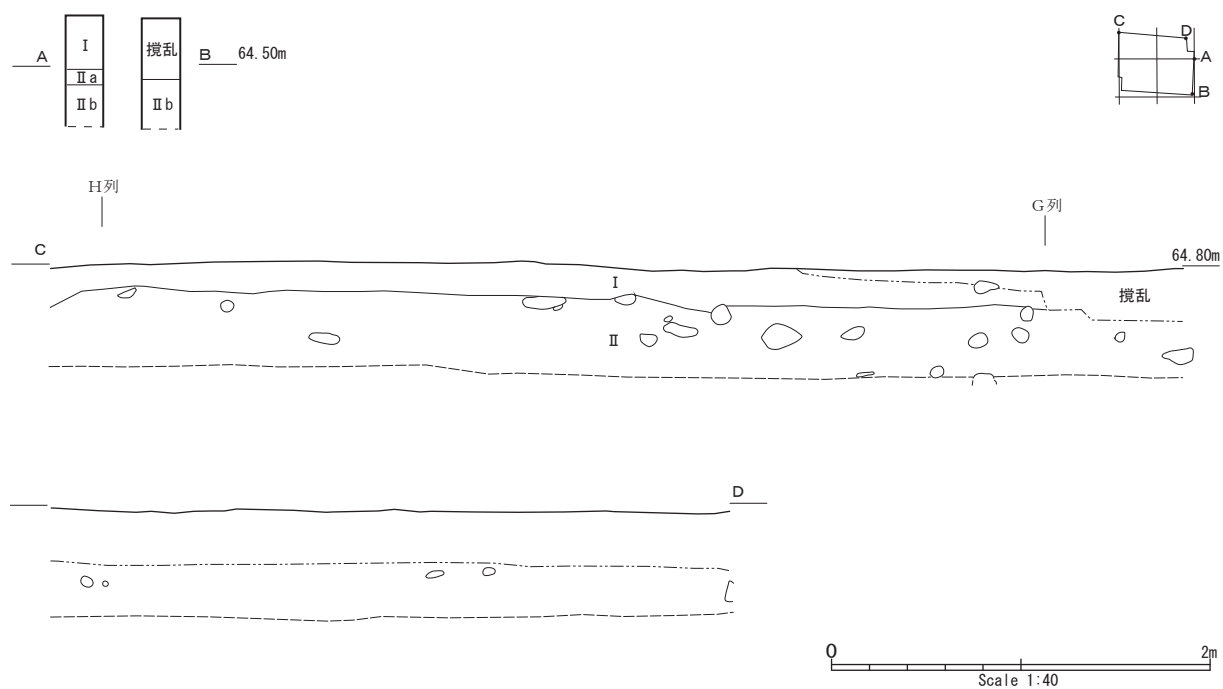


図5 土層断面図

表2 種別遺物一覧

摘 要	P	S	M	C	I	N	計
発掘区	1,114	240	3	6	1		1,364
2022年分	333	55				1	389
合計	1,447	295	3	6	1	1	1,753

表3 種別土器（P）一覧

摘 要	3	4	5	7	8	計
発掘区	1	1,109	1	1	2	1,114
2022年分	4	329				333
合計	5	1,438	1	1	2	1,447

表4 種別石器（S）一覧

摘 要	1						2	3	4	計
	3	4	6	7	9	小計				
発掘区	4	40	10	4	1	59	99	4	78	240
2022年分		1	1			2	8		45	55
合計	4	41	11	4	1	61	107	4	123	295

2 遺 物

本調査では工事により掘削される深さまでを調査対象としたため、発掘はⅡ層内に止まった。したがって、遺構は確認されず、遺物包含層のみ調査した。

(1) 土器

本発掘区で確認した土器は、当市分類4、5群で、ほぼ縄文時代中期後半に相当する4群が大多数である。本群は細分していないが、今回出土した土器は大半が中期末の大木10式併行土器に占められる。

4群 図6-1は最花式。口縁部は磨り消され無文となり、胴部に斜行縄文が付く。

図6-2～16は大木10式併行。2・4・5は頸部に隆帯や耳として粘土紐を貼り付けるタイプである。3は4と同一個体と考えられる。6～12は曲線の沈線が施された土器で、6・7・9・10は口縁部内面に鱗状突起として粘土紐を貼り付けられている。13・14は縄文の地文のみ。15は小型土器の口縁部破片。16は内面に黒色物質が付着する。

胴部より底部にかけての土器と、底部文様を図7-1～7に拓影で図示した。大部分は大木10式併行土器に属すると思われる。2～4・6・7は斜行縄文が施文される。図6-13・図7-5は網代痕をもつ。図7-7は笹の圧痕がつく。

5群 図7-8。十腰内Ⅵ群から大洞B式にかけての縄文後期末～晩期初頭の土器が1点のみ出土した。

(2) 石器

相対的に石器の出土量は少なく、とくに剥片石器は少ない。そのほとんどは4群土器に伴うと考えられる。

スクレイパー 図7-9～11。9は両面加工。いずれもサイドスクレイパー。

敲石 図7-12・13、図8-1。長径12cm前後で長円形。

石皿 図8-2。凝灰岩製の石皿。

その他の石器 図8-3。円礫を板状に割られている。用途不明。

(3) その他の遺物

呪具・土製具 図8-4～6。呪具は土偶の肩から腕部の小破片とみなされる土製品と三角形の土製品が得られている。土製具は4群土器片を使用した円盤状土製品が1点のみ得られている。

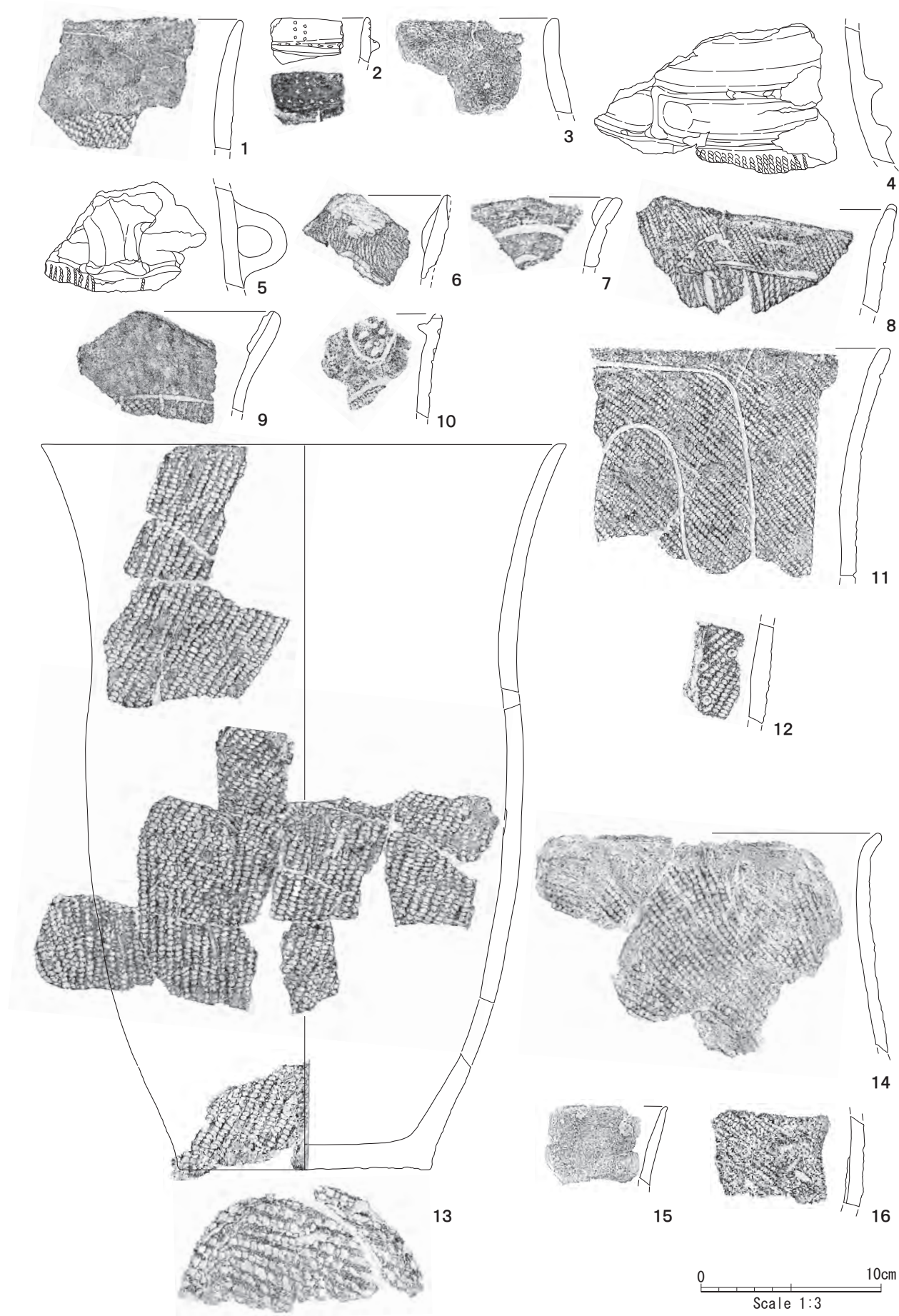


図6 発掘区の土器(1)

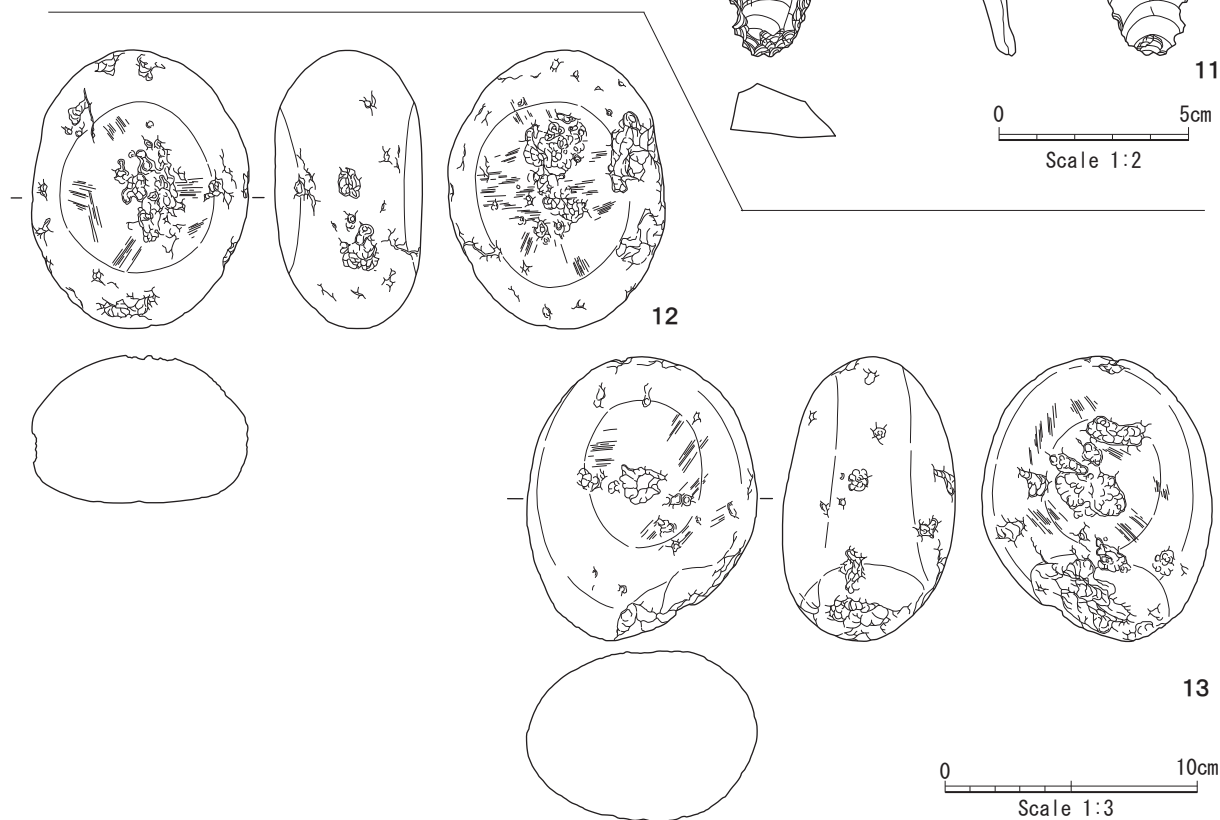
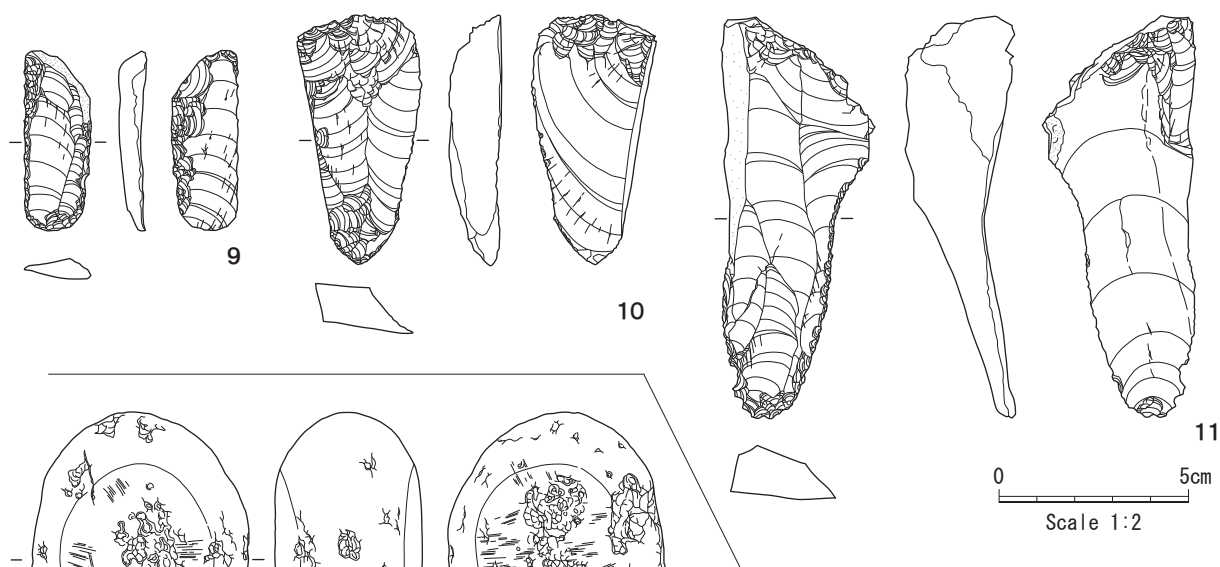
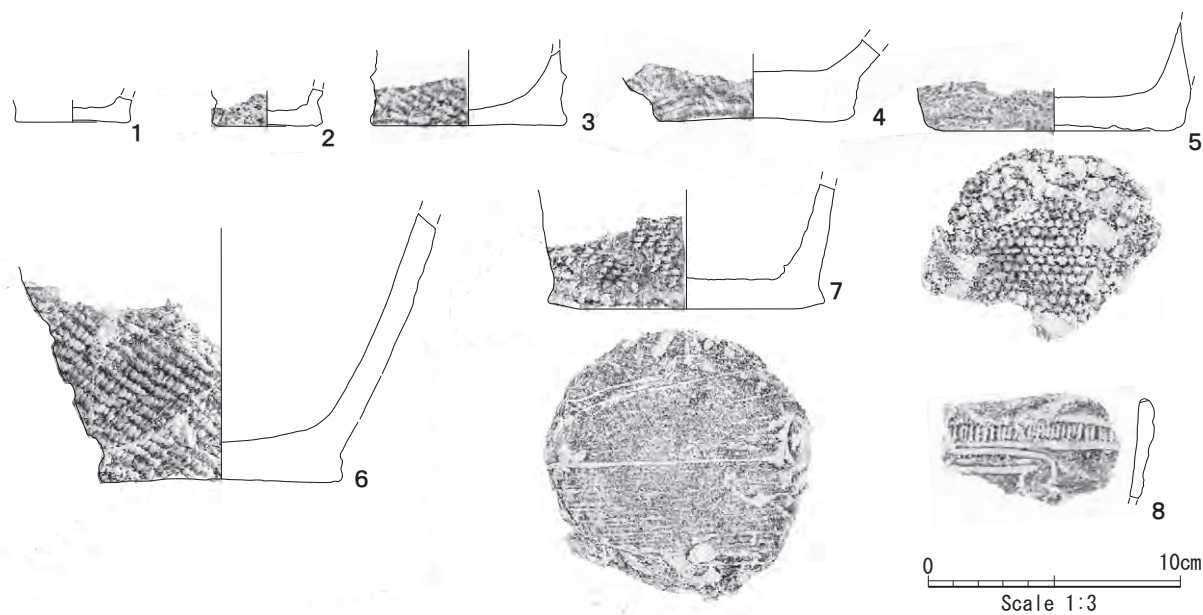


図7 発掘区の土器(2)・石器(1)

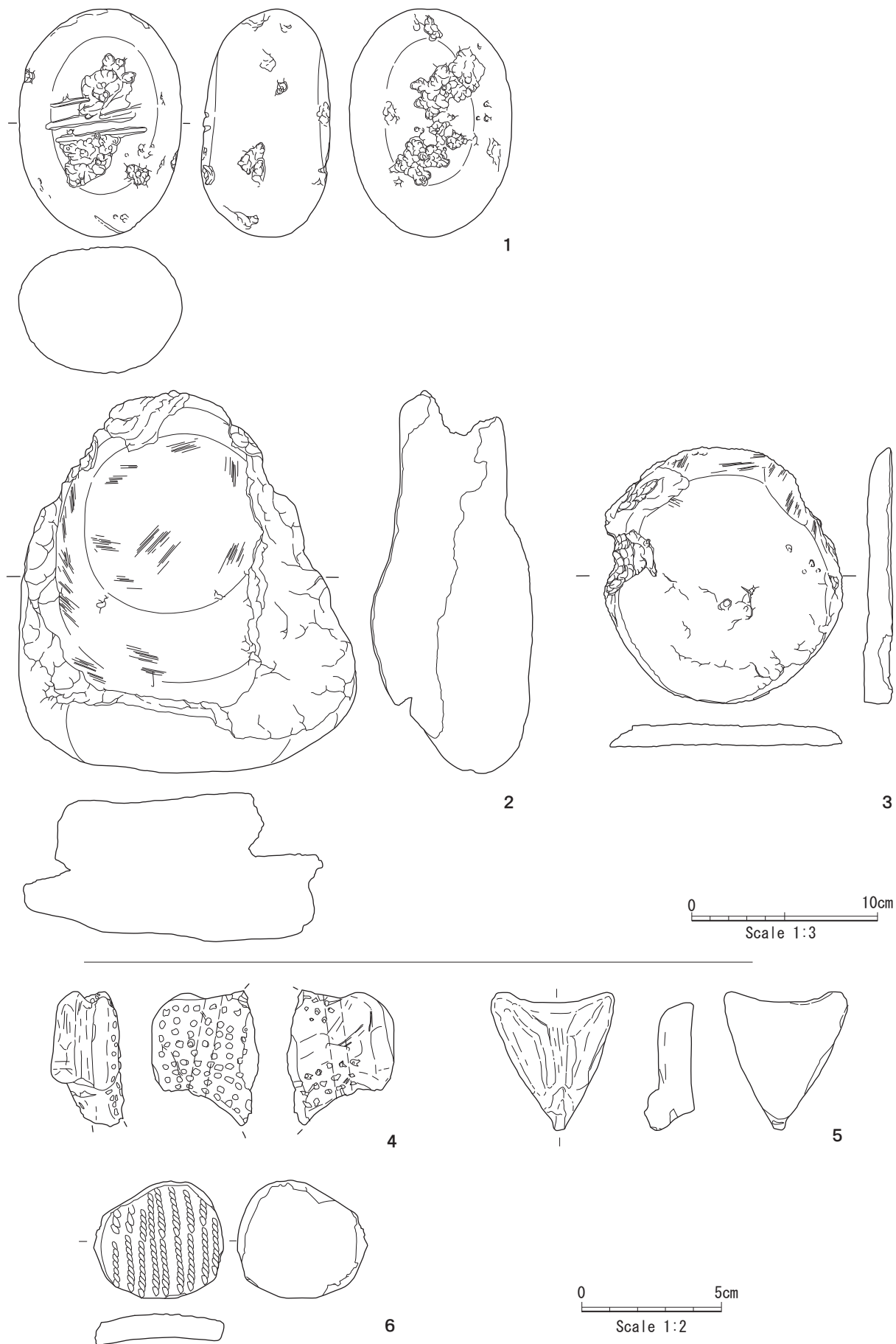


図8 発掘区の石器(2)と呪具・土製具

表5 掲載土器観察表

図番号	調査区	層位	分類	部位	底径 (cm)	外面色調	内面色調	施文文様及び調整	内面色調	備 考
6-1	G-10	II	4	口～胴		5YR6/8橙	10YR8/4浅黄橙	口ミガキ、胴 RLR(横)	ナデ	
6-2	F-10	〃	〃	口		10YR5/3にぶい黄褐	10YR7/4にぶい黄橙	ナデ、刺突	〃	
6-3	G-11	〃	〃	〃		10YR7/4にぶい黄橙	〃	ナデ	〃	6-4・5と 同一個体カ
6-4	〃	〃	〃	頸		10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	r 単絡1	〃	6-3・5と 同一個体カ
6-5	G-11	I・II	〃	〃		10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	r 単絡1、橋状把 手	〃	3点接合、6 -3・4と同 一個体カ
6-6	F-10	II	〃	口		10YR6/4にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	l 単絡?、沈線、 内面鱗状突起	〃	
6-7	G-11	〃	〃	〃		10YR7/3にぶい黄橙	10YR5/2灰黄褐	ナデ、沈線(幅4mm と太め)	〃	
6-8	〃	〃	〃	〃		10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	LR縦斜、沈線(幅4 mmと太め)	ミガキ	
6-9	F-10	〃	〃	〃		10YR7/6明黄褐	10YR6/6明黄褐	ミガキ、沈線(幅2 ～3mm)、LR縦斜、 内面鱗状突起	〃	
6-10	H-10	〃	〃	〃		10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	LR斜→沈線→ミガ キ→沈線・刺突、 内面鱗状突起	〃	
6-11	G-10	〃	〃	口～胴		5YR6/6橙	5YR6/6橙	LR縦斜、沈線(幅 2.5mm)	〃	取上No.4。 L=64.40m、 外面スス状 炭化物付着
6-12	F-10	〃	〃	胴		〃	7.5YR6/4にぶい橙	RL縦斜、沈線、刺 突(竹管状)	ナデ	
6-13	G-11, H-11	〃	〃	口～胴		10YR7/4にぶい黄橙	〃	RL縦斜	ヘラナデ	5点接合、 黒斑あり
	H-11	〃	〃	胴		10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐			10点接合
	G-11	〃	〃	底	14.0		10YR6/3にぶい黄橙			3点接合
6-14	G-11, H-11	〃	〃	口～胴		10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	LR縦斜、ヨコナデ	ナデ	取上No.8。 L=64.45m、 3点接合
6-15	F-10	〃	〃	口		10YR7/4にぶい黄橙	〃	ナデ	〃	
6-16	G-11	〃	〃	胴		10YR7/3にぶい黄橙	〃	LR縦?	〃	内面に黒色 物質付着
7-1	F-10	〃	〃	底	4.6	10YR7/4にぶい黄橙	〃	ナデ	〃	
7-2	F-11	〃	〃	〃	4.4	10YR5/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	〃	〃	
7-3	F-10	〃	〃	〃	7.6	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	RL縦斜、底外ナデ	〃	
7-4	G-10	〃	〃	〃	7.8	10YR5/3にぶい黄褐	10YR6/3にぶい黄橙	l 単絡1	〃	
7-5	F-10	〃	〃	〃	10.0	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	ナデ、底外網代痕	〃	
7-6	G-10	〃	〃	〃	9.6	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	LR縦斜、底外ナデ	〃	取上No.1。 内面スス状 炭化物付着
7-7	G-10	〃	〃	〃	11.0	7.5YR8/6浅黄橙	〃	LR縦斜、底外葉 脈、網代痕	ナデ、指 頭圧痕	
7-8	F-11	〃	5	胴		10YR8/3浅黄橙	10YR4/1褐灰	入組文(沈線)、刻 み(篋状工具)	ナデ	

表6 掲載石器・呪具・土製具一覧

図番号	分類	名 称	調査区	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石 材	備 考
7-9	S1-3	スクレイパー	G-11	II	48	17	7	6.3	珪質頁岩	
7-10	〃	〃	G-12	〃	66	31	13	24.8	〃	
7-11	〃	〃	〃	〃	106	39	20	73.0	〃	
7-12	S1-6	敲石	F-10	〃	111	86	57	722.0	安山岩	
7-13	〃	〃	G-10	〃	113	91	67	786.0	デイサイト	
8-1	〃	〃	G-11	〃	128	88	67	866.0	〃	
8-2	S1-7	石皿	F-11	〃	206	182	84	3,405.0	凝灰岩	
8-3	S1-9	その他の石器	G-11	〃	138	128	13	277.9	デイサイト	
8-4	M	土偶	G-11	〃	48	38	17	31.5		10YR6/3に ぶい黄橙色、 ナデ→刺突、 肩に貫通孔あり
8-5	〃	三角形土製品	F-10	〃	50	44	11	20.9		10YR7/4にぶい 黄橙色
8-6	C	円盤状土製品	G-11	攪乱	42	46	9	20.9		10YR6/3にぶい 黄橙色、r 単絡 1、4群土器を 再利用

発掘区全景 南から



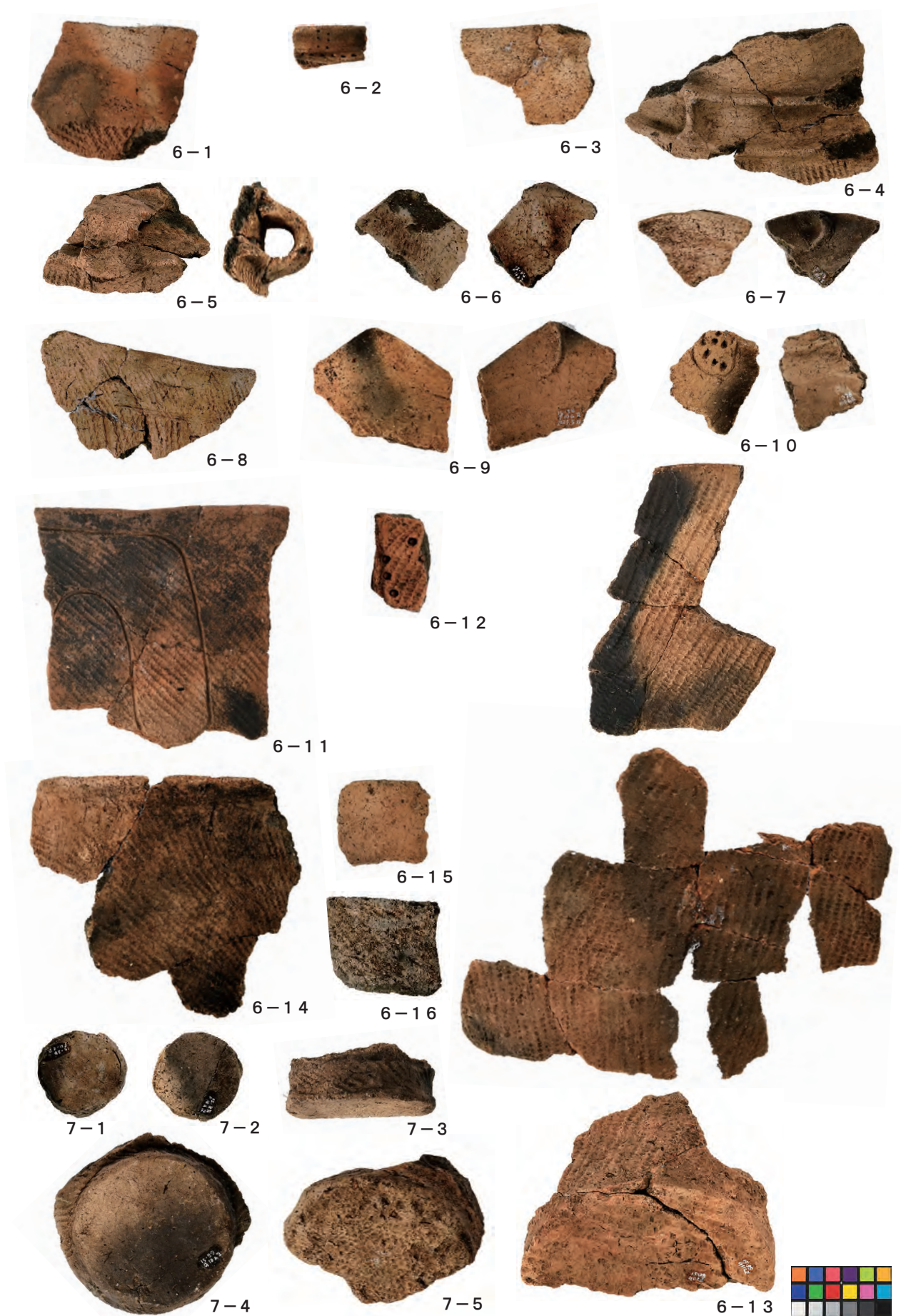
発掘区全景 北から



調査風景 南から



図版 1 中仕田Ⅱ遺跡の調査状況



図版2 発掘区の土器(1)



図版3 発掘区の土器(2)・石器・呪具・土製具

Ⅱ 金坂遺跡

1 遺 跡

(1) 遺跡の概要

金坂遺跡（秋田県教育委員会登録番号 204-4-47）は、J R花輪線東大館駅より北東へ約1.5kmに位置し、市道八幡神社線の北側に拵がっている。包蔵地は、平成元年に大館市教育委員会（以下市教委）が実施した分布調査で所在が確認され、面積は、約7,900㎡に及ぶものと推定される。

包蔵地の所在する八幡町周辺は、慶長15年に入植した大館給人の八幡町（虻川2023）にあたり、古くから居住地及び農地として利用されてきた地域である。包蔵地周辺は、その後、昭和30年代から、急速に宅地化が進み、現在も包蔵地周辺の開発の波は続いている。

(2) 調査の経緯

金坂遺跡は市教委によって、令和4年に宅地整備に起因する発掘調査が実施されている。本調査も、上述した宅地化の波に起因するものである。以下、調査の経緯について簡潔に記す。

令和5年1月、令和4年の調査地区に隣接する地域で宅地整備工事を実施したいとの事前協議があった。協議地は字八幡9-2ほかの300㎡。当該地は市教委による試掘調査の結果（令和3年6月実施）、平安時代～中・近世の遺構・遺物が発見された地区である（大館市教育委員会2022）。このため、事業着手前に確認調査が必要な旨を回答し、同年3月6日に地権者から調査依頼文書が提出された。この依頼を受け、市教委は、5月25日～6月8日にかけて後述する確認調査を実施し、7月14日付けでこの調査結果を秋田県教育委員会（以下「県教委」という）に報告した。県教委は対象地内における埋蔵文化財を保護すべき旨の見解であった。地権者は敷地を市道面まで土取りすることを希望したが、建築を急いでいたことから、発掘調査を実施する期間が取れなかった。このため、県教委・市教委・事業者間で協議した結果、土取り工事による掘削深度を表土（深さ約30cm）までに止めることに変更し、現状保存し、工事立会で工事することで合意した。宅地造成工事は令和5年11月に、住宅建築及び外構工事は令和6年2月～6月に実施され、述べ352㎡について工事立会を行った。しかしながら、市道からの住宅入口部分については切土を避けられないため、令和6年度に国・県費の補助を受け、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。今年度の調査期間等については、例言に記したとおりである。

(3) 調査の経過

本格調査から報告書刊行までの経過概要は以下のとおりである。

令和6年（2024）

- 7月9日 本格調査開始、人力による表土掘削
- 7月13日 遺構確認開始、遺構掘削調査開始
トータルステーションによる平面図作成開始
- 7月24日 遺構掘削調査終了

7月25日 全面清掃、調査区全景写真撮影

基本層序確認

7月27日 発掘調査終了

7月30～31日 遺物洗浄作業

8月1日 遺物大別・接合・注記作業開始

8月3日 遺物接合・注記作業終了

8月6日 写真整理

令和7年(2025)

1月24日～2月14日 遺物実測作業

1月28・31日 遺物写真撮影

2月4～14日 遺物実測図トレース作業

2月12日 報告書原稿執筆開始

3月29日 報告書印刷製本終了

(4) 遺跡の位置と周辺の環境

金坂遺跡は北緯40度16分25秒、東経140度34分9秒に位置する(世界測地系)。大館市内で確認されている埋蔵文化財包蔵地の多くは大館盆地内の段丘や台地上に分布する。金坂遺跡も大館段丘北縁部に位置しており、通称「金坂」と呼ばれる坂道の東岸に拡がっている。金坂遺跡は標高71～74mの平坦面に立地しており、東から西へ緩やかに下る。遺跡の北側は段丘崖となっており、低位面との比高差は、10mほどである。

本遺跡は令和3年度に今回実施した調査範囲を含むエリアについて試掘調査を実施し、遺構は平安時代の竪穴住居跡のカマドと考えられる焼土1箇所、中世と推定される竪穴建物跡1軒と溝跡4条、焼土3箇所、遺物は陶磁器146点、石器類3点、土製品1点を得ている。また、令和4年には今回の調査地の東側隣接地で発掘調査を実施し、縄文時代の落とし穴2基を検出し、江戸時代の区画溝や池跡、江戸時代の遺物を得た。

遺跡の周辺には、東約200mに貞享4年建立の社殿が現存し、重要文化財に指定されている八幡神社、西隣に大館城跡、南約1kmに縄文時代中期と平安時代の集落跡である扇田道下遺跡(4-65)が存在する(図1)。

本遺跡内及びその周辺は住宅地となっており、遺跡が比較的良好に残されている当地にも宅地化の波が押し寄せ始めている。

なお、遺跡周辺の先史～古代の歴史的環境については、『土飛山館跡―片山自歩道事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』(秋田県埋蔵文化財センター編2007)や『扇田道下遺跡発掘調査報告書』(大館郷土博物館編2013)、江戸時代の八幡町については、『金坂遺跡・大館市内遺跡詳細分布調査報告書(7)』(大館市教育委員会2023)に記述されているので、そちらを参照されたい。

(5) 調査の方法と層序

1) 発掘区の設定

発掘区は、令和3年の試掘調査時に設定した座標系に準拠して設定した。X軸は真北方向と平行す

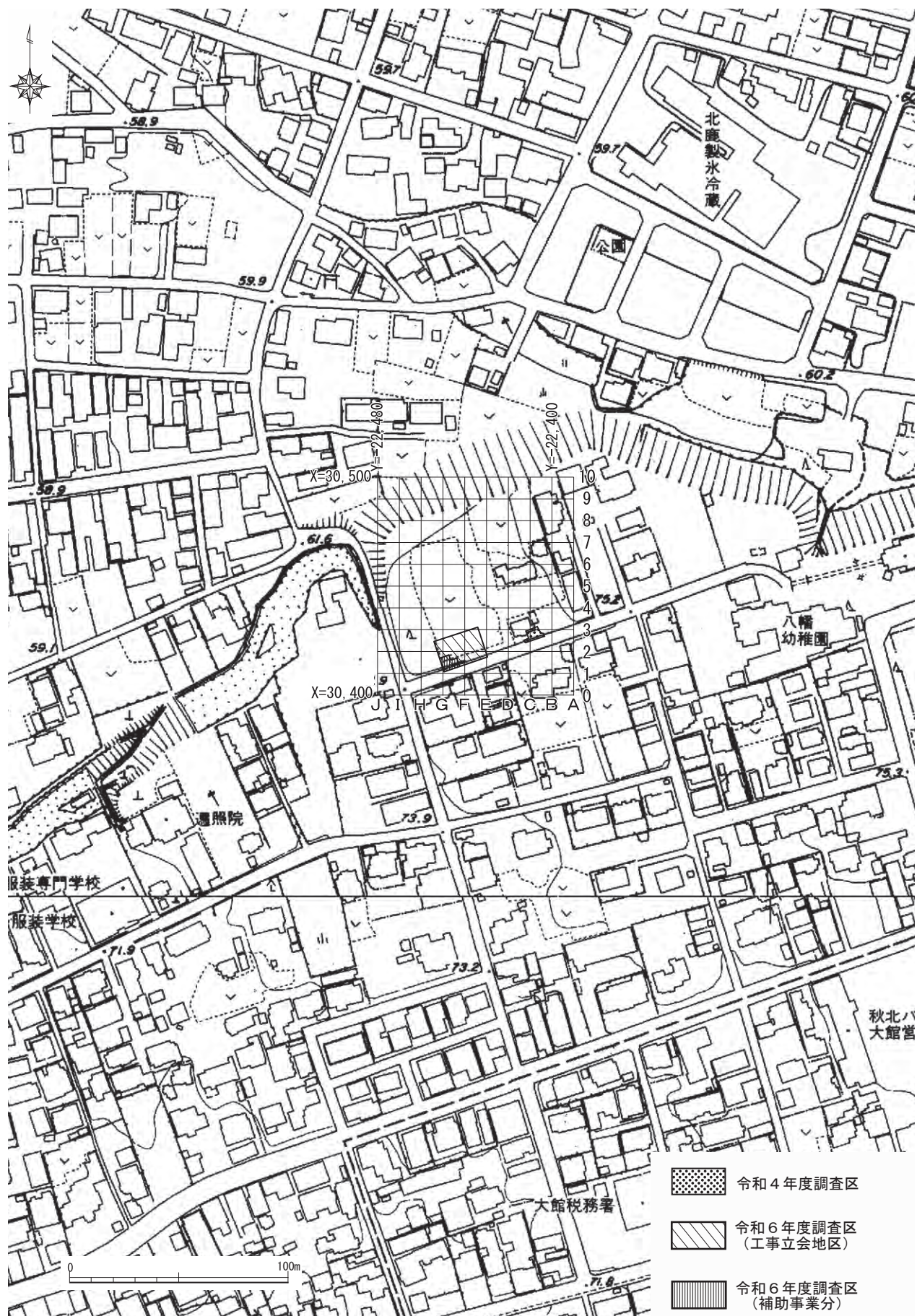


図9 金坂遺跡周辺の地形と調査区 (1:2,500)

る。発掘区は10×10mを単位とし、名称は南東隅の座標（Y－X）で表示される。

調査区内の地表面は耕作により攪乱を受けている。遺物包含層の残存状態は表土が厚く堆積しており、比較的良好である。

I 層 耕作土。厚さはおおよそ20～30cmほどで、宅地造成工事で除去された。

II 層 黒色腐植土。薄いところでは5cmほど、厚いところでは50cmを超える。a・b層に細分され、上部は固く締まる。

III 層 黒褐色～にぶい黄褐色を呈するいわゆる漸移層で10cm±の厚さである。

IV 層 基盤の黒褐色～黄褐色ローム層。砂質で、固い層である。

(6) 調査結果の概要

今回の調査では、大きく、中世～安土桃山時代に属すると考えられる遺構と江戸時代以降の遺構及び遺物群が検出された。

中世～安土桃山時代に属すると考えられる遺構は、調査区内に点在しており、遺物は得られていない。江戸時代以降の遺構群は、調査区全域から検出された。このうち、特筆されるのは、侍屋敷の基礎柱穴の発見である。調査地周辺は、前述のとおり、大館給人の給地にあたり、慶長15年以降明治時代まで、居住地として利用されてきた場所である。基礎柱穴は、調査区全域に分布している。調査区外に拡がっており、全容は把握できなかった。これらの基礎柱穴の他には、柱列1条、溝1条、用途不明の大型の掘り込みなどの生活遺構が検出されている。

表7 時代別種別遺構一覧

時 代	掘立柱建物跡	竪穴建物跡	柱列	土坑	溝跡	炉跡	柱穴・柱穴様ビット	計
中世～安土桃山時代		1				2		3
江戸時代以降	1		1	1	1		1	5
中世～近世							23	23
計	1	1	1	1	1	2	24	31

表8 種別遺物一覧

種 別	P	S	C	I	計
遺構	16		3	1	20
発掘区	150	3			153
合計	166	3	3	1	173

表9 種別陶磁器・土器一覧

摘 要	8			計
	1. 磁器	2. 陶器	3. 土器	
遺 構	9	7		16
発掘区	108	33	9	150
合計	117	40	9	166

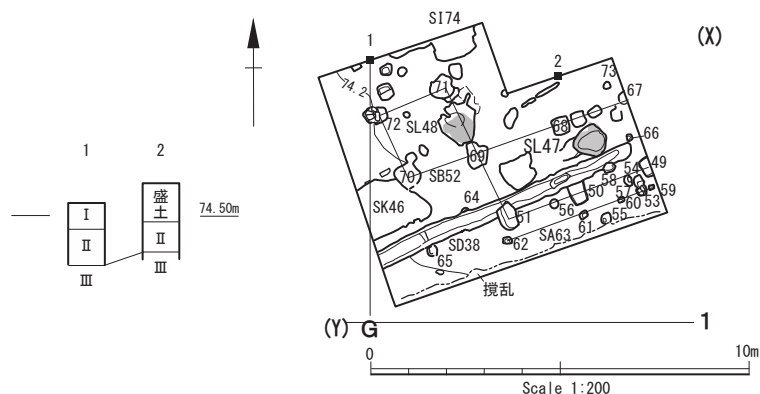


図10 遺構の位置、土層柱状図

2 中世～安土桃山時代の遺構

(1) 概 要

中世～安土桃山時代に属すると考えられる遺構は、竪穴建物跡1軒、炉跡2基、計3基検出された。これらの遺構は調査区内に点在して分布している。出土遺物は、上述した遺構から近世磁器が得られている程度で、明確に当該期に位置付けられる遺物は得られていない。

(2) 遺 構

前述の通り、竪穴建物跡1軒、炉跡2基が検出された。竪穴建物跡は、人為的に埋め戻されたものとみられる。南側の一部を確認したのみで、平面形が不明であるが、隅丸方形を呈するものと考えられ、壁は急斜土で立ち上がる。工事ではIV層以下は掘り下げないため、調査では確認面で発掘を停止した。

炉跡は、径1m前後で、竪穴建物跡の南側に分布している。

1) 炉 跡

S L 47

位置 F—1 a・b区に位置する。南側の一部は、S D38に切られている。

遺構 II b層上面で確認された。平面形は、確認面で東西方向を長軸とする長円を呈する。平面の規模は確認面で長径1mほど、短径0.9mほど、確認面からの深さは20cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は浅皿状に撓む。埋土は、色調により13層に細分される。2・3層は酸化焰により焼土化した層。6・7層は焼土粒が混入していることから、人為的な埋土である。

遺物 伴出遺物はなく、上面から近世染付磁器2点、炉壁の可能性のある粘土塊の小片2点が出土したのみである。

時期等 上面から炉壁の可能性のある粘土塊、付近から埴塼が出土しているため、溶解炉の可能性はある。

S L 48

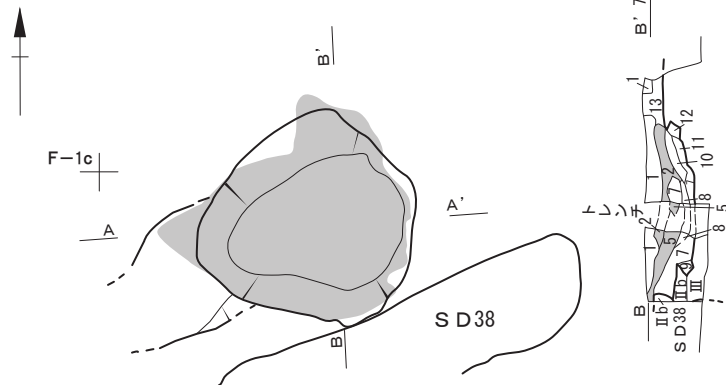
位置 F—1 c・d区に位置する。

遺構 II b層中で確認された。平面形は、確認面で南北方向を長軸とする歪な長円を呈する。平面の規模は確認面で長径1.5mほど、短径1.0mほど、確認面からの深さは30cmほどである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は幾分凹凸がある。埋土は、色調により14層に細分される。1・4・9層は赤色に酸化した層である。焼土ブロックなどを含む人為的な堆積の様相を示している。

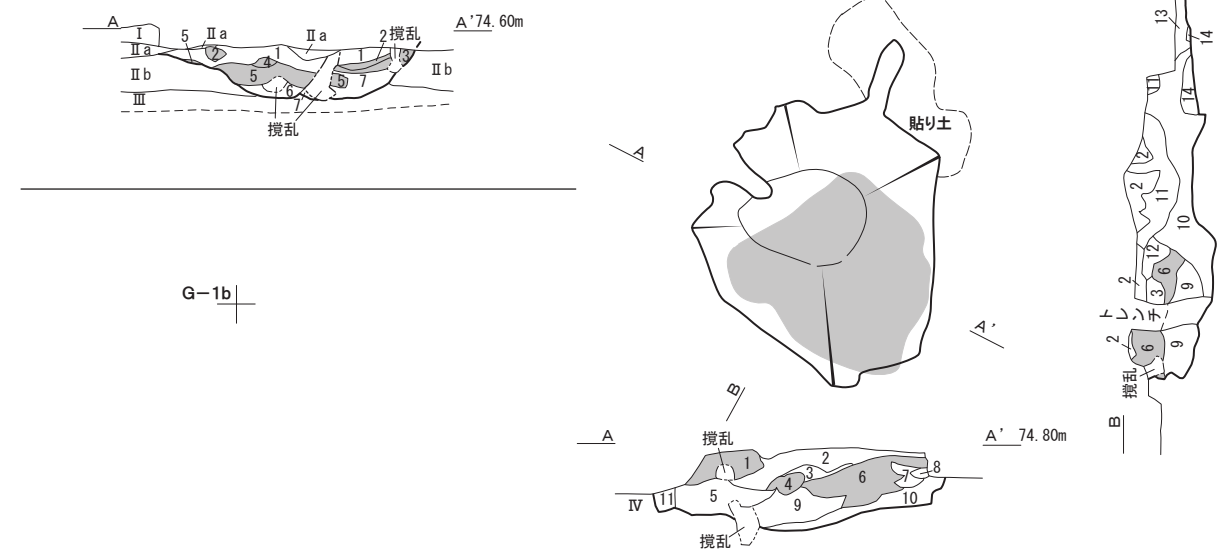
遺物 伴出遺物はなく、上層から近世の染付1点、1層から炉壁の可能性のある粘土塊1点が出たのみである。図11-1は染付磁器の口縁部破片。口縁部外面に2条の圈線がめぐる小碗。図11-2は炉壁かと思われる。小片のため、詳細は不明であるが、平坦な面をもつ。被熱はしていない。

時期等 炉壁の可能性のある粘土塊が出土していることと、付近から埴塼が出土しているため、溶解炉の可能性はある。時期は伴出遺物がなく決め手に欠けるものの、竪穴建物跡と近接していることから、中世～安土桃山時代と考えられる。

SL47



SL48



S L 47

- | | | |
|----|---------------|-----------------------------|
| 1 | 10YR2/2黒褐色 | シルト。焼土粒、炭化物少量混入。固く締まる。粘性なし。 |
| 2 | 10YR4/4褐色 | 焼土。固く締まる。粘性なし。 |
| 3 | 10YR4/3にぶい黄褐色 | シルト。焼土。IV。締まりよし。粘性なし。 |
| 4 | 10YR2/3黒褐色 | 焼土粒少量混入。固く締まる。粘性なし。 |
| 5 | 7.5YR4/4褐色 | 焼土。固く締まる。粘性なし。 |
| 6 | 10YR3/2黒褐色 | 焼土多量混入。固く締まる。粘性弱。 |
| 7 | 10YR2/2黒褐色 | 焼土粒少量混入。締まりあり。粘性弱。 |
| 8 | 10YR4/2灰黄褐色 | 締まりあり。粘性弱。 |
| 9 | 10YR2/1黒色 | 焼土粒多量混入。締まりあり。粘性弱。 |
| 10 | 10YR2/1黒色 | 焼土粒多量混入。固く締まる。粘性弱。 |
| 11 | 10YR2/2黒褐色 | 焼土粒多量混入。固く締まる。粘性あり。 |
| 12 | 10YR2/1黒色 | 焼土粒少量混入。締まりなし。粘性弱。 |
| 13 | 7.5YR3/2黒褐色 | 黒色土多量混入。締まり、粘性弱。 |

0 1m
Scale 1:30

S L 48

- | | | |
|----|-------------|-------------------------------|
| 1 | 7.5YR5/6明褐色 | 焼土。木の根の攪乱による黒色土混入。締まり弱。粘性なし。 |
| 2 | 10YR2/1黒色 | 焼土ブロック少量混入。締まりなし。粘性弱。 |
| 3 | 10YR2/1黒色 | 焼土粒少量混入。締まり弱。粘性あり。 |
| 4 | 7.5YR4/4褐色 | 焼土。黒色土混入。締まり、粘性弱。 |
| 5 | 10YR2/2黒褐色 | 焼土ブロック、ローム粒少量混入。締まりあり。粘性弱。 |
| 6 | 7.5YR4/6褐色 | 焼土。固く締まる。粘性弱。 |
| 7 | 10YR2/1黒色 | 締まりあり。粘性弱。 |
| 8 | 10YR3/3暗褐色 | シルト。焼土粒多量混入。締まりあり。粘性弱。 |
| 9 | 10YR3/3暗褐色 | 砂質。締まり、粘性なし。 |
| 10 | 10YR2/2黒褐色 | 砂質。締まりあり。粘性なし。 |
| 11 | 10YR2/2黒褐色 | 焼土ブロック多量混入。締まりあり。粘性弱。天井部崩落土か。 |
| 12 | 10YR2/2黒褐色 | 焼土粒多量混入。柔らかい。粘性弱。 |
| 13 | 10YR2/3黒褐色 | 締まり、粘性なし。 |
| 14 | 10YR2/2黒褐色 | 締まり、粘性なし。 |

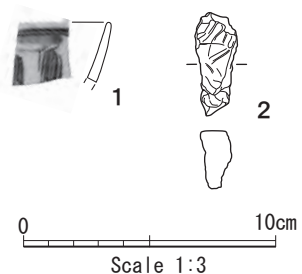


図11 S L 47・48と出土遺物

3 近世の遺構と遺物

(1) 概 要

調査区内からは、前述の通り、侍屋敷の基礎柱穴、柱列、溝跡のほか、掘り込みなど、江戸時代以降に設けられた生活の施設跡とみさなされる遺構が多数検出された。これらは調査区全域に分布し、調査区外にさらに拡がっている（図12）。

(2) 遺 構

侍屋敷の基礎柱穴は、調査区全域に分布しており、総計9基検出された。これらは、屋敷南側部分の間取を構成する基礎柱穴とみなされる。柱列は、基礎柱穴の南側から1条検出された。また、それに平行して溝跡が1条検出された。基礎柱穴と重複し、これよりは古い区画溝と考えられる。このほか、大型の掘り込みが調査区南西部から1箇所検出された。これについては検出に止めたのみであり、屋敷と関連する生活遺構であったことが推察されるものの、記録などがなく、詳細については不明である。

1) 侍屋敷基礎柱穴

S B 52

位置 F・G-1区に位置し、調査区外にさらに拡がる。S P 51はS D 38を切る。

遺構 検出された基礎柱穴の配列は、図14に示すとおりで、検出された範囲では東西3間、南北2間である。屋敷の向きは、奥側（S P 67～70）の軸が真北より70° 東偏しており、図12・14に示すと

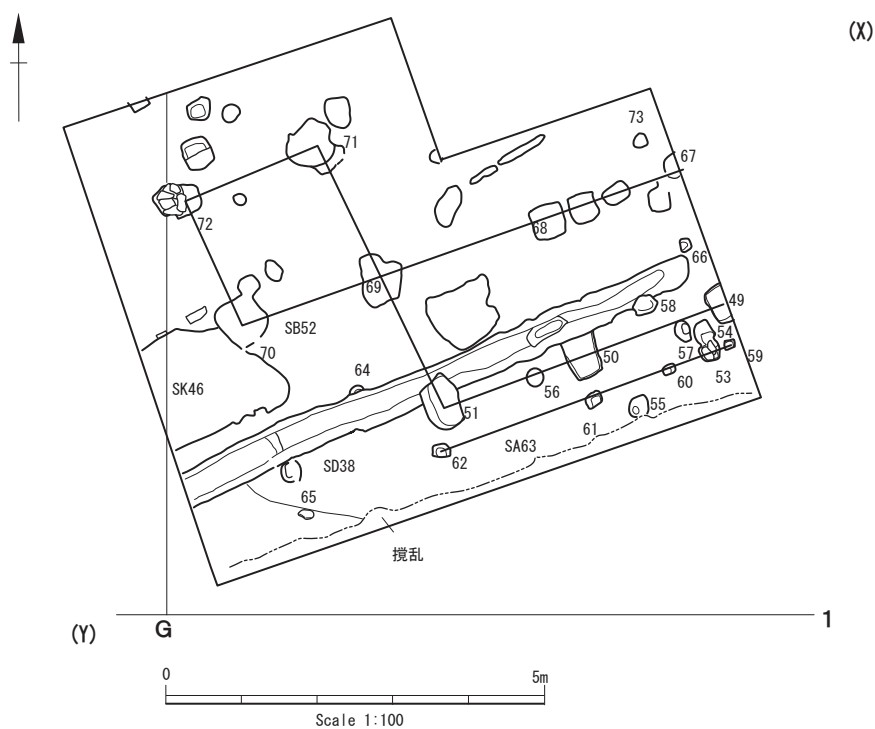


図 12 近世の遺構位置図

おり、市道八幡神社線とほぼ平行に建てられていたと判断される。図13は昭和62年の大館市現況図の八幡神社線と赤館町金坂線の道路幅と調査結果を組み合わせで作図したものである。この図を基に屋敷と道路の位置関係をみると、正面入り口側と推測される部分から八幡神社線までは約1.7m（約1間）、赤館町金坂線までは約21m（11.6間）ほどとなる。

柱穴は、1間（約1.9m）を基本に配されている。柱穴の平面形はいずれも隅丸方形で、規模は50～70cm内外である。完掘したS P 49～51の深さは、確認面のIV層上面からもっとも深いもので29cm、浅いもので14cm、平均23cmほどである。基礎柱穴は掘立柱式によるものである。ちなみに、柱穴周辺における調査前の地表面～IV層上面までの層厚が70cmほどであることから類推すれば、基礎柱穴は、少なくとも地表面から1m前後掘られていたことがいえる。柱は解体時に抜かれたものか、柱痕跡は確認されず、柱掘り方が検出されたのみである。なお、S P 65・67・72の西隣から集石がそれぞれ検出されており、掘立柱建物から礎石建物へ建て替えられた可能性が考えられる。

遺物 遺物はS P 68から細片が1点（図15－1）、S P 71から陶器片1点、鉄製品1点が得られた（図15－2・4）。図15－2は皿の底部で、肥前産である。製作年代は17世紀前葉である。4は棒状鉄製品で器種不明である。

2) 柱列

S A 63

位置 F－1区に位置する。調査区の南端にあたる。S B 52とS D 38が平行して近接する。

遺構 規模は東西4mで、4基の柱穴で構成されるが、調査区外の東にさらにのびる可能性がある。主軸方向はN－69°－E。柱間寸法は東から0.9・1.05・2.15mを測る。埋土はいずれも黒色土である。遺物は出土していない。

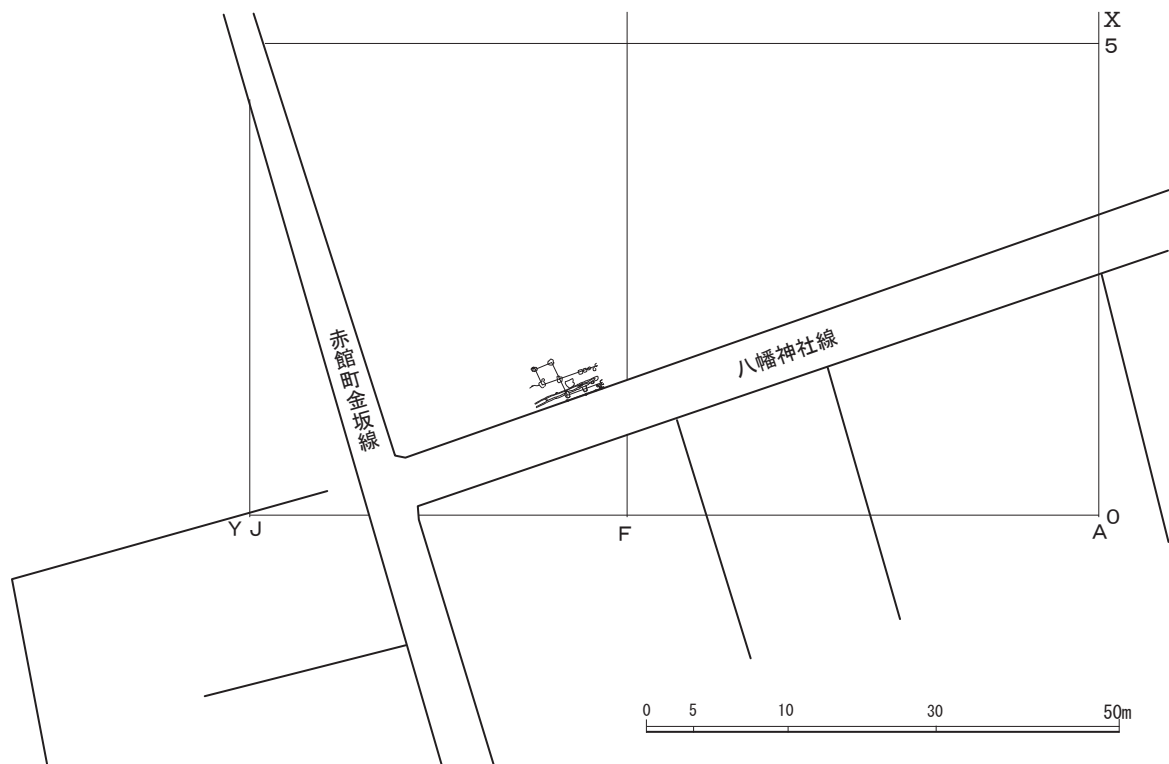


図13 八幡神社線と侍屋敷の位置

SB52

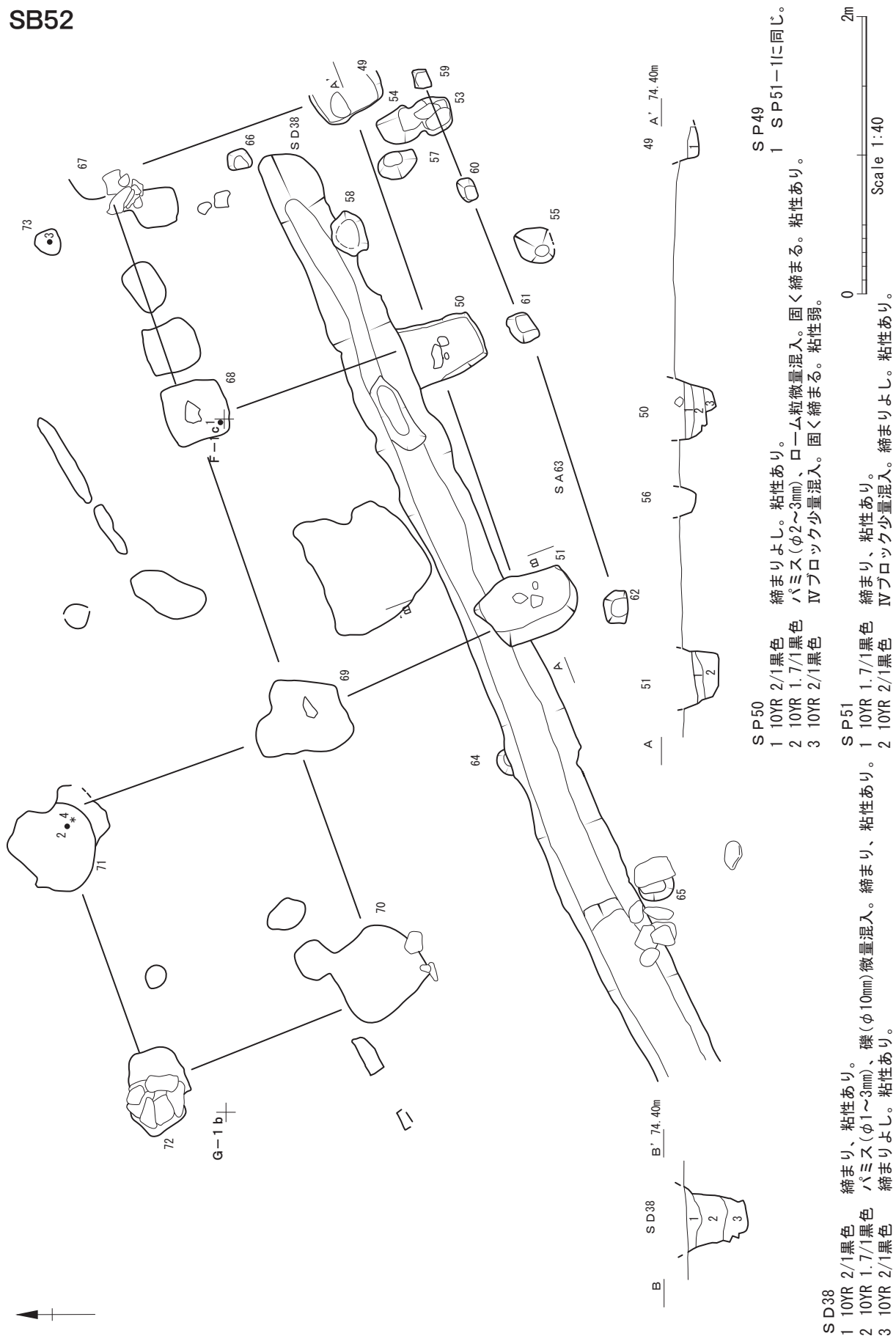


図14 侍屋敷の基礎跡・柵跡・溝跡

3) 溝跡

S D38

位置 F-1区に位置し、東西にのびる溝で、西側は調査区外にのびる。前述のとおり、S L47を切り、S P51に切られる。

遺構 確認された溝の長さは7.3mほどであるが、令和4年度の工事立会時に検出された溝と同一の溝とみられ、全長12.1mほどと推定される。幅は0.37～0.51m、確認面からの深さは44cmを測る。壁面は比較的急に立ち上がり外傾する。底面はほぼ平坦であるが、西側に段差があり深くなる。

確認された溝の埋土は3層に区分される。黒色土を主体とし、2層は微量のパミスと礫を含む。遺物は出土していない。

4) 土坑

S K46

位置 S A63の北西側3mほどにあり、西側はさらに調査区外に拡がる。

遺構 工事で掘削されるIV層上面までで掘り下げを停止したため、一部を調査したのみであるが、検出した範囲では1.5mほどの長円を呈した土坑である。

遺物 上面から8点の陶磁器が得られた。図16-1～3は磁器の染付の碗。4～7は陶器。4は小碗、5は中碗。6は播鉢。7は瓶。

5) 柱穴

調査区内からは建物跡や柱列等にならなかった柱穴・柱穴様ピットが23基検出された。これらの用途・時期については不明な部分が多いが、多くは近世に位置付けられると考えられる。S D38以北は検出で発掘を停止したため、遺物はS P73から肥前産とみられる陶器が1点出土したのみである。

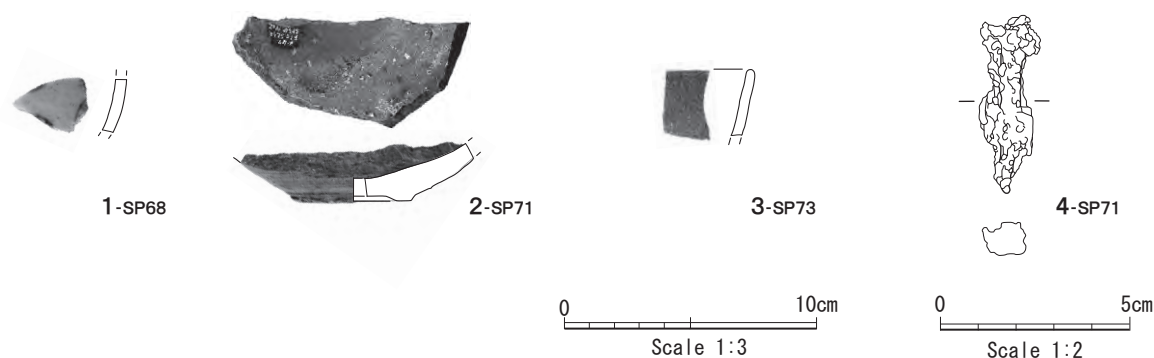


図15 侍屋敷基礎柱穴出土遺物

SK 46

G-1 b



0 1m
Scale 1:20

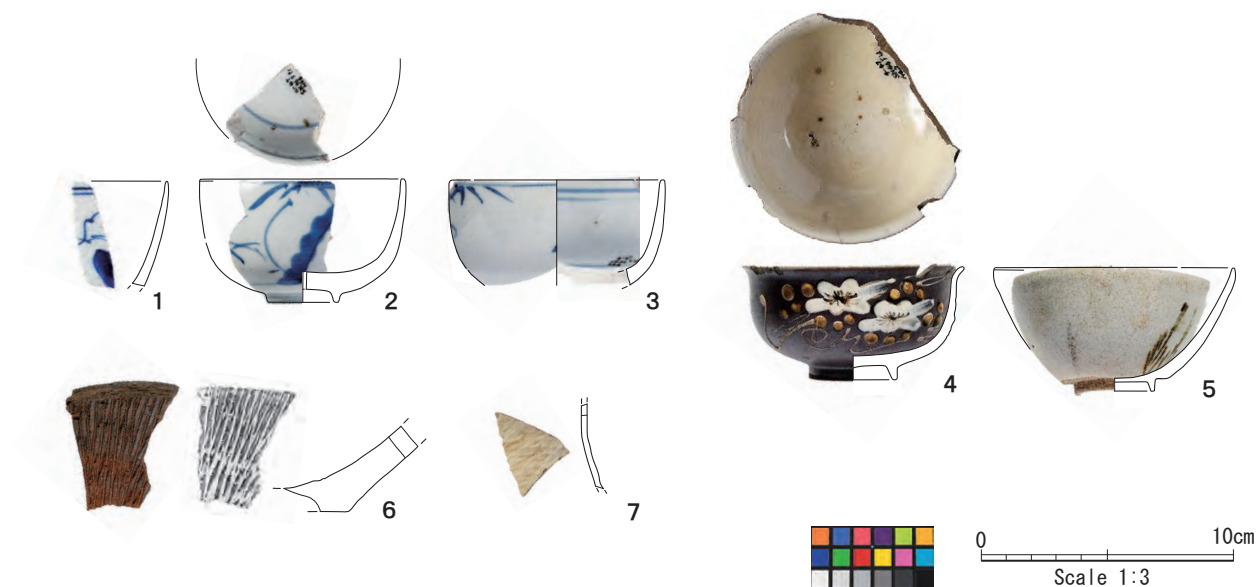


図16 土坑46と出土遺物

4 発掘区の遺物

(1) 陶磁器・土器

発掘区から得られた陶磁器・土器は150点あるが、いずれも近世のものである。

1) 磁器 (図17)

碗類、皿類に大別できるほか、瓶類、段重、仏飯器がわずかにある。このうち、主体を占めるのは碗皿類である。

碗類 (1～6) いずれも染付で草花文や山水文が描かれたものである。1は花、2は帆掛け舟とみられる。3は振子花と霊芝が描かれており、口縁部内面に圈線も2本みられる。4～6は碗の底部で、4・5は肥前産。4は体部外面に染付され、高台部に圈線が1本めぐり、高台脇に砂が付着している。5は体部に草花文を染付し、底部外面に渦福が描かれている。6は広東形を呈している。外面に草花文が描かれている。

皿類 (7～13) 7は小皿、8は五寸皿。7は内面のみ染付されるが、汚れのためよく見えない。8は内面と口縁部外面に染付される。9は見込みに雨竜が描かれ、高台内に放射状のカンナ削りが施されている。10は3個で一の松竹梅を構成するとみられる。高台部には2本の圈線がめぐる。11は見込みに蛇ノ目釉剥ぎされ、渦状の文様が染付される。12・13は見込みに発色のよい染付が描かれるのが特徴的である。12は見込みに五弁花文を、13は高台内に角福を染付している。

14は大型の皿か鉢。口縁部外面に唐草文が描かれ、口縁部内面に圈線が1本めぐり、その下に濃みで染付されている。

瓶類 (15～17) 15は体上半がくびれる器形で、花が描かれている。16は鶴頸逆蕪形かと思われる。外面には蛸唐草文が描かれている。17は外面のみ釉がかかり、無文である。

段重 (18) 焼成に失敗し、染付が黒色となっている。

仏飯器 (19) 口縁部を欠くが、体部下半には横走する圈線が描かれている。

2) 陶器 (図17・18)

大きく、碗類、皿類、鉢類、播鉢類、鍋類、器台類に区分できる。

碗類 (20～22) 20は杉形で、無文である。21は内外面に刷毛目文が描かれている。22は筒形の碗である。灰釉で内外面に貫入が入る。

皿類 (23・24) 23は、内面に銅緑釉が施され、見込み蛇ノ目釉剥ぎである。24は大型の皿または鉢である。見込みに砂胎土目の溶着痕がみられる。内外面に鉄釉が施されている。

鉢類 (25) 体部内外面に刷毛目文の縞がみられる。体部下半から高台部はロクロケズリである。

播鉢 (26・27、図18-1～3) 26・27は口縁部外面に凸形の稜をもつ器形で、全面に鉄釉が施されている。図18-1～3は大型の播鉢。

鍋類 (4) 耳付の鍋。

器台類 (5) 灯明受皿。

3) 土器 (6～9)

6～8は土器で、土風炉かと思われる。9は金属生産関連遺物の埴塼。

(2) その他の遺物

10は磁製品。色絵で人形か水滴。11は石製品の砥石。

4 発掘区の遺物

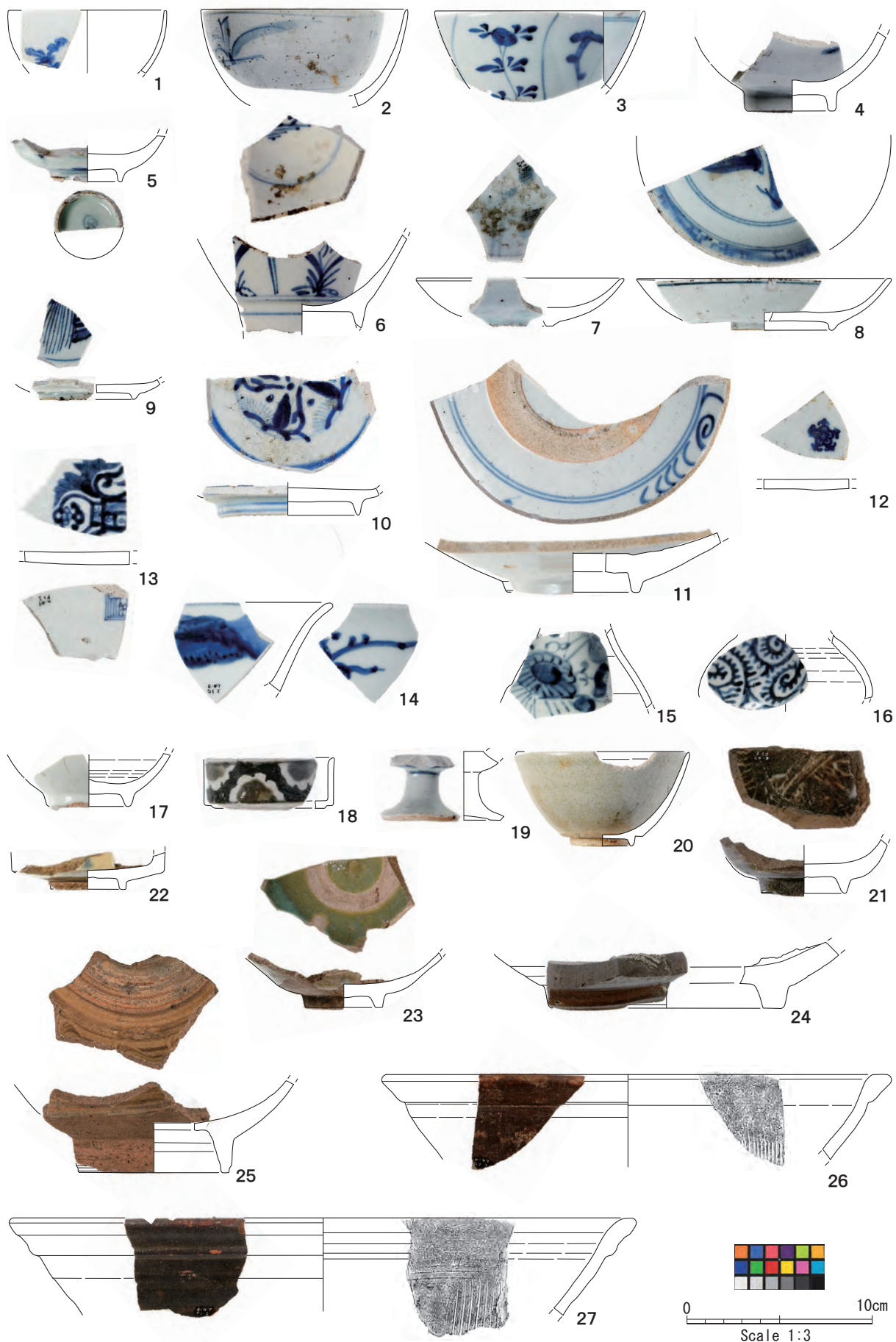


図17 発掘区の遺物(1)

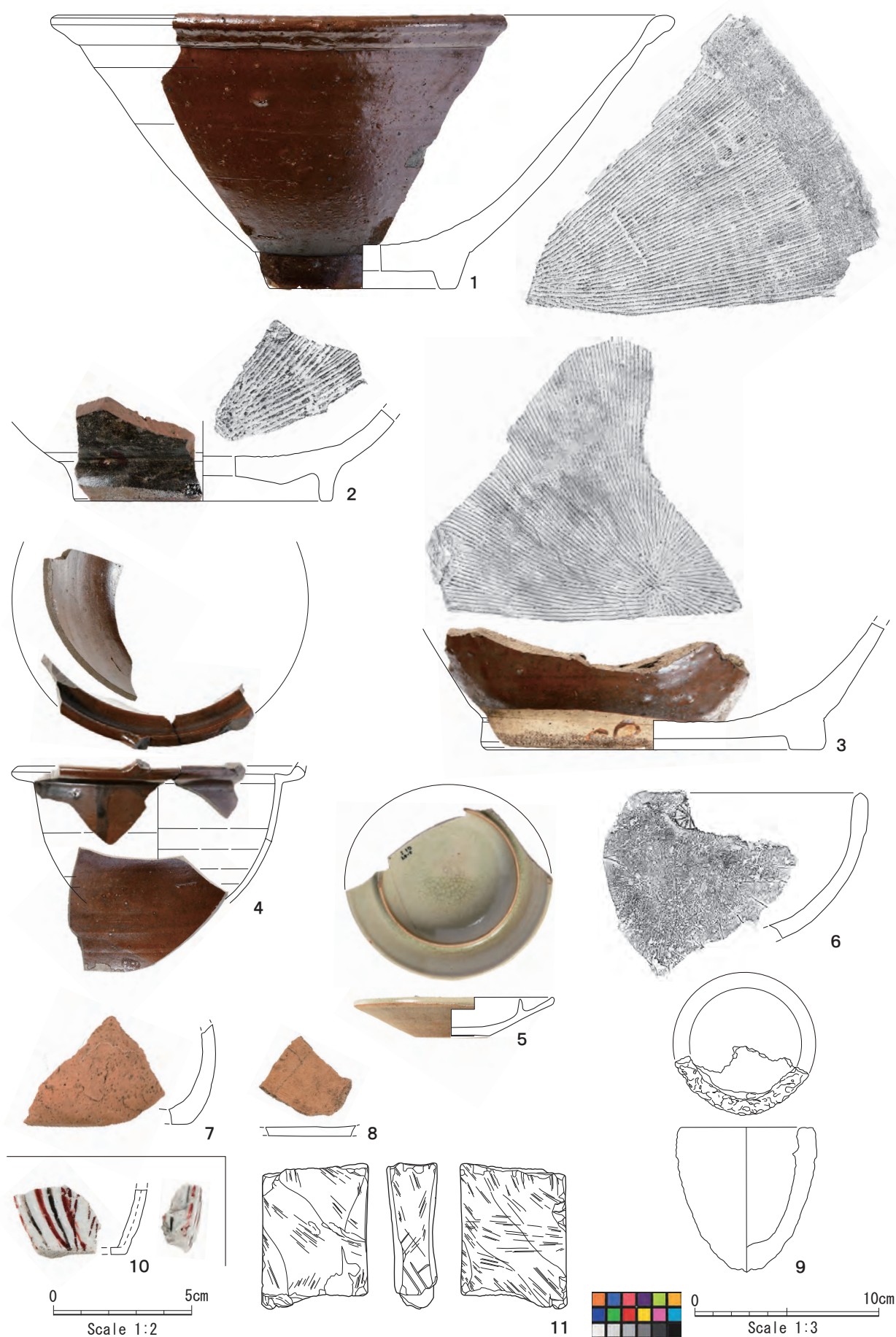


図18 発掘区の遺物(2)

5 要 約

(1) 中世～安土桃山時代について

- 1) 検出された遺構は、竪穴建物跡と炉跡で構成され、中世後期～安土桃山時代に位置付けられる可能性が高い。焼土を伴う炉跡は、加熱による金属の溶解炉と推測される。類例は北秋田市漆下遺跡（秋田県埋蔵文化財センター編2011）にある¹⁾。漆下遺跡では、16世紀末～17世紀にかけて存在したと推定される集落跡が発掘調査されており、竪穴状遺構1基や掘立柱建物跡7棟、炉跡5基が検出されている。本遺跡と同様に埴塙が出土している。
- 2) 本調査における出土遺物の内、中世のものはない。
- 3) 「金坂村」という地名は「慶長6年秋田家分限帳」に秋田家蔵入地で代官所支配の村と記載されている（「角川日本地名大辞典」編纂委員会1980）。今回の調査地が当時の金坂村に属するものであろうか。史資料がなく、出土遺物からも窺い知るすべがない。現段階では、調査位置からみて「金坂村」に属する可能性を指摘するに留めておく。これについては、周辺の調査をする機会があれば、再検討したい。
- 4) これまでの調査の結果、調査区内周辺は、縄文時代～江戸時代にかけて長期間利用したことが判明している。特に、炉跡が検出された中世後期～安土桃山時代にかけての調査地区は、埴塙が出土していることから推測すると、集落内で金属生産を担った場所として利用されていた場所であったことが考えられよう。

(2) 侍屋敷の遺構について

- 1) 屋敷の間取りは、調査区外に拡がっているため不明であるが、発見された基礎柱穴の配列から、江戸時代の侍屋敷の一部とみられる。
- 2) 屋敷の基礎は、柱穴の観察から、柱の規模は不明であるが、地表面から1m前後掘り込んでいる。
- 3) 屋敷は、八幡神社線と平行に建てられている。通りから屋敷までの距離は、図13の合成図から測ると約1.7mで、道路から約1間離れた位置に建てられていたことがわかる。ただ、道路から屋敷への進入路については、調査範囲が狭く、確認できていない。
- 4) 屋敷に関する遺構は、今回の調査では基礎柱穴のほか、柱列、溝跡が検出された。また、礎石建物跡の根石の可能性ある集石が検出された。調査区外の付近では後述する試掘・確認調査時にも集石が検出されているため、調査区外にも残されている可能性が高い。

註

- 1) 宇田川浩一氏の御教示による。

表10 炉跡一覧

遺構 番号	位 置	平面形	規 模		長軸方向 N→E	時期	備 考
			確認面(m)	深さ(m)			
S L 47	F-1	—	1.15 × 0.90	0.20	—		S L 47→S D 38
S L 48	F-1	—	1.45 × 0.98	0.31	—		

表11 待屋敷基礎柱穴一覧

遺構 番号	位 置	平面形	規 模		長軸方向 N→E	時期	備 考
			確認面(m)	深さ(m)			
S B 52	F・G-1	—	6.20 × 4.00		70°	18世紀～	3×2間以上
S P 49	F-1 a	—	0.54 × —	0.14			検出のみ 検出のみ。染付 1 点出土 検出のみ ” ” ”
S P 50	F-1 a	隅丸方形	0.55 × 0.43	0.29			
S P 51	F-1 d	”	0.67 × 0.47	0.26			
S P 67	F-1 b	—	0.43 × —	—			
S P 68	F-1 b・c	隅丸方形	0.46 × 0.43	—			
S P 69	F-1 d	不整形	0.65 × 0.50	—			
S P 70	F-1 d	隅丸方形	0.63 × 0.58	—			
S P 71	F-1 c	円	0.60 × 0.54	—			
S P 72	F-1 c・G-1 b	隅丸方形	0.40 × 0.40	—			

表12 柱列一覧

遺構 番号	位 置	平面形	規 模		長軸方向 N→E	時期	備 考
			確認面(m)	深さ(m)			
S A 63	F-1	—	4.10 × —		69°	近世	
S P 59	F-1 a	方形	0.15 × 0.14	0.01			埋土10YR1.7/1
S P 60	F-1 a	”	0.16 × 0.13	0.02			”
S P 61	F-1 a	”	0.18 × 0.15	0.04			”
S P 62	F-1 d	隅丸方形	0.22 × 0.18	0.06			埋土10YR2/1

表13 溝跡・土坑一覧

遺構 番号	位 置	平面形	規 模			長軸方向 N→E	時期	備 考
			確認面(m)	底面(m)	深さ(m)			
S D 38	F-1	溝	7.26 × 0.51	3.92 × 0.25	0.44	65°	近世カ	S L 47→S D 38
S K 46	F・G-1	—	1.50 × —	—	—	—	19c～	段下げのみ。SP70と重複

表14 柱穴・柱穴様ピット一覧

遺構 番号	位置	平面形	規 模		埋 土	備 考
			確認面(m)	深さ(m)		
53	F-1	隅丸方形	0.29 × 0.26	0.25	10YR1.7/1	54→53
54	”	”	0.30 × 0.27	0.21	”	
55	”	円	0.23 × 0.19	0.15	”	
56	”	長円	0.34 × 0.25	0.16	10YR2/1	
57	”	”	0.29 × 0.18	0.18	”	S D 38→58
58	”	隅丸方形	0.22 × —	0.20	”	
64	”	—	0.22 × —	0.10	10YR1.7/1	
65	”	円	0.24 × 0.21	0.47	10YR2/2	
66	”	隅丸方形	0.17 × 0.14	0.07	—	段下げのみ
73	”	円	0.19 × 0.17	—	—	

表15 分類別遺物一覧

分類 出土位置		P				S			C	I	合計
		8			計	1 7	4	計			
		1	2	3							
遺構	S B52 S P68	1			1						
	S B52 S P69	1			1						
	S B52 S P71		1		1					1	
	S K46	3	5		8						
	S L47	2			2				2		
	S L48	1			1				1		
	S P56	1			1						
	S P73		1		1						
	小計	9	7		16				3	1	20
表土		74	28	9	111	1	2	3			114
合計		83	35	9	127	1	2	3	3	1	134

表16 掲載陶磁器・土器・磁製品観索表

図番号	遺構・調査区	層位	種別	形態		規格(mm, g)			胎土	成形～焼成の特徴	露胎範囲	施釉・文様		製作地	年代	備考
				器種	器形	部位	口径	器高	底径	重量	質	色	特徴			
11-1	SL48	上層	染付	小碗		口				2	磁	灰白	外：口・2重圏線、体・不明	肥前	III(1650～1690)	
15-1	SB52 SP68	上層	染付	瓶カ		体				4	磁	〃	外：体・丸文	肥前	IV～Vの内 (1700～1790)	取上No.1
15-2	SB52 SP71	1	陶器	皿		体～底			46	46	陶	明赤褐	内見込、体～高台内	肥前カ	I～IIの内 (1600～1630)	
15-3	SP73		〃			口				2	〃	にぶい 橙		〃	I～IIIの内 (1600～1690)	
16-1	SK46	1	染付	碗		口～体				3	磁	明灰白	外：口・2重圏線、体・草花？	肥前	III(1650～1690)	取上No.5
16-2	〃	〃	〃	小碗	腰張形	口～底	82	49	28	23	〃	〃	内：口・2重圏線、見込・1重圏線 外：口・体下・1重圏線、体・草花	〃	IV～Vの内 (1750～1790)	茶倉用 取上No.6
16-3	〃	〃	〃	〃	〃	口～体	86			17	〃	〃	内：口・2重圏線 外：口・1重圏線・竹・体・不明	〃	〃	茶倉用 取上No.3
16-4	〃	〃	陶器	〃	端反形	口～底	88	45	34	71	陶	浅黄橙	内：全面・長石釉？、外：全面・暗赤褐色鉄釉→体・梅花？	京・信楽系	19 c	取上No.2
16-5	〃	〃	〃	中碗	杉形	〃				44	〃	〃	内：全面・透明釉、外：全面・透明釉→体・若松	〃	18c・2/2	取上No.1
16-6	〃	〃	〃	搦鉢		底				31	〃	橙	内：底・にぶい赤褐色鉄釉 外：体・にぶい赤褐色鉄釉	肥前・筑前	18 c 頃	
16-7	〃	〃	〃	瓶カ		体				2	〃	浅黄橙	外：体・透明釉	京・信楽系	19 c	
17-1	表採		染付	小碗		口～体	86			4	磁	灰白	外：体・草花	肥前	IVの内(1700～1750)	
17-2	E・F-1	I～II	〃	中碗	丸形	〃	112			62	〃	明灰白	外：体・帆掛け舟？	〃	III(1650～1690)	
17-3	F-1	I	〃	〃	広東形	〃	114			24	〃	灰白	外：体・振子花・靈芝花文	〃	Vの内(1780～1820)	
17-4	〃	〃	〃	碗		体～底			48	46		明灰白	外：体・不明、高台・1重圏線	〃	II～IIIの内 (1640～1660)	
17-5	〃	〃	〃	〃		〃			38	43	〃	〃	外：体・草花、高台内・「渦福」 高台置付	〃	IVの内(1725～1775)	
17-6	G-1	〃	〃	〃	広東形	〃			64	59	〃	〃	内：見込・2重圏線＋？ 外：体・草花	瀬戸	19 c・1/2	工事立会
17-7	F-1	〃	〃	小皿	丸形	口～底	112	26	36	18	〃	〃	内：口・2本線＋体～見込・不明	肥前	IIの内(1630～1640)	
17-8	〃	〃	〃	五寸皿	〃	口～底	138	28	76	39	〃	灰白	内：口・四方襷＋2重圏線、見込・2重圏線、「寿」字 外：口・1重圏線	中国(景德鎮窯系)	17c・1/2	小野皿E 群XII類

図番号	遺構・調査区	層位	種別	形態		部位	規格(mm, g)				胎土		成形～焼成の特徴	施釉・文様			製作地	年代	備考
				器種	器形		口径	器高	底径	重量	質	色		露胎範囲	文様・絵付・釉薬	特徴			
17-9	F-1	I	染付	小皿		底			52	8	磁	灰白	放射状匏削、高台脇に離れ砂		内：見込・雨竜+1重圈線		中国(景徳鎮窯系)	17c・1/2	
17-10	工事立会	〃	〃	皿		底			76	59	磁	明灰白		畳付	内：見込・1重圈線、松竹梅？ 外：高台・2重圈線	被火	肥前系	Vの内(1800～1860)	
17-11	F-1	〃	〃	〃		体～底			72	180	〃	灰白		見込蛇目、畳付	内：体・2重圈線+渦巻		肥前(波佐見)	III(1650～1690)	
17-12	〃	〃	〃	〃		底				11	〃	〃	ハリ支え痕		内：見込・五弁花	五弁花は印判	肥前	IVの内(1690～1750)	
17-13	〃	〃	〃	〃		〃				23	〃	明灰白	〃		内：見込・不明 外：高台内・1重方枠「福」		肥前(南川原)	IV～Vの内(1760～1790)	上手
17-14	G-1	〃	〃	皿か鉢		口～体				18	〃	〃			内：口・濃み 外：口・唐草		肥前(有田)	IV～Vの内(1730～1790)	
17-15	F-1	〃	〃	瓶		体				17	〃	灰白		内：体	外：体・草花		肥前	IV～Vの内(1760～1790)	
17-16	〃	〃	〃	〃		〃				13	〃	〃		〃	外：体・蛸唐草		〃	IV～Vの内(1775～1850)	油壺の可能性あり
17-17	〃	〃	〃	〃		体～底			44	32	〃	〃		内：体～底、畳付			〃	IV～Vの内(1700～1790)	
17-18	〃	〃	〃	段重		口～底	70	28	60	13	〃	〃		畳付	外：体・花	焼成失敗	〃	IV～Vの内(1775～1850)	
17-19	〃	〃	〃	仏飯器高台	台底輪高台	脚～底			44	48	〃	明灰白		台	外：体・一本線、脚・一本線		〃	IV～Vの内(1700～1790)	
17-20	〃	〃	陶器	中碗	杉形	口～底	94	51	32	49	陶	灰白		体下～高台内	内：全面・透明釉 外：全面・透明釉		京・信楽系	18c・1/2	
17-21	〃	〃	〃	碗		体～底			46	48	〃	灰褐		畳付	内：体～見込・鉄釉→白化粧土、打ち刷毛目、外：体・鉄釉→白化粧土、刷毛目		肥前	IVの内(1700～1750)	
17-22		表採	〃	〃	半筒形	底			41	40	〃	淡黄		体下～高台内	内：全面・失透淡黄色灰釉 外：体・失透浅黄色灰釉→呉須絵		瀬戸・美濃	18c・2/2	茶呑用
17-23		〃	〃	皿	—	体～底			42	38	〃	灰黄褐	蛇目釉剥	体下～高台内	内：全面・銅緑釉→透明釉 外：体上・透明釉		肥前(内野山)	IVの内(1690～1750)	
17-24	F-1	I	〃	皿か鉢		底			124	85	〃	赤灰	見込砂胎土目	畳付	内：見込・鉄釉 外：体～高台脇・鉄釉		肥前	III(1650～1690)	
17-25	〃	〃	〃	鉢	—	体～底			80	71	〃	にぶい黄橙	蛇目釉剥	体下～高台内	内：体・白化粧土、刷毛目→透明釉 外：体・白化粧土、刷毛目→透明釉		〃	IV～Vの内(1700～1790)	
17-26	G-1	〃	〃	搦鉢	—	口～体	286			32	〃	灰			内：口～体・灰褐色鉄釉 外：口～体・灰褐色鉄釉		筑前カ	18c カ	
17-27	F-1	〃	〃	〃		〃	339			48	〃	にぶい赤褐			内：口～体・黒褐色鉄釉 外：口～体・黒褐色鉄釉		肥前	IV～Vの内(1700～1790)	

図番号	遺構・調査区	層位	種別	形態		部位	規格(mm、g)			胎土		成形～焼成の特徴	施釉・文様			製作地	年代	備考	
				器種	器形		口径	器高	底径	重量	質		色	露胎範囲	文様・絵付・釉薬				特徴
18-1	工事 立会	〃	〃	〃	口縁折縁形	口～底	340	149	100	470	〃	灰	量付	内：全面・黒褐色鉄釉、11本櫛目、外：全面・黒褐色鉄釉	漆継ぎ	津軽悪戸カ	19c		
18-2	F-1	〃	〃	〃		体～底			140	111	〃	暗赤褐	叩き、内底離れ砂	〃	内：全面・黒褐色鉄釉 外：全面・黒褐色鉄釉		肥前	IV～Vの内 (1700～1790)	
18-3	工事 立会	〃	〃	〃		〃			184	473	〃	灰黄	体下～高台内	内：体～見込、褐色鉄釉、9本櫛目、外：体～底・暗褐色鉄釉		石見カ	19c		
18-4	F-1	〃	〃	土鍋		口～体	160			64	〃	黄灰	紐状耳		内：全面・暗褐色鉄釉 外：全面・暗褐色鉄釉		京・信楽系	18c～19c・1/2	
18-5	G-1	〃	〃	灯明受皿		口～底	112	21	42	67	〃	灰白	外底面回転糸切、油切溝が切立状	体下～外底面	内：全面・灰白色灰釉 外：口・灰白色灰釉		〃	18c・1/2～ 19c1/2	
18-6	G-1	I	土器	土風炉？		口～体				83	土師	橙			内：指オサエ、ナデ、外：口～体・ナデ、口・陰刻菊花？				
18-7	F-1	〃	〃	〃		体～底				39	〃	にぶい橙			内：体・ナデ 外：体・ナデ				
18-8	F-1a	II	〃	〃		底				10	〃	〃			内：体・ナデ 外：体・ナデ				
18-9	〃	〃	〃	埴塙		口～底	76	79	20	57	土師？	外面にふい赤褐	内面：灰赤～暗赤灰色		溶融により不明				

表17 掲載磁・石製品一覧

図番号	分類	名称	調査区	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	備考
18-10	C	色絵人形か水滴	G-1	I	25	34	4	8.0		型押し成形、鶏
18-11	S1-7	砥石	F-1	〃	79	57	26	189.5	凝灰岩	

遠景（北から）



近景（南西から）



調査風景（南東から）



図版4 金坂遺跡の遠景・近景



調査風景（東から）



土層断面（南から）



S L 47（南から）



S L 47（東から）



S L 48（南西から）

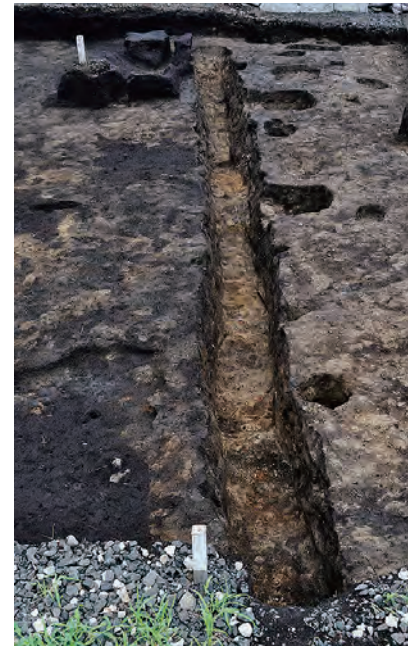


S L 48（南東から）

図版5 調査風景・S L 47・S L 48



完掘（東から）



S A63・S D38（西から）



S P50 セクション（南から）



S P51 セクション（南から）



S P72 隣礫出土状況（南から）



S D38 セクション（東から）



S K46 検出状況（東から）

図版 6 侍屋敷跡の調査状況

S L48



1

S P71



2



3



4



5



6



7



8



9



10

图版 7 出土遺物



Ⅲ 試掘・確認調査

1 大館地区

(1) 小館町遺跡

1) 調査の経緯

今回調査を実施した小館町地区は、昭和40年代に宅地化され、当該箇所も以前アパートが建っていた地区である。当該箇所には、小館町遺跡が所在し、本遺跡では急傾斜地のフェンス設置工事や個人住宅新築工事に伴う立会調査、個人住宅新築工事等に伴う試掘・確認調査が実施された経緯がある（大館市教育委員会2019 a・2022）。

今回、アパート新築工事が予定されたため、土地所有者から調査協力の承諾を得て、確認調査を実施した。

2) 調査方法

調査実施にあたり、平面直角座標系のX・Y軸を座標系として設定した。発掘区の名称は令和2年度の試掘調査で設定したものに準拠する。公共座標（世界測地系）は、H-7区で $X = 29,240.000$ 、 $Y = -23,720.000$ 、J-6区で $X = 29,230.000$ 、 $Y = -23,740.000$ である。発掘区における名称は南東角の記号で表示する。

今回の調査は、重機を用いてトレンチ（「T r」と表記）調査を行った。トレンチは $1.5\text{m} \times 20\text{m}$ をX軸方向に設定した。

基本層序は令和2年度調査に準じた。土層の定義は下記のとおりである。

I 層 表土。

II 層 黒色を呈する腐植土層で、本来の遺物包含層である。

III 層 黒褐色を呈するII層とIV層の漸移層。

IV 層 明黄褐色～明赤褐色を呈するローム層。

3) 調査の結果

今回の調査では、トレンチ1本を掘開した。黒色土の落ち込みを1箇所検出したため、トレンチを拡張し、平面プランの確認と半截した。底面の起伏が著しく、掘り込みも明瞭でない点から風倒木痕と判断した。ほかに遺構は確認されず、遺物はトレンチ周辺から近世の磁器片1点を表採したのみである。

以上のように今回の調査対象地内には明確な包含層・遺構・遺物はないことから本発掘調査は必要ないと判断した。



図 19 小館町遺跡調査区と周辺の地形 (1 : 2,500)

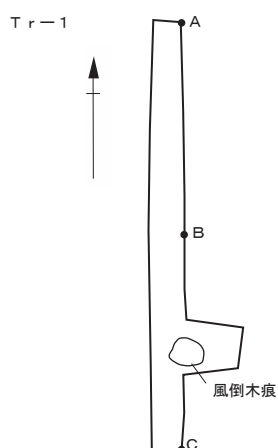


図 20 小館町遺跡確認調査平面図 (1:400)・土層柱状図 (1:40)



調査地近景 (北西から)



作業状況 (北から)



完掘状況 (南から)



A地点土層堆積状況 (西から)



B地点土層堆積状況 (西から)



C地点土層堆積状況 (西から)

図版 8 小館町遺跡調査状況

(2) 雪沢地区（芋ヶ岱Ⅱ・Ⅲ遺跡）

1) 調査の経緯

雪沢地区において県営ほ場整備事業が計画されたことから、令和3年11月から3箇年の予定で試掘調査を実施している。令和4年度の試掘調査では、「芋ヶ岱Ⅱ遺跡」が新発見され、『大館市内遺跡詳細分布調査報告書(6)』（大館市教育委員会2022）で報告したとおりである。今回の調査は3年目にあたり、芋ヶ岱Ⅱ遺跡の範囲確認調査を令和5年4月に実施し、雪沢地区の試掘調査を令和5年10～11月に実施した。

2) 調査方法

確認調査については、平面直角座標系のX・Y軸を座標系とし、10×10mの基本区画を新規に設定した。発掘区における公共座標（世界測地系）は、A-1区でX=31,570.000、Y=-12,950.000、K-11区でX=31,670.000、Y=-13,050.000である。トレンチの設定は、南北方向に20～30m、東西方向に10m、幅1mを基本として11本設定した。掘削は重機を用いて基盤層まで掘り下げ、人力にて精査し、遺構の有無の確認、遺物の収集等を行った。

試掘調査では、テストピット（「TP」と表記）を対象範囲内に任意に2m×2mの規模で25箇所を設定して、掘削は全て人力で行った。以下に基本層序を示す。

- I層 表土・盛土層。
- II層 黒色を呈する腐植土層である（今回の調査では確認されていない）。
- III層 黄褐色～褐色を呈する砂質土層。十和田a降下火山灰層である。
- IV層 黒褐色を呈する腐植土層。本来の遺物包含層である。
- V層 暗褐色を呈する腐植土層。IV層とVI層の漸移層である。
- VI層 褐色を呈する粘質土層。
- VII層 暗褐色～褐色を呈する粘質土層。VI層とVIII層の漸移層である。
- VIII層 褐色を呈する砂礫層。

3) 調査の結果

芋ヶ岱Ⅱ遺跡では、複数の黒色土の落ち込みを確認したが、すべて風倒木痕であり、遺構は確認されなかった。遺物は、発掘区B-9・D-3・D-7～9・E-6・F-2～4・F-9・G-6・H-3・H-4・H-8・H-9・J-5・J-8・J-11区から縄文土器片や剥片石器など中コンテナで1箱の遺物が出土した。

また、雪沢地区試掘調査でも遺構は確認されなかったが、TP-3と10から縄文土器片と剥片類が出土した。TP-10からは48点の3群の縄文土器片と3点の剥片類が出土したことから、縄文中期の新発見の遺跡が存在することを確認し、小字名から「芋ヶ岱Ⅲ遺跡」とし周知資料に登載した。

図版11の1～10はD-8区IV層出土で、1・2は晩期の粗製土器、4は注口土器。5・6は石鏃、7・8は剥片、9は石匙、10はU. フレイクである。12はV層出土の半円状扁平打製石器。図版12は芋ヶ岱Ⅲ遺跡出土、すべてTP-10のIV層で、20～26は3群8類土器、27・28は剥片である。

調査の結果、遺構は確認されず、遺物包含層のIV層は過去の耕地整理から免れてほんの一部が残存しているに過ぎないことを確認した。調査結果を受けて事業者との協議により、A-5からL-7区を結んだラインより北側では、遺跡保護層（岩ズリ20cm）を設定して工事施工することとし、南側では工事での掘削が20cm以内である。排水路工事では、一部掘削がIV層下に及ぶ部分があるが、影響範囲が狭小であり、確認調査の結果からも、専門職員の立会を条件に工事して差支えないと判断した。

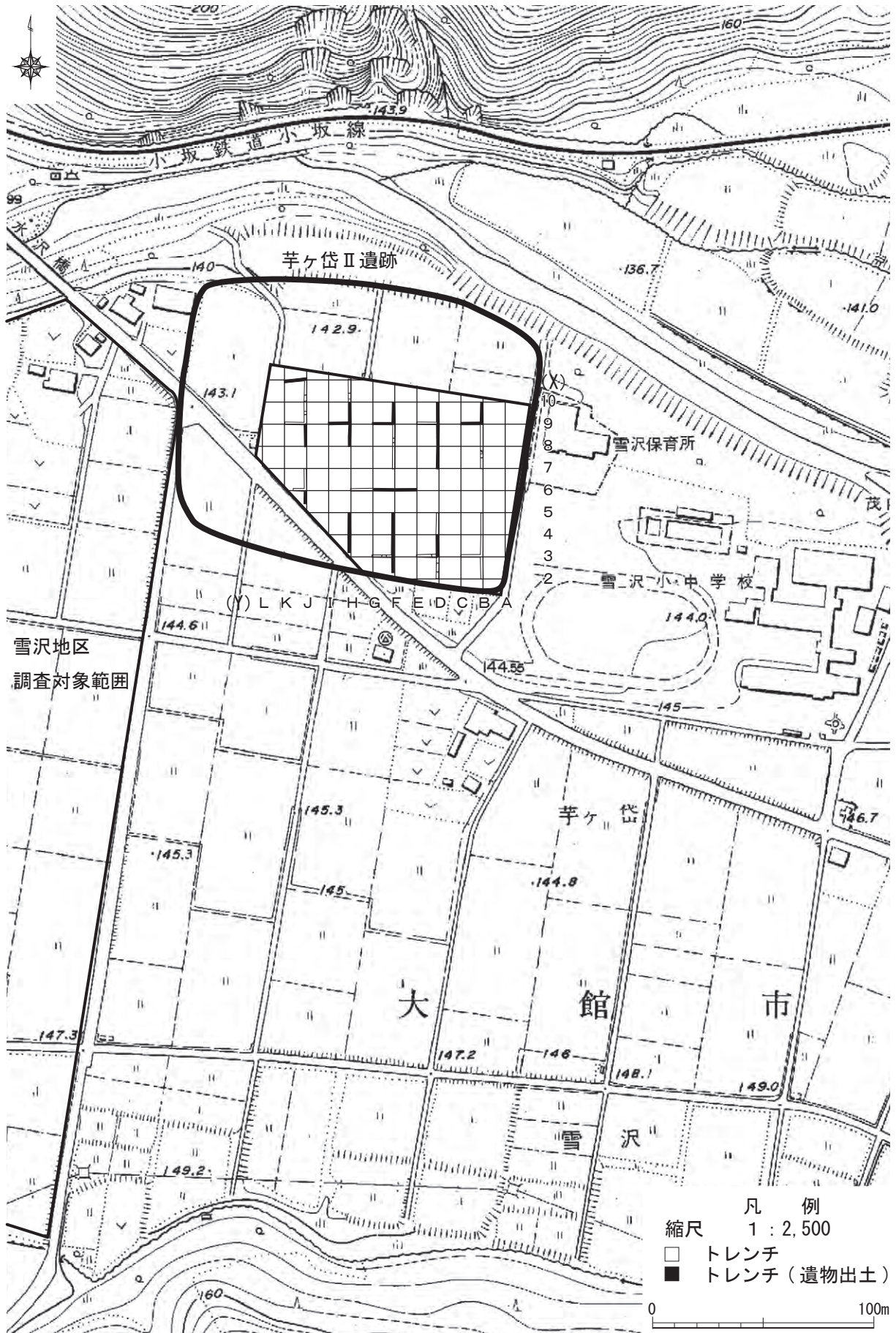


図 21 芋ヶ岱Ⅱ遺跡調査区と周辺の地形



図 22 雪沢地区調査区と周辺の地形

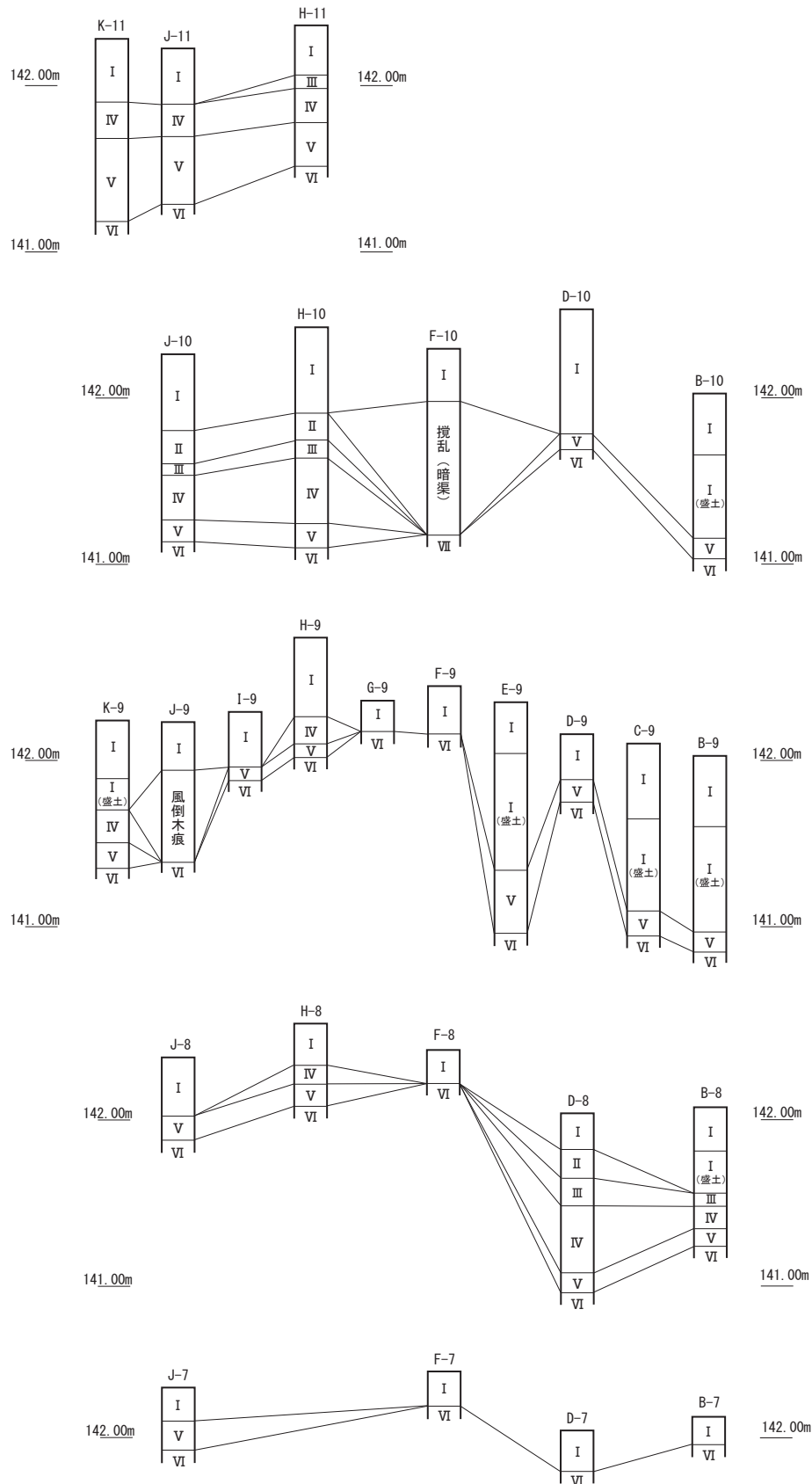


図 23 芋ヶ岱Ⅱ遺跡土層柱状図(1) (1:40)

1 大館地区

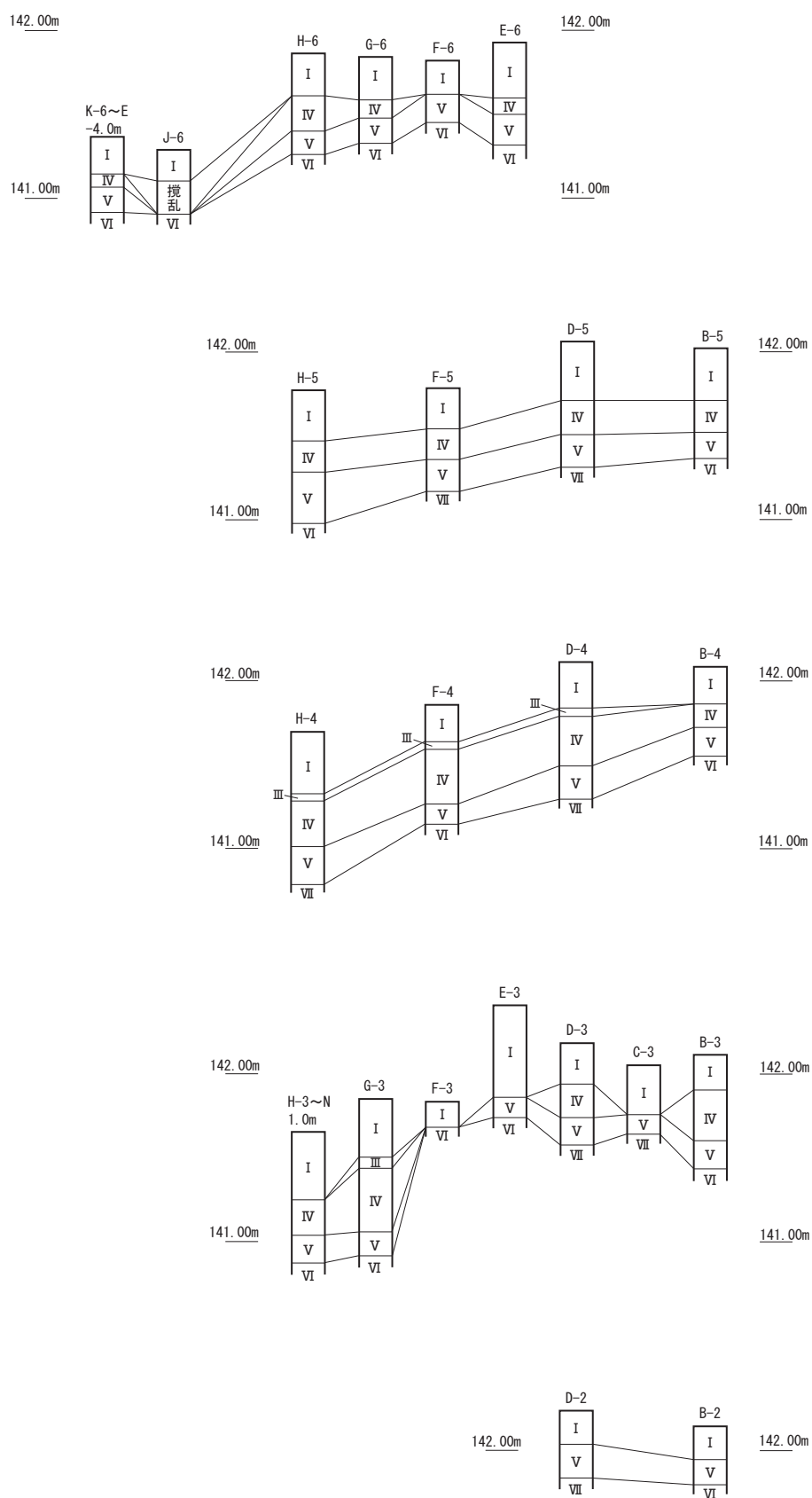


図 24 芋ヶ袋Ⅱ遺跡土層柱状図 (2) (1 : 40)

(2) 雪沢地区（芋ヶ岱Ⅱ・Ⅲ遺跡）

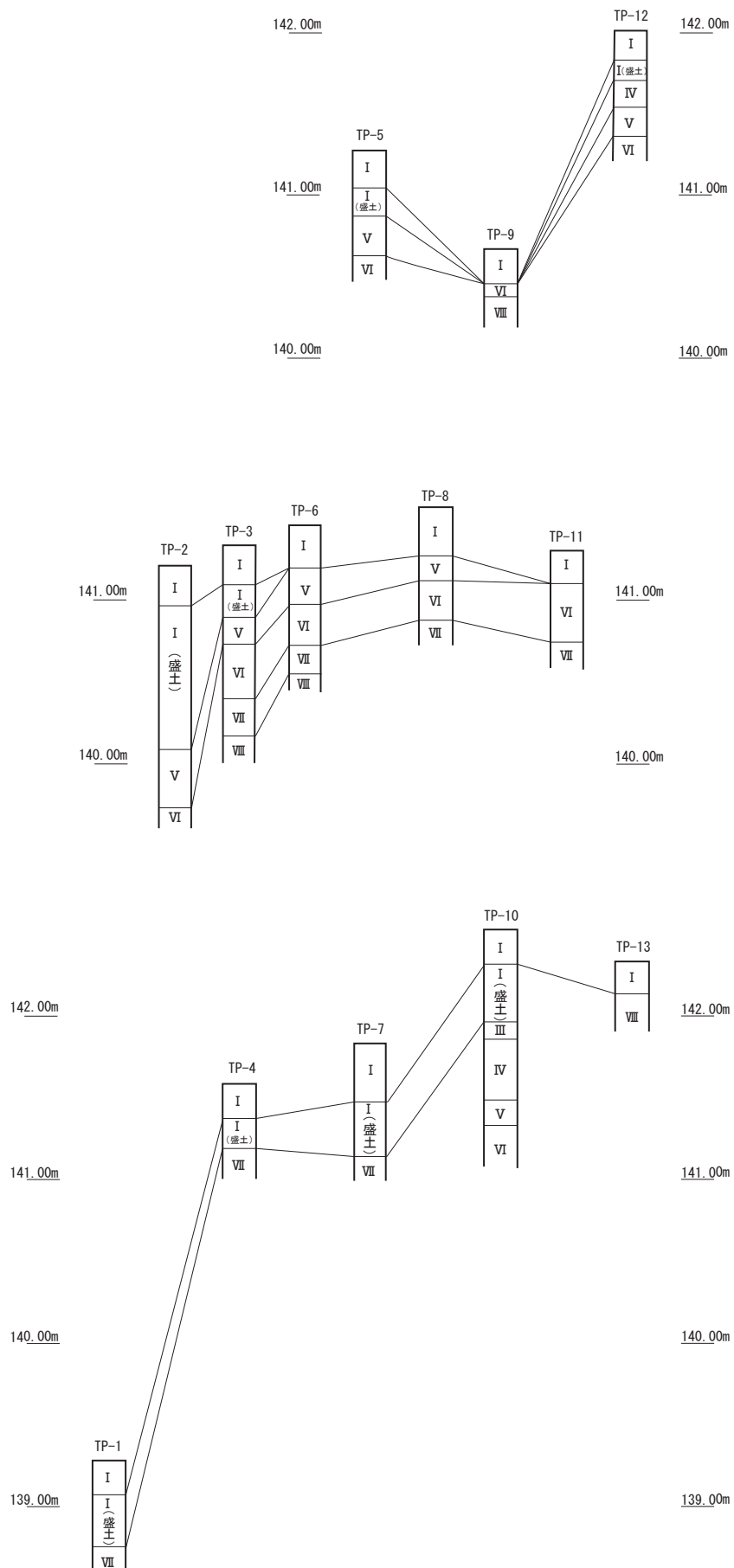


図 25 雪沢地区土層柱状図 (1) (1 : 40)

1 大館地区

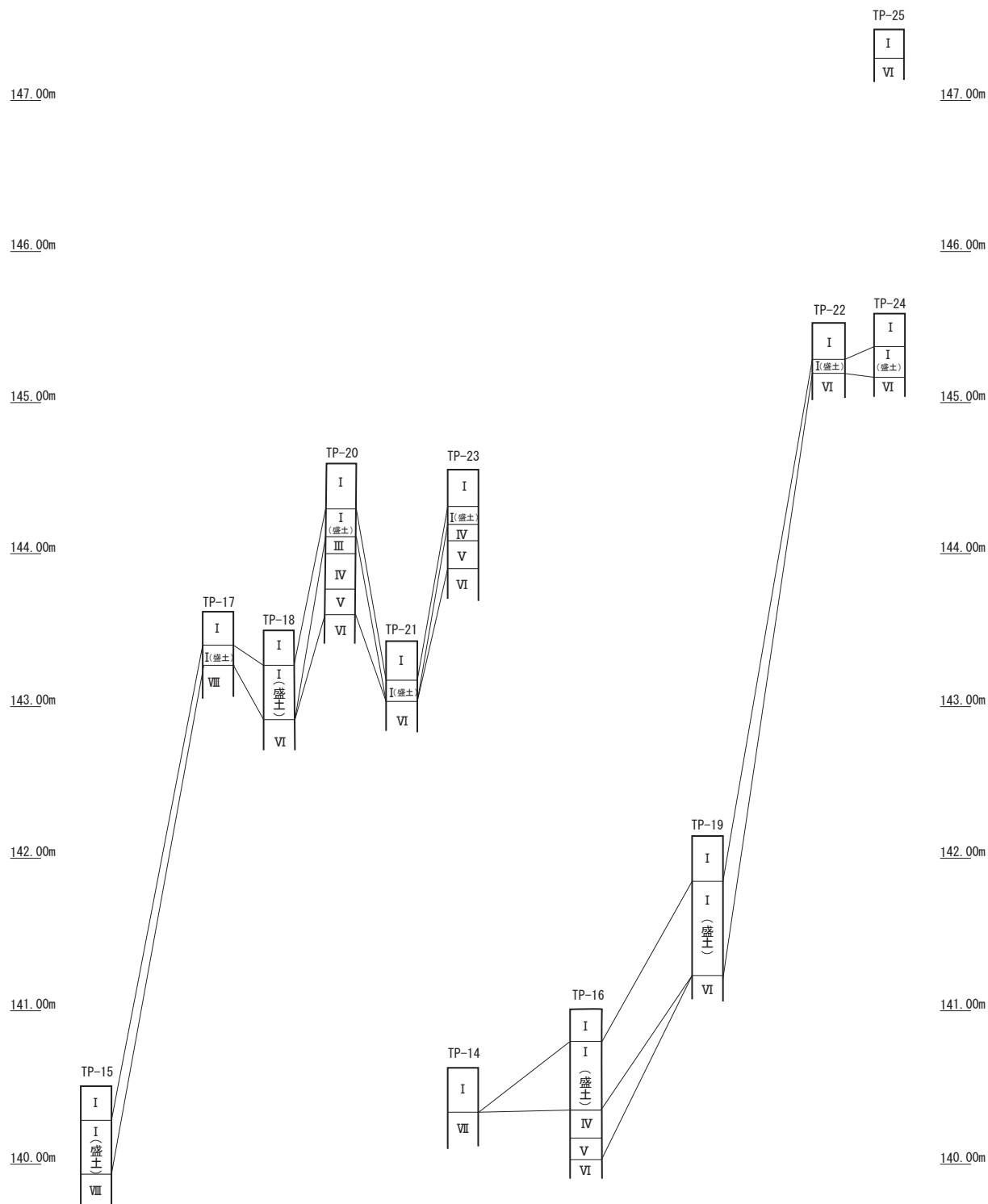


図 26 雪沢地区土層柱状図 (2) (1 : 40)

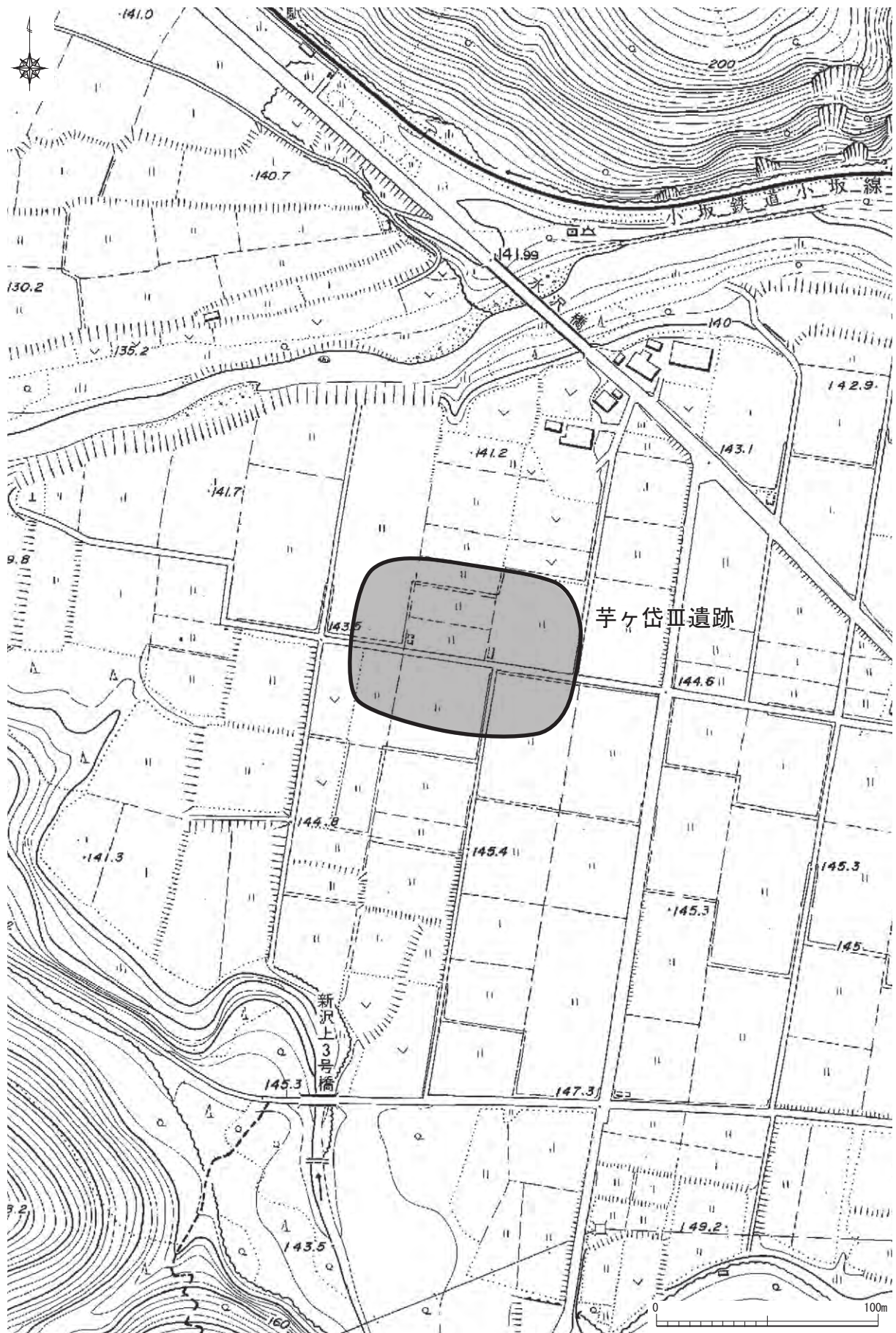


図 27 調査結果に基づく遺跡の範囲 (1 : 2,500)

1 大館地区



調査区近景（南東から）



調査状況



D-2～D-5区（南から）



D-7～D-10区（南から）



D-8区 十和田a層以下残存状況（北西から）



E-6～H-6区（東から）



H-3～H-5区（南から）



H-8～H-11区（南から）

図版9 芋ヶ岱Ⅱ遺跡調査状況



調査区近景（南東から）



新発見遺跡周辺（北東から）



TP-3（西から）



TP-10（西から）



TP-12（西から）



TP-14（西から）



TP-20（西から）

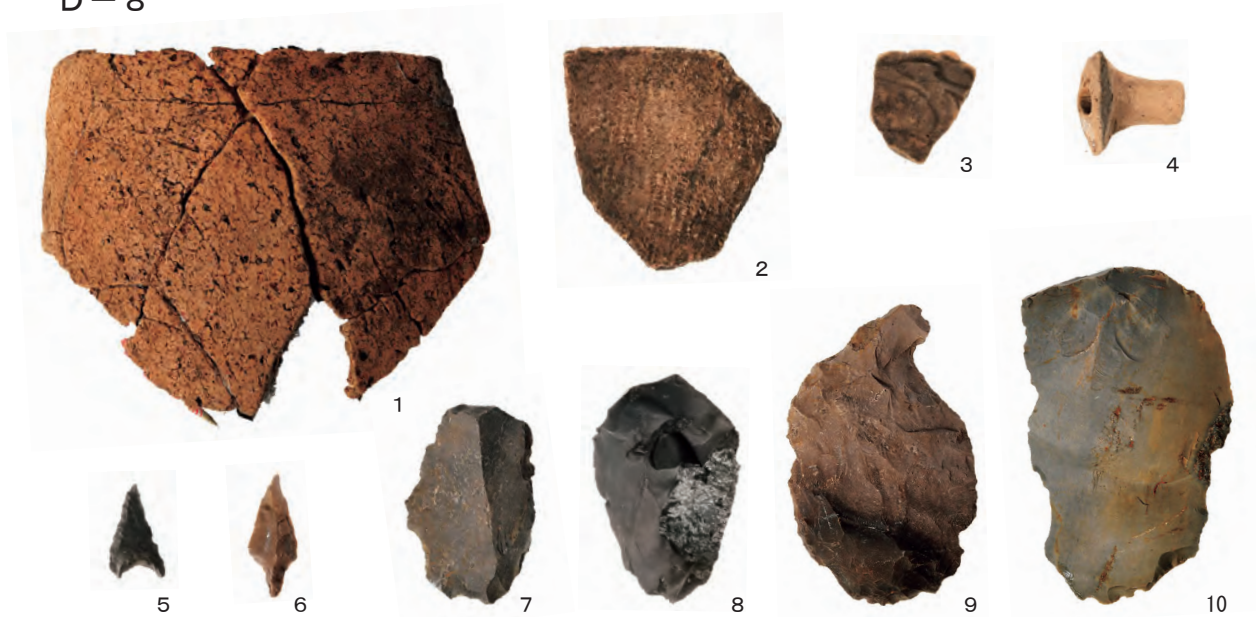


TP-25（西から）

図版 10 雪沢地区調査状況

1 大館地区

D-8



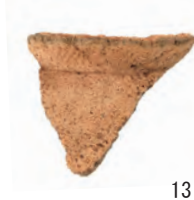
D-9



E-6



F-3



F-9



G-6



H-4



J-5



J-8



図版 11 芋ヶ岱Ⅱ遺跡出土遺物

T P-10



図版 12 芋ヶ岱Ⅲ遺跡出土遺物

表18 芋ヶ岱Ⅱ遺跡出土遺物一覧

調査区遺構	P			S								合計
	3	5	計	1				2	3	4	計	
				1	3	4	6					
B-9								1			1	1
D-3		1	1					1			1	2
D-7								2			2	2
D-8	77	311	388	2	1	6		54	4	2	69	457
D-9	7	17	24					5		1	6	30
E-6		5	5			1	1				2	7
F-2		1	1									1
F-3		1	1			2		3			5	6
F-4								2			2	2
F-9						1					1	1
G-6		6	6			1		1			2	8
H-3	1	3	4									4
H-4		50	50					1			1	51
H-8	5	7	12			1		7	1		9	21
H-9									1		1	1
J-5		11	11	1		1		2			4	15
J-8		116	116			1		1			2	118
J-11						1					1	1
表 採						1		1			2	2
計	90	529	619	3	1	16	1	81	6	3	111	730

表19 芋ヶ岱Ⅲ遺跡出土遺物一覧

調査区遺構	P		S		合計
	3	計	2	計	
T P-3	4	4			4
T P-10	48	48	3	3	51
計	52	52	3	3	55

(3) 金坂遺跡

1) 調査の経緯

今回調査を実施した金坂遺跡は、近年まで宅地化されずに残っていた。本遺跡は宅地造成計画に伴う試掘調査や個人住宅建設工事に伴う発掘調査が実施された経緯がある（大館市教育委員会2022・2023）。

今回、個人住宅新築工事が計画されたことから、土地所有者である建築主に金坂遺跡内であること、事業着手前に確認調査の必要である旨説明し、土地所有者から調査協力の承諾を得たことから、確認調査を実施した。

2) 調査方法

調査実施にあたり、平面直角座標系のX・Y軸を座標系として基本区画10×10mの発掘区を設定した。発掘区の名称は令和3年度の試掘調査で設定したものに準拠する。公共座標（世界測地系）は、E-1区でX=30,410.000、Y=-22,430.000、G-3区でX=30,430.000、Y=-22,450.000である。発掘区における名称は南東角の記号で表示する。人力にてトレンチ（Tr）調査を行った。

本遺跡の層序は第Ⅱ編に掲載したとおりである。遺構はⅡ層中よりⅣ層にかけて掘り込まれているが、遺構はⅢ層よりⅣ層のローム上面で確認できた。

3) 調査の結果

今回の調査では、トレンチ3本を掘開した。調査の結果、全域にわたって包含層が良好に残存していた。今回の調査で検出した遺構は、Tr-1より竪穴建物跡2軒（SI5・39）、焼土1箇所、柱穴・柱穴様ピット22基、礎石？2基、Tr-2より竪穴建物跡1軒、焼土2箇所、柱穴・柱穴様ピット5基、集石1箇所、Tr-3より竪穴建物跡1軒（SI5）、集石を伴う黒色土落ち込み（SG?）1箇所、柱穴・柱穴様ピット3基である。遺物は228点得られ、全般的に近世遺物が出土している。Tr-3南部（F-2a区）から埴塼1点、椀形鍛冶滓1点が出土しており、金坂という地名との関連性が注目される。

竪穴建物跡5

F-1・2区に位置し、北側が黒色土落ち込みと重複する。新旧関係は不明であるが、礫の分布状況から黒色土落ち込みの方が新しいと考えられる。

令和3年度に東側コーナーの一部が調査されている。今回の調査では、南西側及び北東側の一部を調査した。大部分は未調査である。おおよそ東西2.5m、北西側の大半は調査範囲外に拡がるため、プランは不明であるが隅丸方形を呈するものと推測される。未調査部分の結果にもよるが、外壁部に沿って柱穴がめぐる構造をもつと思われる。遺物は出土しなかったが、他の遺跡の類例から中世～近世の遺構と考えられる。

竪穴建物跡39

F-1・2区に位置する。東側の一部を調査した。大部分は未調査であり、プランは不明であるが、隅丸方形を呈するものと推測される。

竪穴建物跡39から出土した遺物は、陶器1点、器種不明鉄製品1点である。図版14-1は陶器の細片である。碗の体部片と思われ、内外に貫入が入る。肥前産の玉子手碗とみられ、I～II期の内、17世紀前半頃のものと考えられる。2は棒状の鉄製品で、器種不明である。



図 28 金坂遺跡・大館城跡隣接地調査区と周辺の地形

黒色土落ち込み

F—2区に位置する。東側の一部を調査したのみで、大半は調査区外に拡がる。前述のとおり、竪穴建物跡5と重複する。確認した範囲では、規模は少なくとも径3m以上ある。埋土中から多量の礫のほか、出土した遺物は近世の陶磁器片3点、土器1点、鉄製品1点、銭貨（寛永通宝）1点、鉄滓1点、砥石1点など、計13点である。図版14-4は磁器染付の小瓶で、体部に「太神宮」と描かれている。類例は佐賀県有田町窯の谷窯にある。肥前Ⅲ～Ⅴ期の内、17世紀後半から18世紀に作られたものである。よって、この文字は特定の神宮ではなく、神棚などに供えるための瓶として作られたものといえる¹⁾。5は埴塼。完形品で口径48mm、器高28mm、重量は65gを測る。色調は外面が黒灰色、内面は熔融銅が付着し、緑灰～暗緑灰色を呈する。磁着はやや強い。6は棒状鉄製品で、釘かと思われる。7は銭貨で寛永通宝。8は砥石。長さ65mm、幅54mm、厚さ形態は扁平角柱状をなし、折損している。石質は凝灰岩か。9は鉄塊系遺物である²⁾。重量は184gを測る。磁着はやや強い。

遺物

竪穴建物跡及び黒色土落ち込みなど遺構外の遺物は、陶磁器片177点、土器13点、石製品3点、剝片2点、石核1点、礫10点、土製品3点、金属製品1点、合計210点である。

図版14-10～12はT r - 1から得た遺物。10は播鉢の体～底部。胎土は赤褐色を呈し、外底面は回転糸切である。無釉で、櫛目は10本ある。口縁が玉縁にならない古いタイプで、年代は肥前Ⅱ～Ⅲ期の内、17世紀第2～第3四半期である。11は土器で、貝風炉かと思われる体～底部片。12は器種不明の土製品。

図版14-13～17はT r - 2から得た陶磁器・土器。13は染付碗の体～底部で内外に二重網目文、見込に菊花が描かれ、高台内は「大明年製」崩れか。肥前産でⅣ期の内、18世紀前半。14は染付の中碗で、筒形をなす茶呑用の碗の口縁部片。内面に四方襷、外面に笹が染付される。肥前産でⅤ期の内、1780～1810年代である。15は大播鉢の口縁～体部片。胎土は灰褐色で、口縁部内外面に黒褐色の鉄釉がつけられる。櫛目は8本。肥前産でⅠ～Ⅲ期の内、17世紀代のものであろう。16は播鉢の体～底部。胎土は橙色を呈し、外底面は回転糸切。櫛目は8本。肥前Ⅰ～Ⅱ期の内、17世紀前半。17は貝風炉。

図版15はT r - 3から得た陶磁器と鉄製品。1～3は肥前産の磁器。1は染付の碗の底部。見込みに草花、高台内に「太明年製」が描かれる。有田産で、年代はⅢ期の内、1655～80年代。2は白磁の碗底部。年代はⅣ期の内、17世紀末～18世紀前半。掲載していないが、これと同じものがもう1点出土している。3は染付の皿の体～底部。見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、五弁花のコンニャク印判がみられる。肥前産でⅣ期の内、18世紀第2～第3四半期。4～9は陶器。4は見込み蛇ノ釉剥ぎの皿。肥前産でⅣ期の内、17世紀末～18世紀前半。5～7は肥前産の鉢。5は内面に刷毛目文が描かれる。肥前産でⅢ～Ⅳ期の内、17世紀後半～18世紀前半。8は播鉢。肥前産で18世紀代か。9は瓶か壺の底部。肥前か福岡産で、年代は17世紀中葉～末。10は棒状の鉄製品で、器種不明である。

調査の結果

今回は、建物跡等の遺構を発見したため、299.5㎡に対して本発掘調査が必要と判断した。建築主が建築を急いでいたため、工事内容を表土までの漉き取りに変更し、遺構は現地保存されることになった。なお、住宅出入口部分については、掘削工事を避けられず、令和6年7月に本調査を実施した。調査結果については、第Ⅱ編で報告したとおりである。

註

- 1) 佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二氏に実見の上、御教示いただいた。
- 2) 飯村均氏に実見の上、御教示いただいた。

X

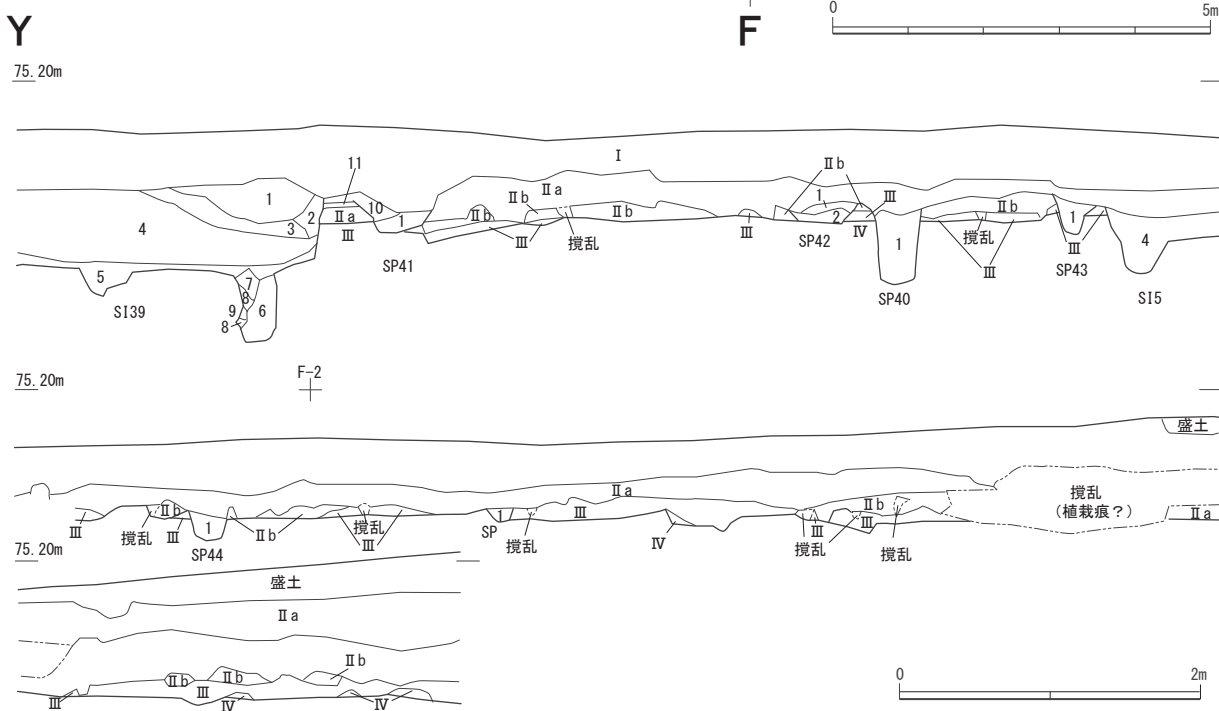
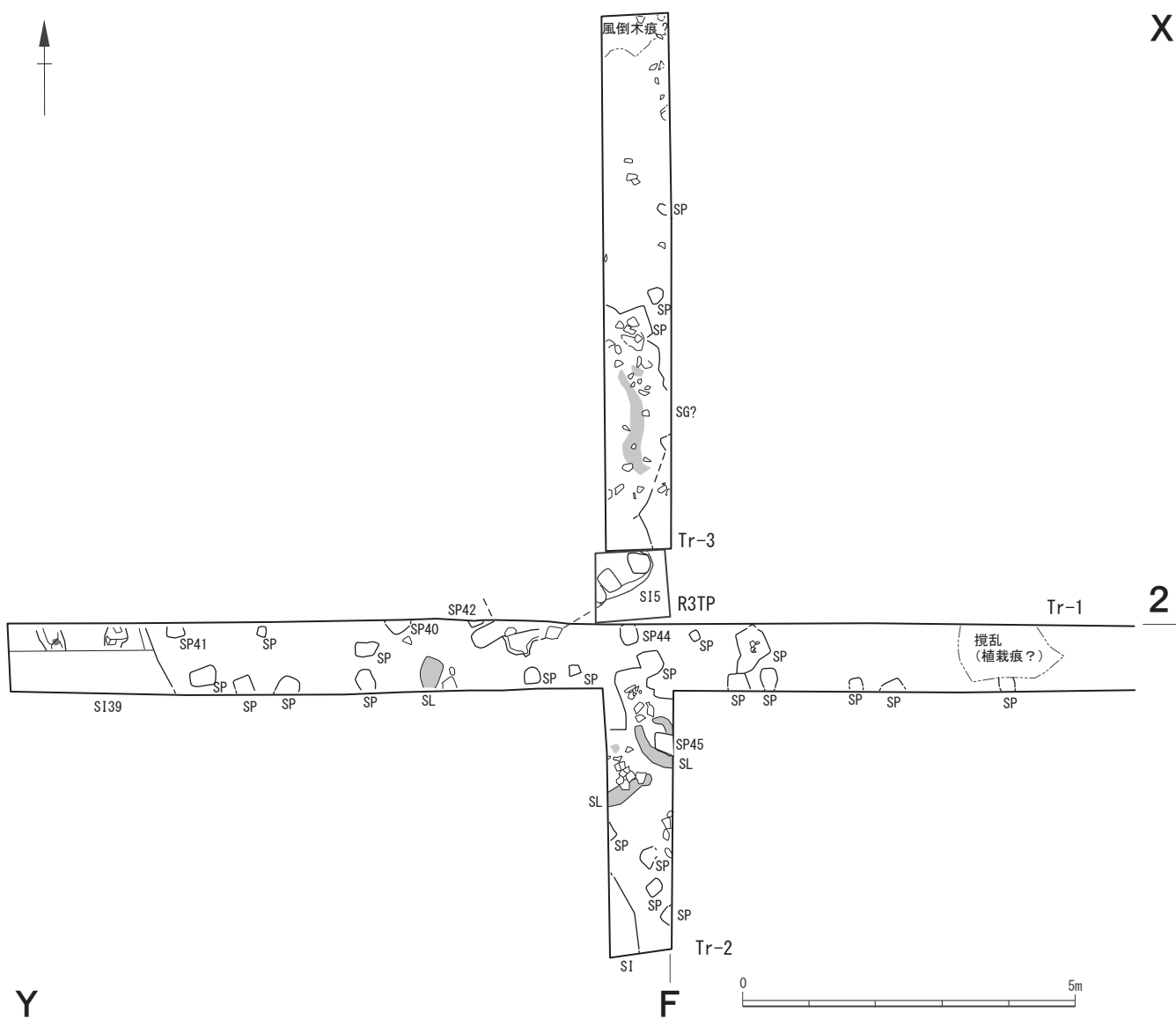


図 29 金坂遺跡遺構配置図 (1:100)・土層断面図 (1:50)

1 大館地区



調査地全景



作業状況



トレンチ 1 調査状況



トレンチ 2 調査状況



トレンチ 3 調査状況



竪穴建物跡 5 調査状況



竪穴建物跡 39 調査状況



竪穴建物跡 5 ・黒色土落ち込み調査状況

図版 13 金坂遺跡調査状況

S I 39



1



2

S P 45



3

黒色土落ち込み



4



5



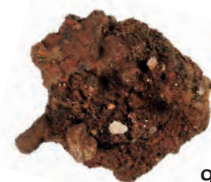
6



7



8



9

Tr-1



11

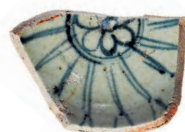


10

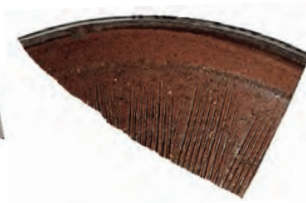


12

Tr-2



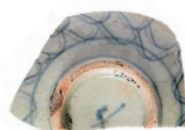
14



15



13



17



16



図版 14 金坂遺跡出土遺物 (1)

1 大館地区

Tr-3



図版 15 金坂遺跡出土遺物 (2)

表20 金坂遺跡遺構一覧

種別	竪穴建物跡	黒色土 落ち込み	焼土	柱穴・柱穴 様ビット	集石	礎石？	計
数	3	1	3	30	1	2	40

表21 金坂遺跡出土遺物一覧

分類 調査区遺構	P				S							C	I	合 計
	8			計	1			2	3	4	計			
	1	2	3		4	7	9							
S I 39		1		1									1	2
黒色土落ち込み	1	2	1	4		1		1		4	6		3	13
S P 40										2	2			2
S P 45													1	1
小計	1	3	1	5		1		1		6	8		5	18
E-1	6	2		8			1				1	3		12
E・F-1	3			3										3
F-1	33	15	4	52	1			1		5	7			59
F-2	33	22	1	56						4	4		1	61
表採	46	17	8	71			1	1	1	1	4			75
小計	121	56	13	190	1		2	2	1	10	16	3	1	210
合計	122	59	14	195	1	1	2	3	1	16	24	3	6	228

(4) 大館城跡

1) 調査の経緯

今回調査を実施した三ノ丸地区は大館城の三ノ丸にあたり、秋田藩直臣の給人が居住した町である。当地区は、平成28年度に個人住宅新築工事に伴う発掘調査が実施された経緯がある（大館市教育委員会2019b）。同地区において公的機関の事務所新築が計画されたことから、事業者が依頼した建築設計事務所に新築予定地が一部大館城跡にかかること、事業着手前に試掘・確認調査の必要がある旨説明した。今回、土地所有者である事業者から調査協力の承諾を得たことから、確認調査を実施した。

2) 調査方法

調査実施にあたり、平面直角座標系のX・Y軸を座標系として基本区画10×10mの発掘区を設定した。発掘区の名称は平成26年度の試掘調査で設定したものに準拠する。公共座標（世界測地系）は、AM-22区でX=30,290.000、Y=-23,050.000、AP-23区でX=30,300.000、Y=-23,080.000である。

今回の調査は、人力でトレンチ（Tr）調査を行った。トレンチは1m×6m（一部1m×5m）をX軸方向に10m、Y軸方向に20mの間隔で設定した。

遺跡内の層序は、基盤層上に腐植土層が堆積する。

I層 表土。

II層 黒色を呈する腐植土層。本来の遺物包含層。a・b層に細分される。

IIa層 黒色（10YR2/1）を呈する。

IIb層 黒色（10YR1.7/1）を呈する土層。

III層 暗褐色を呈する土層。II層とIV層の漸移層。

IV層 黄褐色を呈するシルト質土層。

3) 調査の結果

今回の調査は、これまで包蔵地と推定していた範囲とそれに隣接する地区について実施した。調査地は、かつて個人住宅と病院が建てられていた場所で、全域にわたって病院の基礎等の攪乱が激しかったものの、包含層は比較的良好に残存していた。調査で検出した遺構は、Tr-1より竪穴建物跡1軒、溝状の黒色土落ち込み1箇所、柱穴・柱穴様ピット2基、Tr-3より井戸跡と考えられる土坑2基（SE1450・SK1451）、柱穴・柱穴様ピット3基、遺物はSK1451・Tr-3・4を中心近世の陶磁器片25点、土器片2を得た。

井戸跡1450

AO-23区に位置する。Tr-3を調査中に黒色土の落ち込みがあったことから、発見した。北側の一部を調査したのみで、およそ東西1.6m、南北両側は調査範囲外に拡がるため、平面形は判然としないが、円形を呈するものと推測される。一部を発掘しただけで遺物は出土しなかった。

土坑1451

AO-23区に位置する。Tr-3の調査中に検出し、さらに北・西へ拡がる。大部分は未調査であり、平面形・規模等は不明である。土坑1451から出土した遺物は磁器片が10点、陶器1点である。大半が小破片であるが、肥前産染付の碗や肥前系染付の皿、京・信楽系陶器の小碗とみられる破片が

— 60 —

出土している。年代は17世紀中頃～幕末まで幅がある。

遺物

図版16－1～4はTr－4から得た近世磁器でいずれも肥前産である。1・2は同一個体と考えられる染付の四角い皿。被熱している。幕末～明治の初めのものである。3は染付の段重。V期の内、19世紀初め～幕末に位置付けられる。4は白磁の紅猪口で、型押し成形。V期に位置付けられる。

以上の結果から、大館城跡の範囲が今回の調査地まで変更し、周知資料を整備した。なお、事務所新築工事に先立ち、記録委保存のための本発掘調査を令和6年4月～7月に実施した。調査概要及び調査結果については大館市文化財調査報告書第21集（2025）に報告したとおりである。

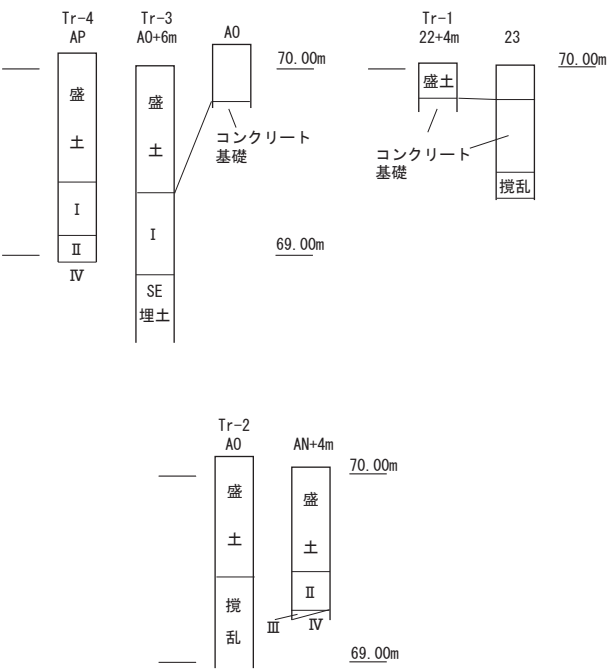


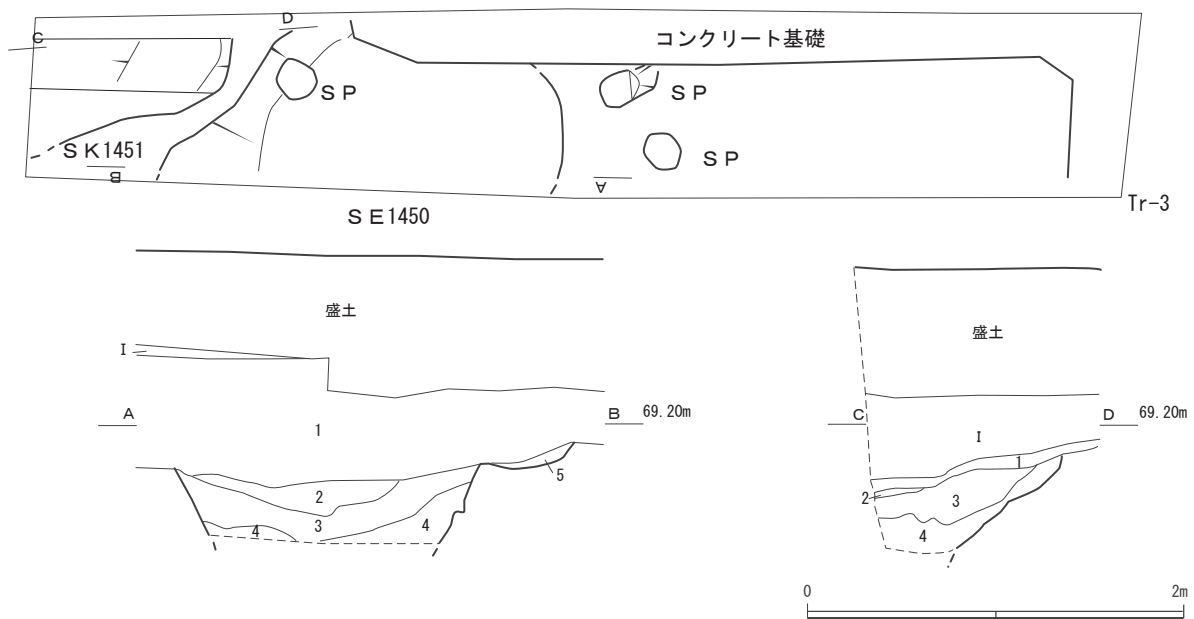
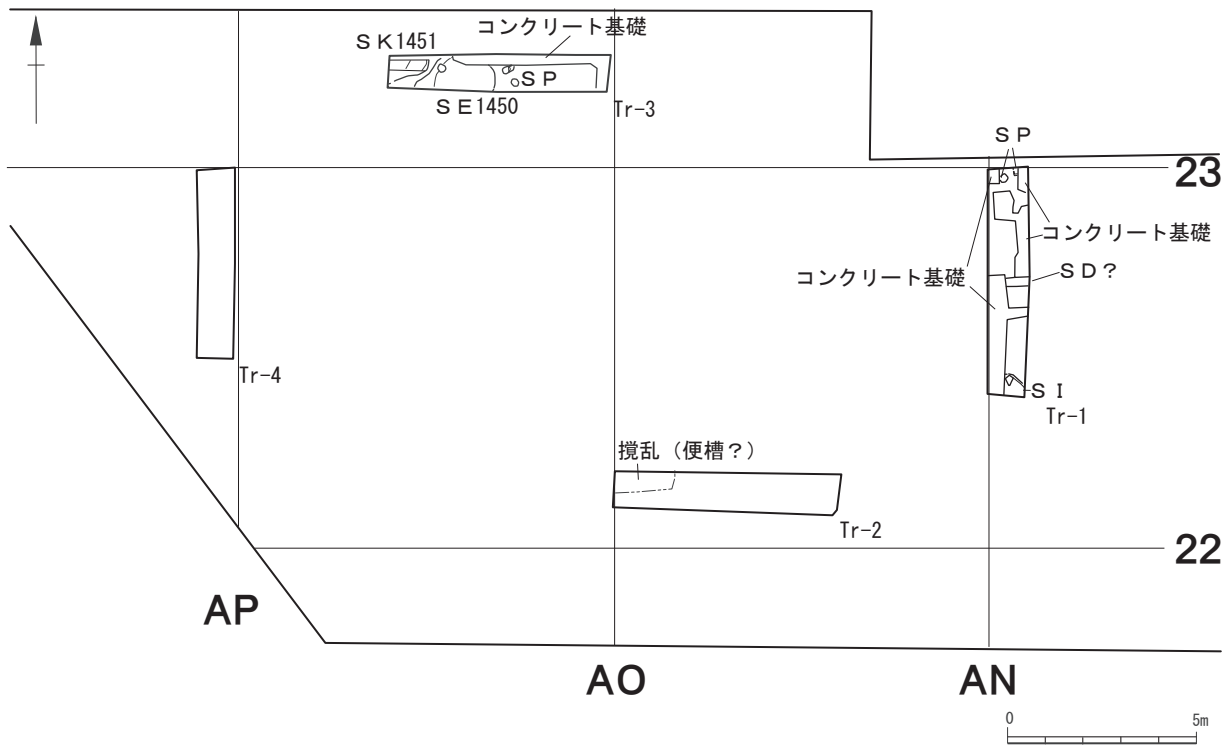
図 31 大館城跡土層柱状図 (1 : 40)

表22 大館城跡遺構一覧

種別	竪穴建物跡	溝	井戸跡	柱穴・柱穴 様ピット	計
数	1	1	2	5	9

表23 大館城跡出土遺物一覧

分類	P			合計
	1	2	3	
調査区遺構				
S K 1451	10	1		11
AM－22	1		1	2
AN－22	1			1
AO－23	4	1		5
AP－22	5	2	1	8
合計	21	4	2	27



SI1455

1 10YR2/1 黒色 パミス (φ1 ~ 15 mm) 少量混入。しまりあり。粘性弱。

SE1450

- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色 黒色土少量混入。固くしまる。粘性弱。
- 3 10YR2/1 黒色 ロームブロック多量に混入。しまり、粘性あり。
- 4 10YR1.7/1 黒色 柔らかい。粘性ややあり。
- 5 10YR1.7/1 黒色 ローム粒微量混入。しまり、粘性あり。

SK1451

- 1 10YR2/2 黒褐色 柔らかい。粘性あり。
- 2 10YR1.7/1 黒色 しまりなし。粘性あり。
- 3 10YR2/1 黒色 パミス (φ1 ~ 2 mm) 少量混入。柔らかい。粘性あり。
- 4 10YR2/1 黒色 ロームブロック少量混入。しまり、粘性あり。

図 32 大館城跡確認調査平面図 (1 : 200) ・井戸跡 1450 ・土坑 1451 (1 : 40)



調査地全景



トレンチ 1 調査状況



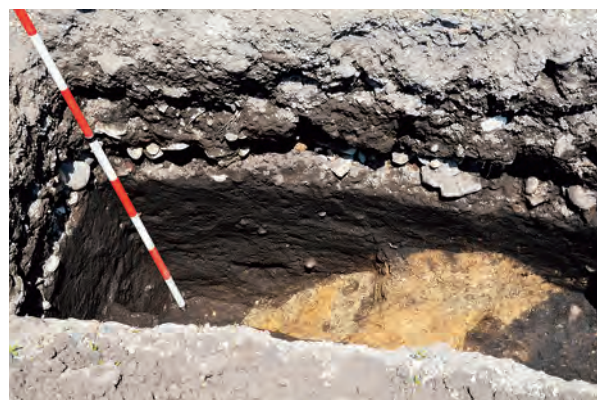
トレンチ 2 調査状況



トレンチ 3 調査状況



井戸跡 1450 調査状況



土坑 1451 調査状況



トレンチ 4 調査状況



トレンチ 4 出土遺物



図版 16 大館城跡調査状況と出土遺物

(5) 大館城跡隣接地

1) 調査の経緯

今回調査を実施した金坂地区は、周辺が宅地化されているが、当該箇所が宅地化されずに残っていた。当該箇所において民間事業によるアパート新築工事が計画されたことから、事業主に計画予定地が大館城跡の隣接地であること、事業着手前に試掘調査を含めた事前協議の必要である旨説明した。

今回、土地所有者から調査協力の承諾を得たことから、試掘調査を実施した。

2) 調査方法

調査実施にあたり、平面直角座標系のX・Y軸を座標系として基本区画10×10mの発掘区を設定した。発掘区の名称は令和3年度の金坂遺跡試掘調査で設定したものに準拠する。今回の調査範囲は、Y = Z～D、X = -12～-7である（図28）。公共座標（世界測地系）は、Z--12区でX = 30,280.000、Y = -22,380.000、D--8区でX = 30,320.000、Y = -22,420.000である。調査範囲内に1m角のテストピット13箇所を設定して掘削は全て人力で行い、埋蔵文化財の有無及び包含層の残存状況等を調査した。基本層序は、基盤層上に腐植土層が堆積する。

I層 表土。

II層 黒色を呈する腐植土層。a～c層に細分される。

II a層 黒色（10Y R2/1）を呈する。

II b層 黒色（10Y R1.7/1）を呈する。

II c層 黒色（10Y R2/1）を呈する。

III層 黒褐色を呈する土層。II層とIV層の漸移層。

IV層 褐色を呈するシルト質土層。

3) 調査の結果

今回の調査で検出した遺構は、B--12・11区から土坑1基、集石2箇所、Z--9区、A--11区、B--11区、B--10区、C--9区、D--9区から柱穴・柱穴様ピット7基、遺物は近世以降の陶磁器片を37点得た。

図版17はB--12・11区出土の近世陶磁器。1～4は染付磁器。1・2は碗、3は皿、4は皿または鉢である。1は外面のみ染付される。虫食い状に釉が剥がれている。5は呉器手碗とみられる。

以上のように、今回の調査では明確な中世以前の遺構・遺物が出土していないため、これ以上の調査は必要ないと判断した。

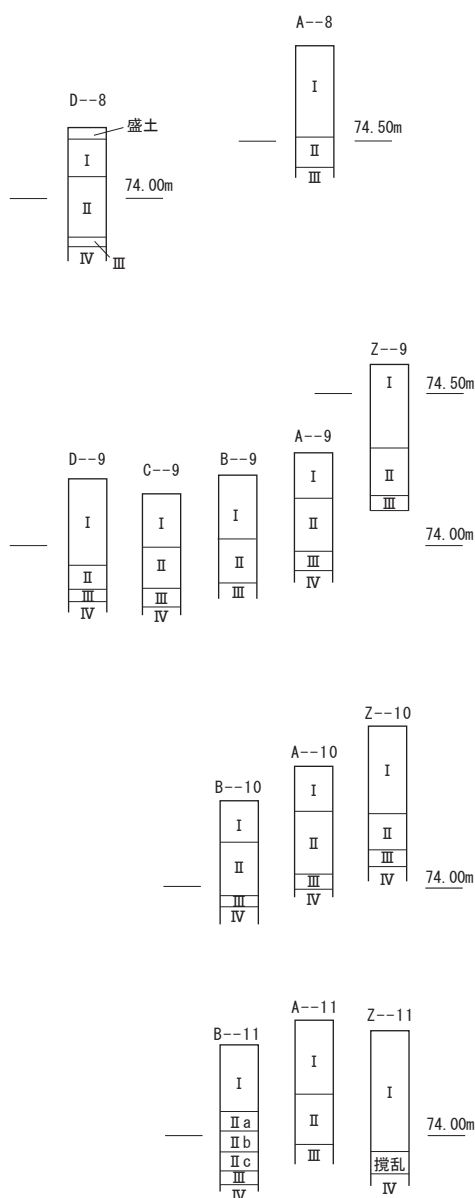


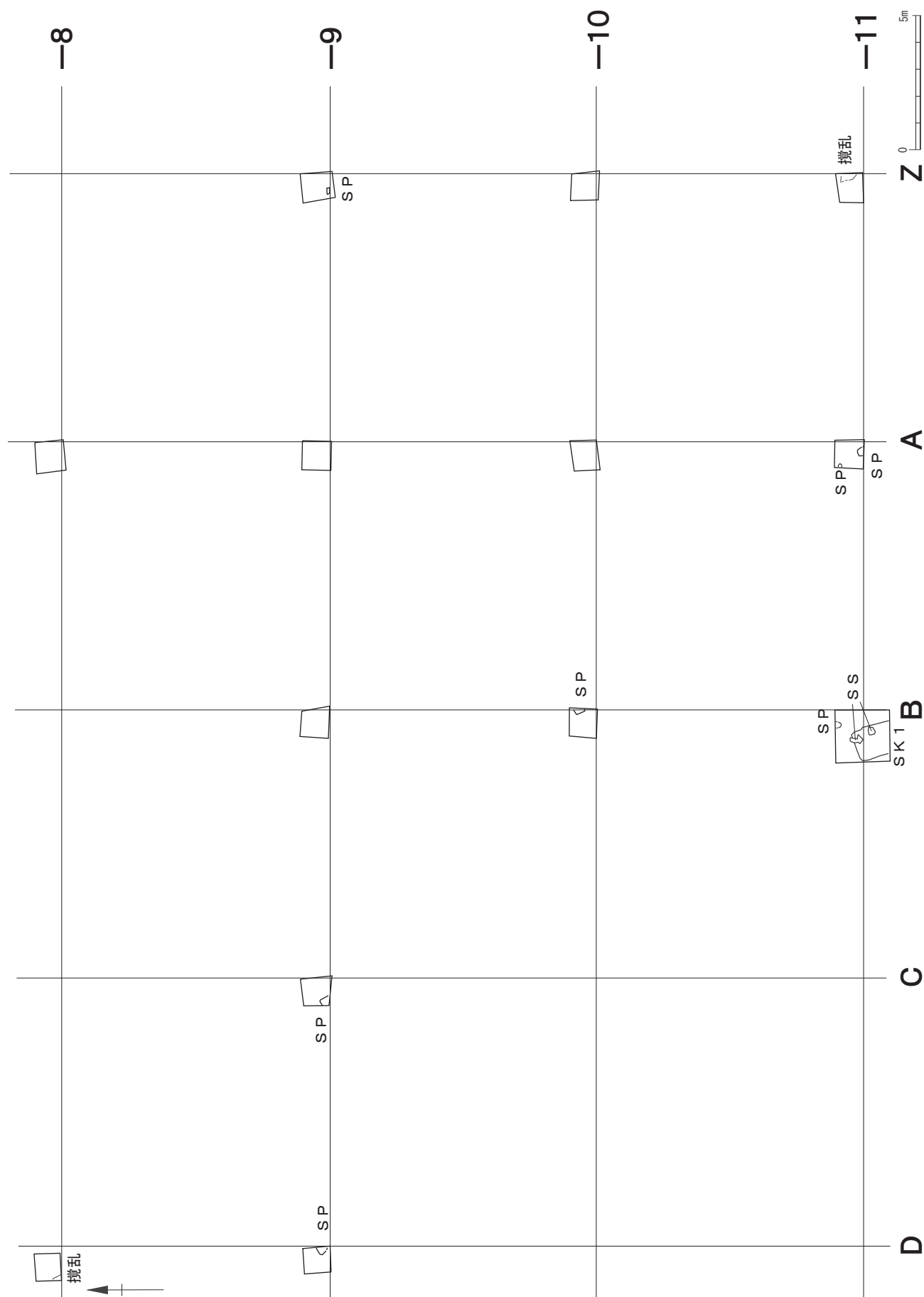
図 33 大館城跡隣接地土層柱状図 (1 : 40)

表24 大館城跡隣接地遺構一覧

種別	土坑	柱穴・柱穴 様ビット	集石	計
数	1	7	2	10

表25 大館城跡隣接地出土遺物一覧

分類 調査区遺構	P		合計
	8		
	1	2	
Z -- 11	3	1	4
Z -- 9	1		1
A -- 10	1		1
B -- 12	4	3	7
B -- 12・11	10		10
B -- 11	3		3
C -- 9	2		2
D -- 9	3		3
D -- 8	1	2	3
表採	3		3
合計	31	6	37





調査地全景



Z--9区



A--11区



B--11・12区



土坑1 堆積状況

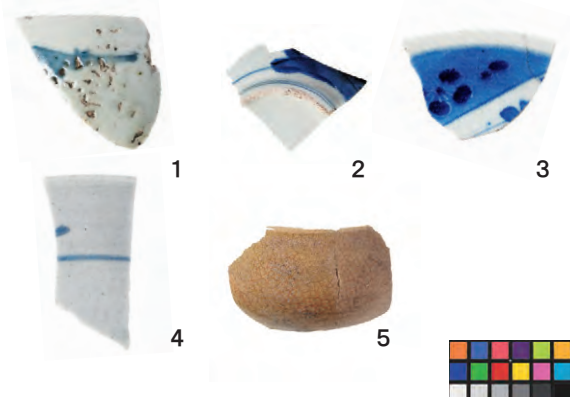


B--10区



D--9区

B-12・-11



図版 17 大館城跡隣接地調査状況と出土遺物

(6) 柄沢地区

1) 調査の経緯

今回調査を実施した柄沢地区は、周辺が宅地化されているが、当該箇所が宅地化されずに残っていた。当該箇所において民間事業による店舗新築工事が計画されたことから、事業者が依頼した建築設計事務所に計画予定地の付近には餌釣館跡が存在すること、事業着手前に試掘調査を含めた事前協議の必要である旨説明した。事業者及び土地所有者から調査協力の承諾を得たことから、令和5年9月に試掘調査を実施した。

2) 調査方法

調査実施にあたり、平面直角座標系のX・Y軸を座標系として10×10mの基本区画を新規に設定した。発掘区における公共座標（世界測地系）は、A-1区で $X=28,450.000$ 、 $Y=-21,540.000$ 、F-5区で $X=28,490.000$ 、 $Y=-21,590.000$ である。調査範囲内に1m角のテストピット16箇所を設定して掘削は全て人力で行い、埋蔵文化財の有無及び包含層の残存状況等を調査した。

調査地内の層序は、基盤をなす褐色シルト質土層上に腐植土層が堆積する。

I層 表土。

II層 黒褐色を呈する腐植土層。

III層 にぶい黄褐色を呈する土層。II層とIV層の漸移層。

IV層 褐色～灰黄褐色を呈するシルト質土層。

3) 調査の結果

調査の結果、調査地内の大半は、土地改良、耕作等による削平が基盤層まで達しており、南東側の一部に黒色腐植土層がわずかに残存するだけである。D-1～3・6区から近代以降の溝1条、D-6区から溝に切られる黒色土落ち込み1箇所を検出したものの、遺構、遺物はいずれの発掘区からも確認されず、今回の調査対象地には埋蔵文化財包蔵地は所在していないものと判断した。



図 35 柄沢地区調査区と周辺の地形 (1:2,500)

1 大館地区

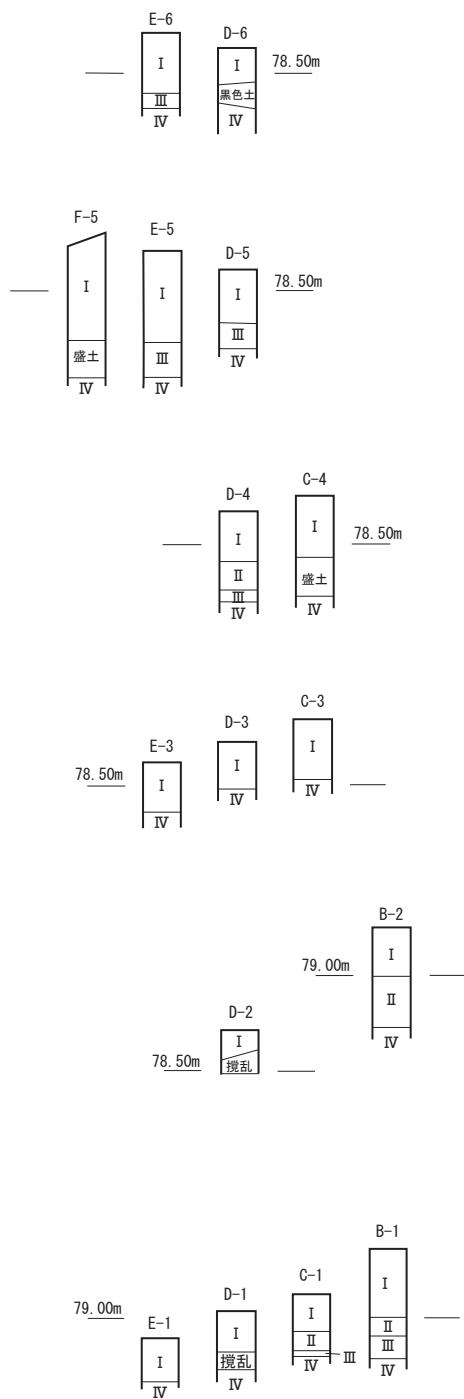


図 36 柄沢地区土層柱状図 (1 : 40)



調査地全景



調査状況



B-2区



D-6区

図版18 柄沢地区調査状況

(7) 釈迦内地区

1) 調査の経緯

釈迦内字二ツ森地内において公共事業による消防団車庫新築が計画されたことから、担当課に新築予定地の南及び西200～300m内に二ツ森遺跡・二ツ森Ⅱ遺跡が所在すること、事業着手前に試掘調査を含めた事前協議の必要である旨説明した。担当課及び土地所有者の承諾を得て、令和5年9月に試掘調査を実施した。

2) 調査方法

調査にあたり、対象範囲内に1.5m×4mのトレンチを任意に設定した。掘削は全て人力で行い、基盤層である黄褐色粘質土層（Ⅱ層）まで掘り下げ、遺構の有無の確認・遺物の収集等を行った。

調査地内の基本層序は、基盤層に盛土が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

I層 表土・盛土。

Ⅱ層 黄褐色を呈する粘質土層。

3) 調査の結果

調査の結果、遺構・遺物は確認されなかったことから、今回の調査対象地には埋蔵文化財包蔵地は所在していないものと判断した。



図 37 釈迦内地区調査区と周辺の地形 (1:2,500)

1 大館地区

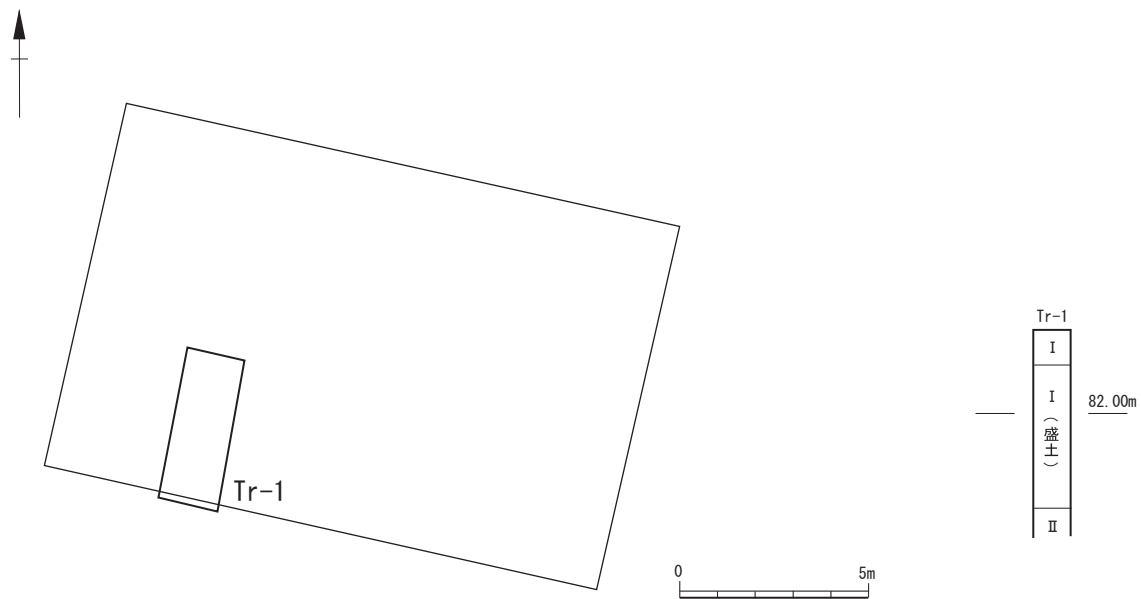


図38 釈迦内地区試掘調査平面図(1:200)・土層柱状図(1:40)



調査地近景



トレンチ 1 (北から)



トレンチ 1 南側完掘 (北から)



トレンチ 1 土層 (西から)

図版19 釈迦内地区調査状況

(8) 萩ノ台Ⅱ遺跡

1) 調査の経緯

萩ノ台Ⅱ遺跡は、平成4年度に秋田県埋蔵文化財センターの発掘調査により縄文時代前期後半～後期前半に帰属する捨て場遺構が確認されている（秋田県埋蔵文化財センター編1993）。また、平成16年度に実施した携帯電話無線基地局建設に伴う確認調査により、縄文時代の遺構・遺物が発見されている（大館郷土博物館編2008）。

今回、公共事業による下水道整備が計画されたことから、事業担当課に整備予定地が萩ノ台Ⅱ遺跡内及び隣接地であること、事業着手前に試掘調査の必要である旨説明した。事業担当課の理解を得て工事施工業者の協力のもと、令和5年10月に試掘調査を実施した。

2) 調査方法

今回の調査にあたっては、下水道工事予定地内に任意に1×1.5mを基本としたテストピットを32箇所設定した。調査区内の掘削は、表層のアスファルト・碎石から地山面に達するまでの約30～50cmを重機で掘削し、遺構・遺物の有無等を調査した。

調査区内の基本層序は、5層に大別することができる。

I 層	舗装・路盤・黒褐色砂質土	10YR2/2	やや締まりあり
II 層	黒色粘質土層	10YR1.7/1	遺物包含層
III 層	にぶい黄褐色土層	10YR5/4	漸移層
IV a 層	黄褐色ローム層	10YR5/8	地山層
IV b 層	明黄褐色シラス層	10YR6/6	地山層
IV c 層	褐色砂層	10YR4/4	地山層
V 層	黒色粘質土層	10YR1.7/1	植物遺存体まばらに含む。泥炭層？

3) 調査の結果

調査の結果、TP-4・TP-7・TP-9・TP-11～18・TP-22～25・TP-29～32では、黄褐色ローム層（IV a 層）の堆積を確認することができた。また部分的ではあるが遺物包含層である黒色粘質土層（II 層）も残存していた。しかしそれ以外の地点（TP-1～3・TP-5～6・TP-8・TP-10・TP-19～21・TP-26～28）では路盤直下から本来、黄褐色ローム層の下位に位置するシラス層（IV b 層）や褐色砂層（IV c 層）・泥炭層（V 層）が検出されたことから、道路・宅地造成の際に大規模な削平を受けていることが考えられる。今回の調査では、遺構・遺物は確認されなかったことから、本工事の際の対応は、黄褐色ローム層が検出できた範囲を中心に、工事立会の実施等の措置が妥当と判断した。



図 39 萩ノ台Ⅱ遺跡調査区と周辺の地形 (1:2,500)

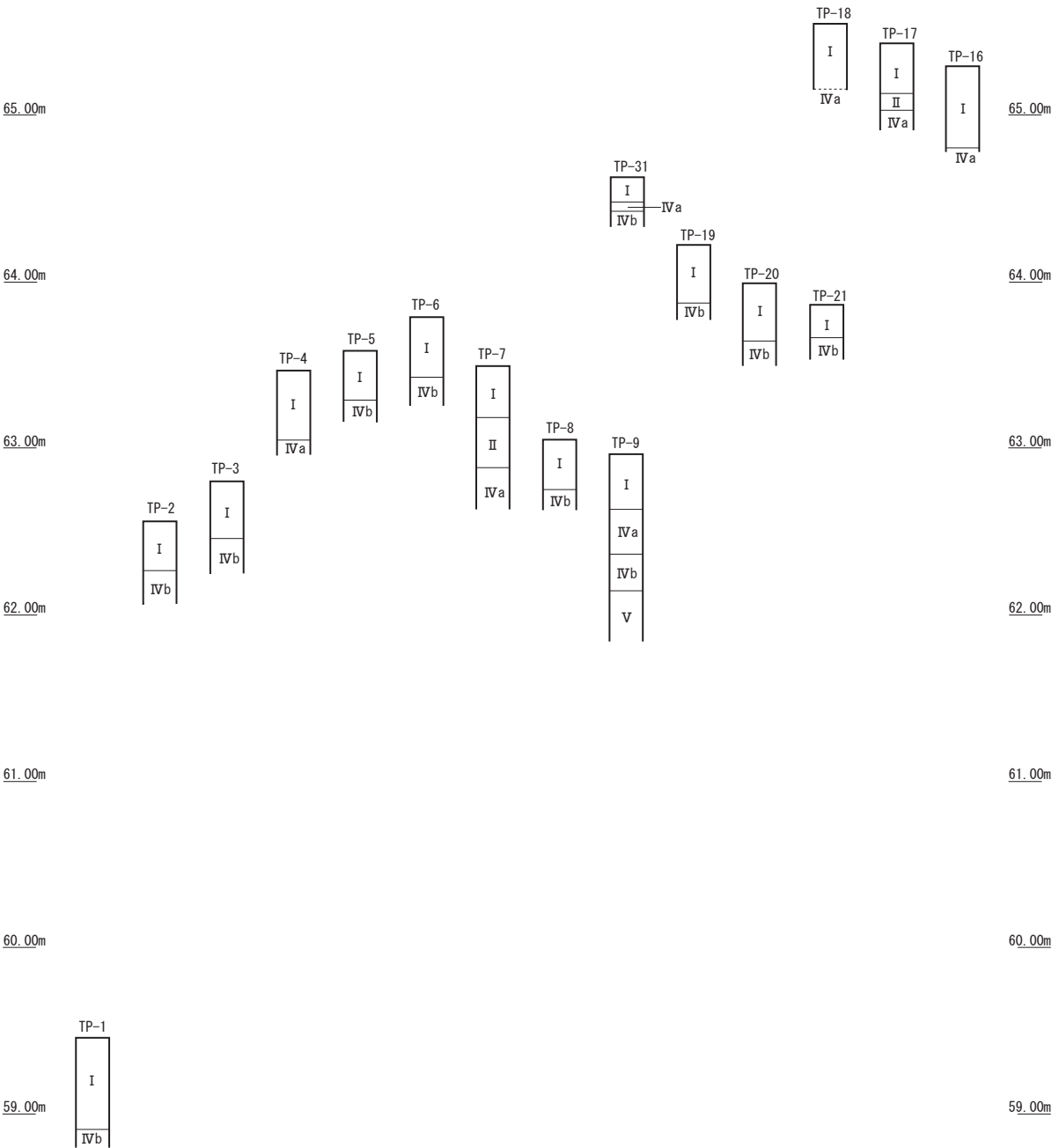


図 40 萩ノ台Ⅱ遺跡土層柱状図 (1) (1 : 40)

1 大館地区

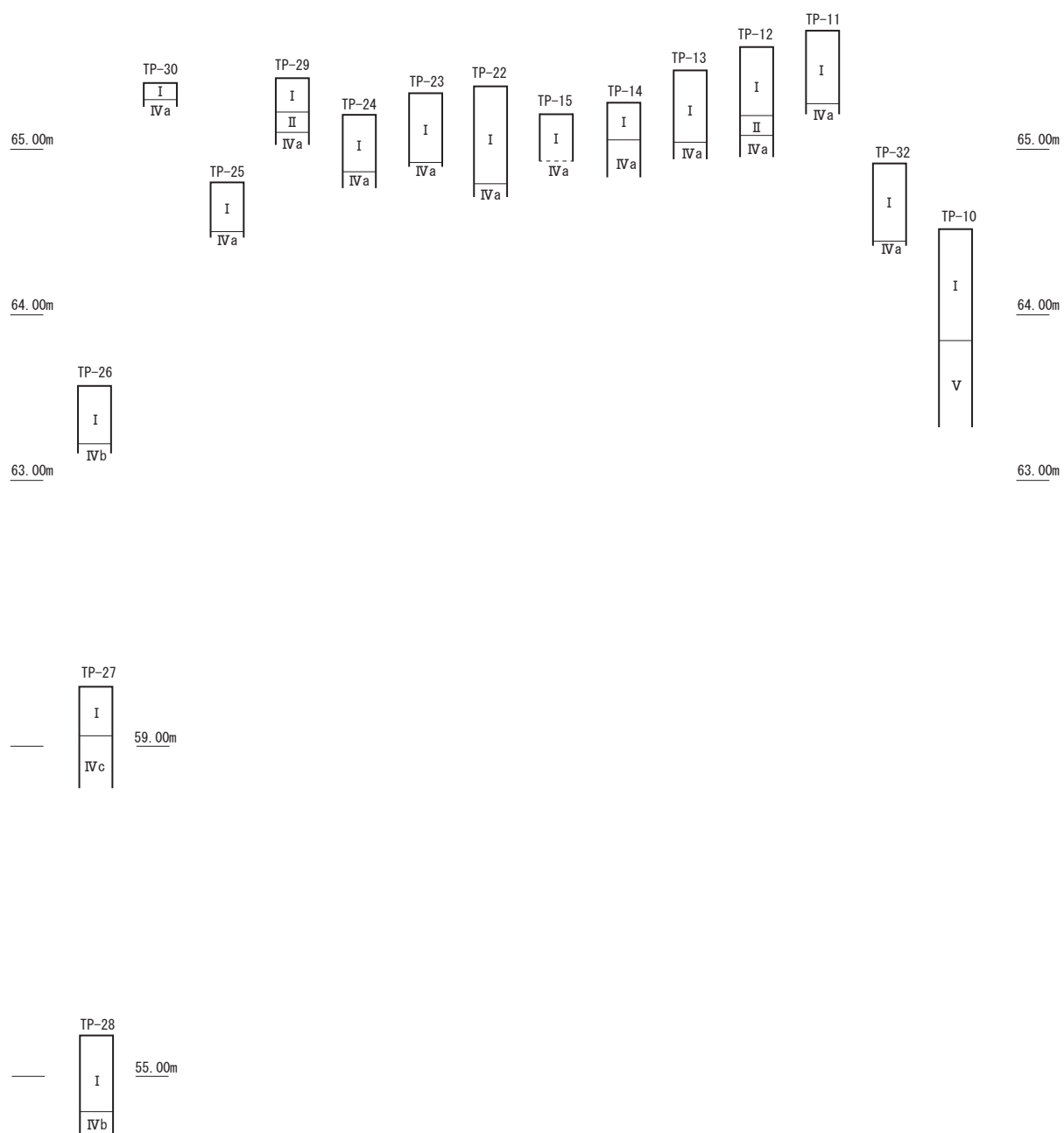


図 41 萩ノ台Ⅱ遺跡土層柱状図(2)(1:40)



調査区近景 TP-2・3・9 (南西から)



TP-3 (南西から)

図版 20 萩ノ台Ⅱ遺跡調査状況(1)



調査区近景 T P - 12・13・14 (東から)



T P - 12 (東から)



調査区近景 T P - 17・18 (南西から)



T P - 17 (北東から)



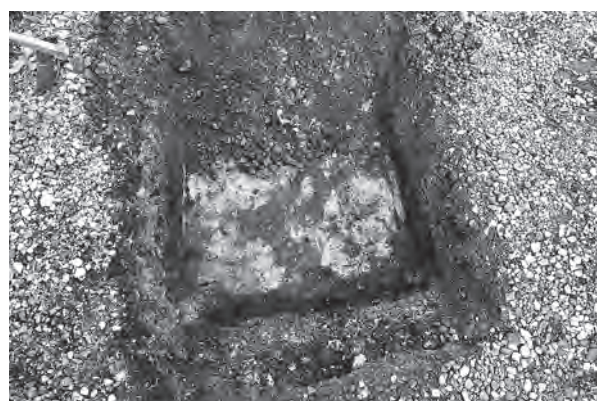
調査区近景 T P - 23・24 (北西から)



T P - 23 (南東から)



T P - 20 (南から)



T P - 29 (南から)

図版 21 萩ノ台Ⅱ遺跡調査状況 (2)

(9) 中山地区

1) 調査の経緯

中山字中谷地地内において公共事業によるほ場整備が計画されたことから、事業主に整備予定地が竜毛岱遺跡の隣接地であること、事業着手前に試掘調査を含めた事前協議の必要である旨説明した。事業者及び土地所有者の承諾を得て、令和5年11月に試掘調査を実施した。

2) 調査方法

調査にあたりテストピットは、対象範囲内に任意に1m×1mの規模で6箇所を設定して、掘削は全て人力で行った。基盤層（VI層）まで掘り下げ、遺構の有無の確認・遺物の収集等を行った。

調査地内の基本層序は、基盤層に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

I層 表土・盛土層。

II層 黄褐色～褐色を呈する軽石質火山灰層。（十和田a降下火山灰の再堆積層と考えられる）

III層 褐色を呈する砂質土層。（十和田a降下火山灰層である）

IV層 黒色を呈する腐植土層。

V層 暗褐色を呈する腐植土層。IV層とVI層の漸移層である。

VI層 黄褐色を呈する粘質土層。

3) 調査の結果

調査の結果、遺構・遺物は確認されなかったことから、今回の調査対象地には埋蔵文化財包蔵地は所在していないものと判断した。



図 42 中山地区調査区と周辺の地形 (1:2,500)

1 大館地区

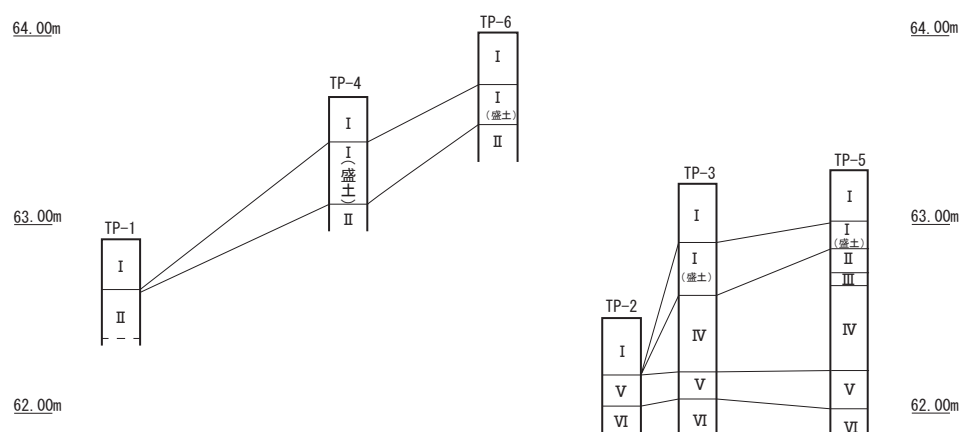


図 43 中山地区土層柱状図 (1 : 40)



調査区近景 (南東から)



調査区近景 (北西から)



TP-5 調査状況 (南東から)



TP-3 (北西から)



TP-5 (北西から)



TP-6 (北西から)

図版 22 中山地区調査状況

(10) 餅田地区①

1) 調査の経緯

餅田地区において公共事業による消防団車庫新築が計画されたことから、担当課に新築予定地が餅田屋敷添遺跡の隣接地であること、事業着手前に試掘調査を含めた事前協議の必要である旨説明した。担当課及び土地所有者の承諾を得て、令和6年9月に試掘調査を実施した。

2) 調査方法

調査にあたりトレンチは、対象範囲内に任意に設定した。2m×5mの規模で設定し、掘削は全て人力で行い、基盤層まで掘り下げ、遺構の有無の確認・遺物の収集等を行った。

調査地内の基本層序は、基盤層は確認できず盛土が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

I 層 表土・盛土。

3) 調査の結果

今回の調査では、工事で掘削される60cm程度までとしたが、基盤層が確認されなかったことから、一部で110cmまで掘削したものの、コンクリート塊が混入する盛土が厚く堆積していた。

調査の結果、遺構・遺物は確認されず調査区全域にわたり造成により厚く盛土されていたことから、今回の調査対象地には埋蔵文化財包蔵地は所在していないものと判断した。

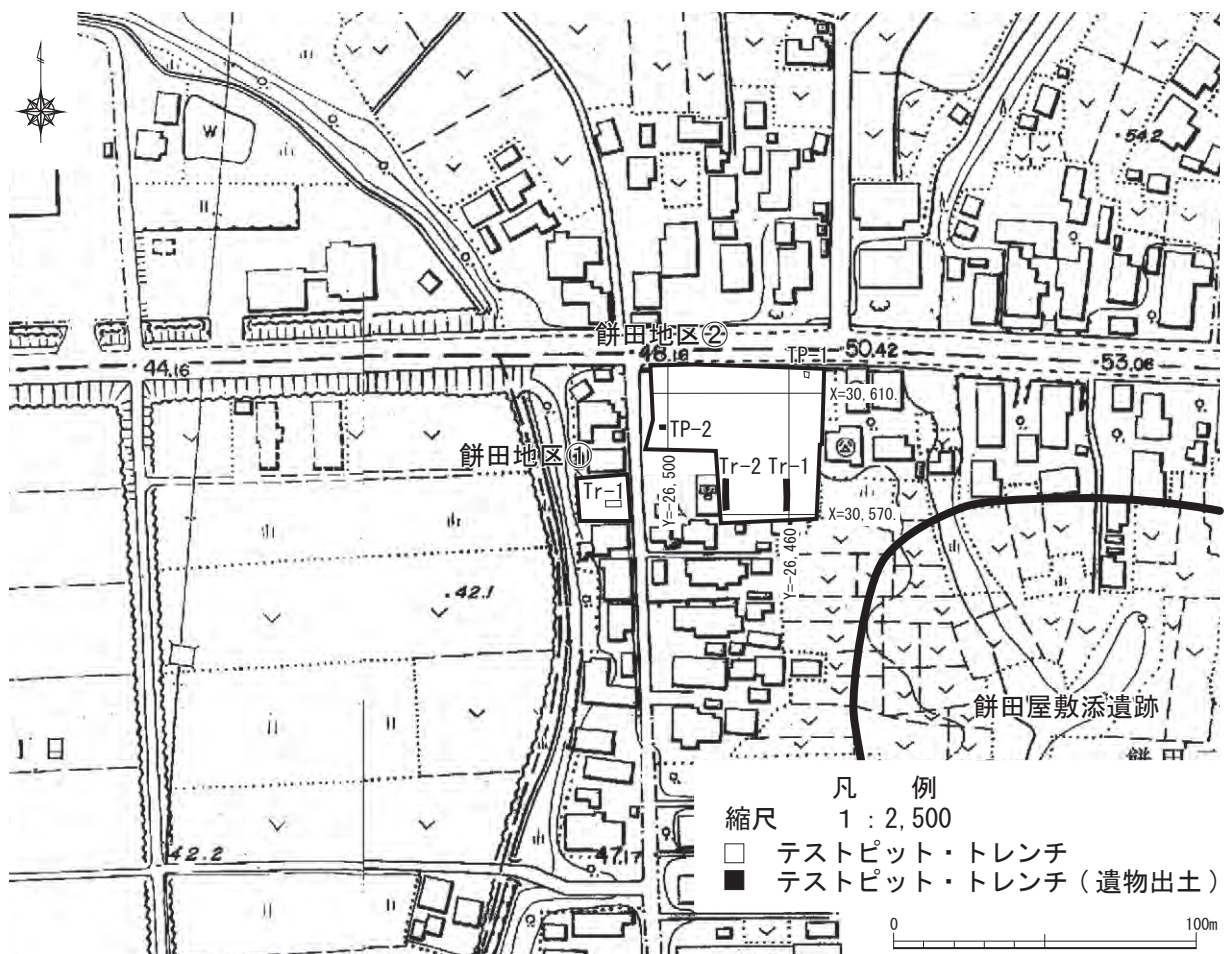


図 44 餅田地区調査区と周辺の地形 (1 : 2,500)

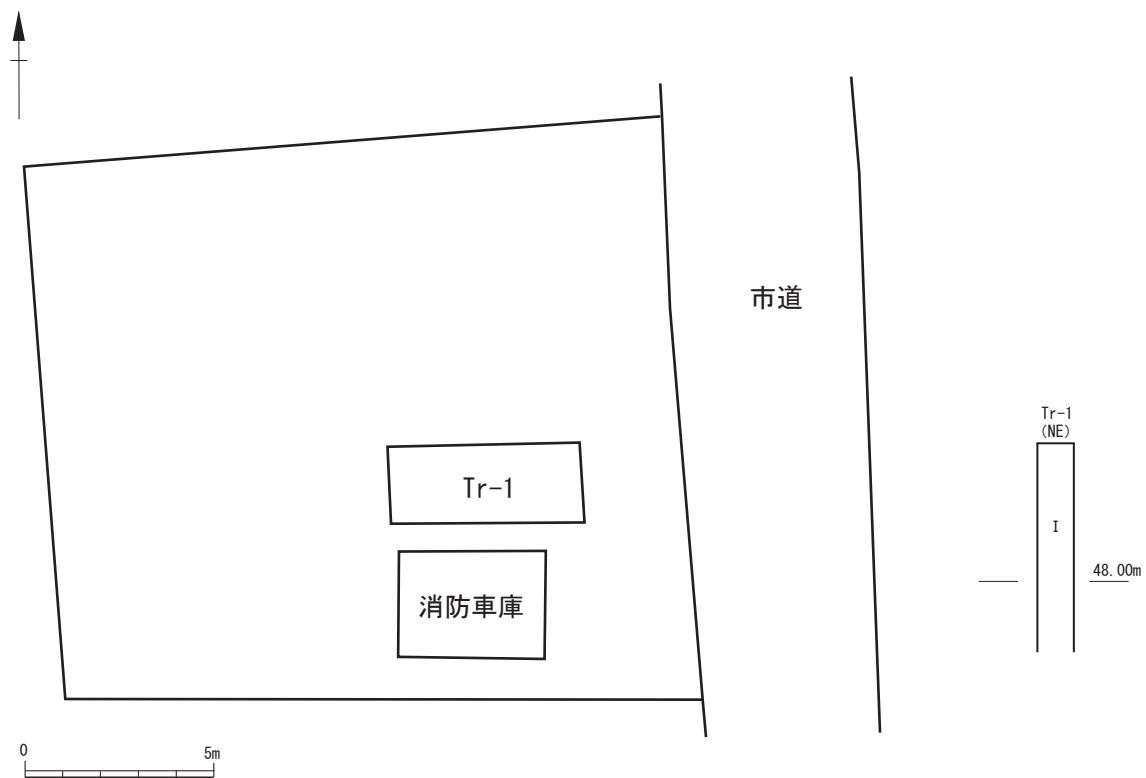


図 45 餅田地区①試掘調査平面図 (1 : 200) ・土層柱状図 (1 : 40)



調査区近景 (東から)



調査状況



トレンチ (西から)



トレンチ土層 (南から)

図版 23 餅田地区①調査状況

(II) 餅田地区②

1) 調査の経緯

餅田地区において民間事業による店舗新築工事が計画されたことから、事業者が依頼した建築設計事務所に計画予定地が餅田屋敷添遺跡の隣接地であること、事業着手前に試掘調査を含めた事前協議の必要である旨説明した。事業者及び土地所有者から調査協力の承諾を得たことから、令和6年10月に試掘調査を実施した。

2) 調査方法

調査実施にあたり、平面直角座標系のX・Y軸を座標系として設定した。対象範囲を包括できるように基本区画を10×10mとし新規に設定した。発掘区における公共座標（世界測地系）は、調査区南西部でX=30,570.00、Y=-26,480.00、北西部でX=30,620.00、Y=-26,500.00である。調査対象範囲内にY軸方向に1.5m×10mのトレンチ2本とテストピット2箇所を設定した（図44）。掘削は重機を用いて行い、埋蔵文化財の有無及び包含層の残存状況等を調査した。なお、調査区西部のテストピットは樹木が生い茂り、重機による掘削ができなかったため、人力にて掘削した。

調査地内の層序は、基盤をなす暗灰黄色砂質土層に表土層が堆積する。土層の定義は下記のとおり。

I層 表土。

II層 暗褐色～暗灰黄色を呈する砂質土層。

3) 調査の結果

調査の結果、トレンチ調査を実施したX=30,570.00ラインより南側は全面的に旧表土以下が削平されていた。Tr-1は明治～大正期の染付磁器が埋まっていた。おそらくこの時期に耕作地として使用されていたのであろう。Tr-2から、近世染付磁器を得たが、表土中の出土であり、原位置は保っていない。この箇所からは、Tr-2より土坑1基（SK1）と溝跡2条、柱穴様ピット7基を検出し、土坑中から磁器1点を得た。TP-2では、盛土され旧表土は削平されていた。この箇所では検出した遺構は、柱穴様ピット3基と近世陶磁器を得られたが、中世以前のものは存在していない。

図版24-1はTr-1から得た染付青磁の皿。見込みには竜が描かれている。青磁はクロム青磁。瀬戸・美濃焼で明治～大正頃のものである。2はTr-2から得た染付磁器。推定口径11.6cm程の小皿。見込み蛇ノ目釉剥ぎで、口縁部内面に斜格子文、体部と見込みの境に2重圈線が描かれている。肥前の波佐見系で、IV期～V期の内、18世紀後半に位置付けられる。3・4はTP-2から得られた陶磁器。3は染付碗の体～底部片。肥前産でIV期の内、18世紀前半のもの。4は播鉢。内外面無釉で肥前産のIII期のものである。

以上の結果から、検出された遺構・遺物は近世以降の餅田村に関わるものと考えられる。今回の調査範囲には、埋蔵文化財包蔵地が所在しないと判断した。

表26 餅田地区②遺構一覧

種別	土坑	溝跡	柱穴様 ピット	計
数	1	2	10	13

表27 餅田地区②出土遺物一覧

分類 調査区遺構	8		合 計
	1	2	
SK1	1		1
Tr-1	2		2
Tr-2	1		1
TP-2	1	1	2
合計	5	1	6

1 大館地区

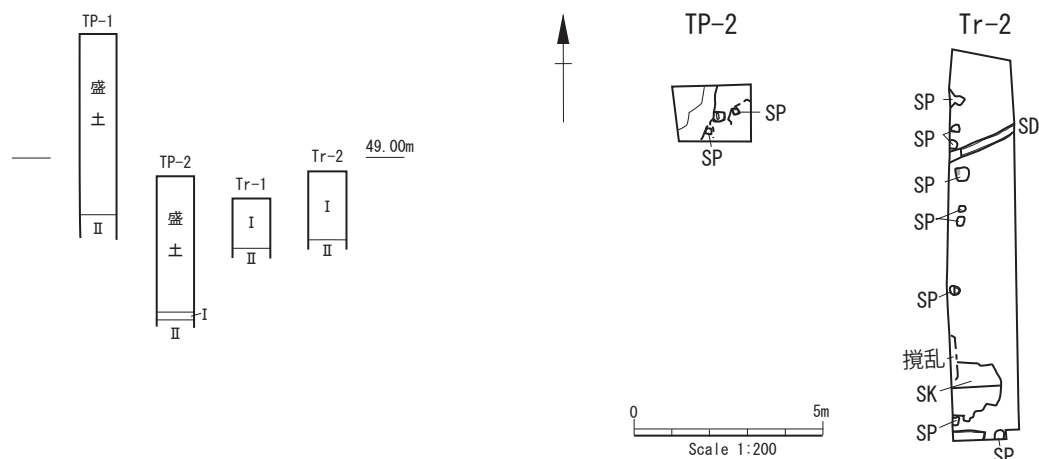


図 46 餅田地区②土層柱状図 (1:40)・試掘調査平面図



調査地近景



TP-2 柱穴様ピット



Tr-1



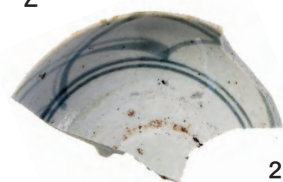
Tr-2 遺構検出状況

Tr-1



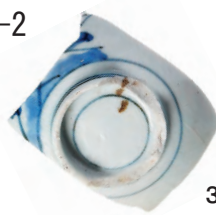
1

Tr-2



2

TP-2



3



4



図版 24 餅田地区②調査状況と出土遺物

(12) 曲田地区

1) 調査の経緯

曲田地区において公共事業によるほ場整備が計画されたことから、事業者には整備予定地の一部が野沢岱Ⅰ遺跡の隣接地であること、事業着手前に試掘調査を含めた事前協議の必要である旨説明した。事業者及び土地所有者の承諾を得て、令和6年11月に試掘調査を実施した。

2) 調査方法

調査にあたりテストピットは、対象範囲内に任意に2m×2mの規模で15箇所を設定した。掘削は全てバックホーで行い、人力にて精査を行った。基盤層（Ⅷ層）まで掘り下げ、遺構の有無の確認、遺物の収集等を行った。

調査地内の基本層序を以下のとおり示す。

- I 層 表土・盛土層。(耕作土)
- II 層 黒褐色～黄灰色を呈する砂質土層。
- III 層 暗オリーブ褐色～暗褐色を呈するシルト質土層。
- IV 層 灰黄褐色を呈する砂質土層。
- V 層 褐色～にぶい黄褐色を呈する砂質土層。
- VI 層 暗褐色を呈する砂質土層。
- VII 層 黒褐色を呈するシルト質土層。
- VIII 層 にぶい黄褐色を呈する砂質土層。
- IX 層 にぶい黄褐色を呈するシルト質土層。
- X 層 暗褐色を呈する粘質土層。
- XI 層 褐色を呈する粘質土層。
- XII 層 にぶい黄褐色を呈する粘質土層。

3) 調査の結果

調査の結果、T P－5及びT P－7～15の調査区中央から東側の標高が64m以上の箇所では、基盤層であるⅧ層にⅠ層が堆積するだけであったため、昭和41～43年に実施された曲田基盤整備事業の際に削平されていると考えられる。今回の調査では、遺構・遺物は確認されなかったことから、今回の調査対象地には埋蔵文化財包蔵地は所在していないものと判断した。



図 47 曲田地区調査区と周辺の地形 (1) (1:2,500)

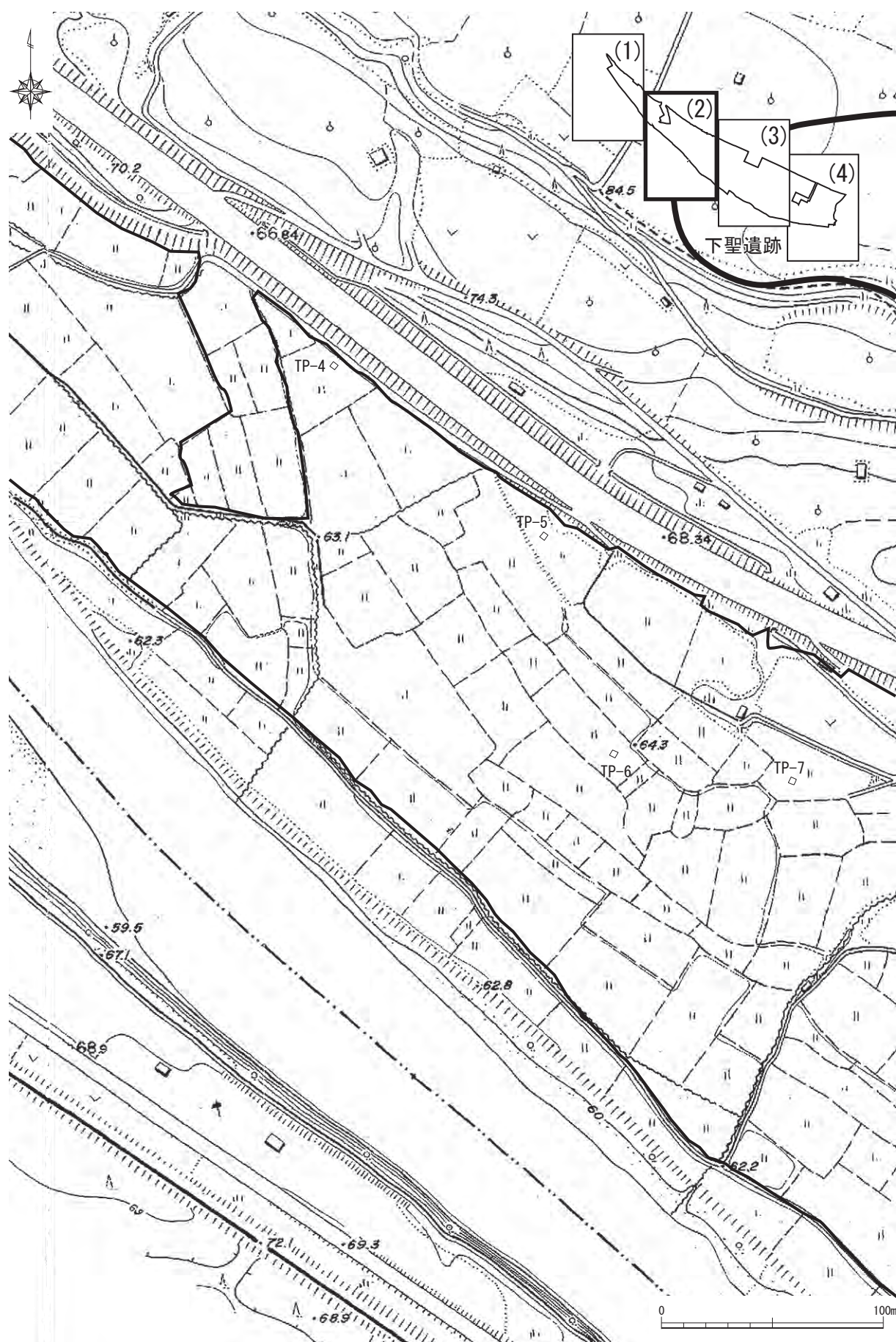


図 48 曲田地区調査区と周辺の地形 (2) (1:2,500)

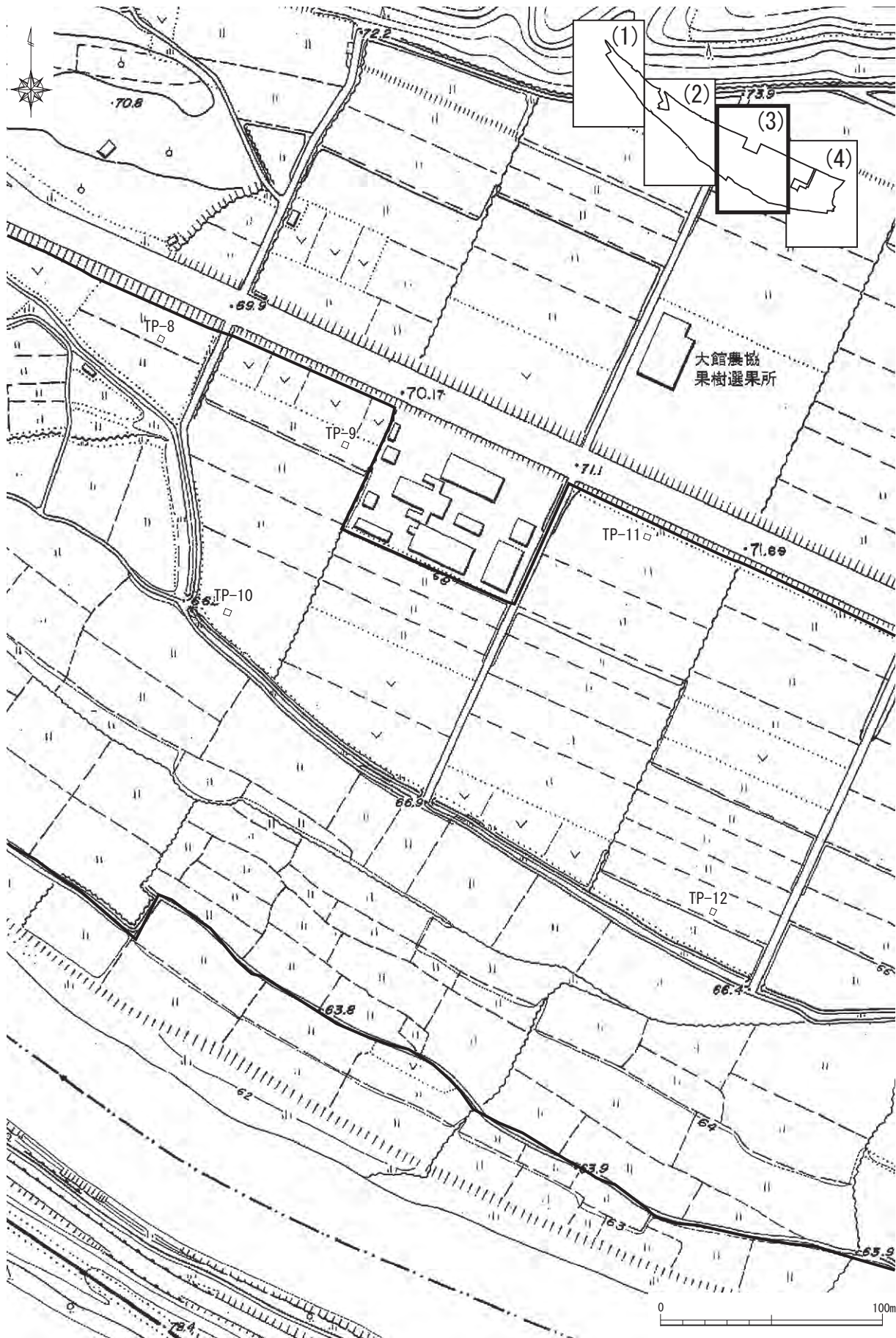


図 49 曲田地区調査区と周辺の地形 (3) (1:2,500)



図 50 曲田地区調査区と周辺の地形 (4) (1:2,500)

1 大館地区

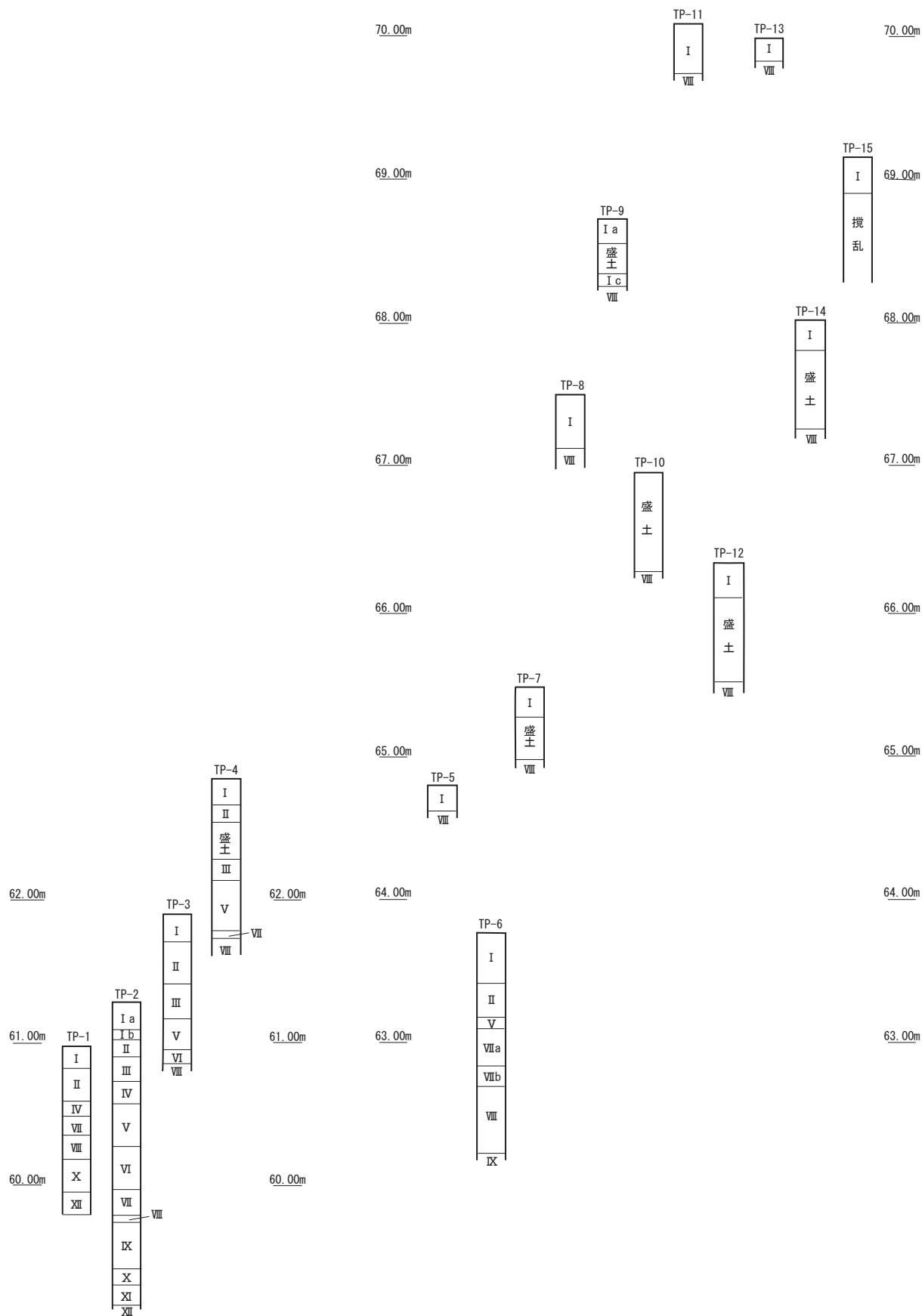


图 51 曲田地区土層柱状图 (1 : 40)



調査区西部 T P - 1 ~ 3 (北西から)



調査状況 (南東から)



T P - 2 (南東から)



T P - 4 (南西から)



調査区中央部 T P - 7 ~ 10 (南東から)



T P - 8 (西から)



調査区東部 T P - 13 ~ 15 (北東から)



T P - 13 (南から)

図版 25 曲田地区調査状況

(13) 上聖遺跡

1) 調査の経緯

上聖遺跡は、平成3年度に農免農道整備事業に伴う秋田県埋蔵文化財センターの発掘調査により、縄文時代前期初頭の落とし穴や後期に帰属する貯蔵穴群などが確認されている（秋田県埋蔵文化財センター編1992）。

今回、県営ため池整備事業が計画されたことから、事業者に整備予定地が上聖遺跡内及び家ノ後遺跡隣接地であること、事業着手前に試掘調査の必要である旨説明した。土地所有者から調査協力の承諾を得たことから、令和6年11月に試掘調査を実施した。

2) 調査方法

今回の調査は、遺跡の東端部に当たる部分について実施した。樹木が生い茂り、重機による掘削ができなかったため、トレンチを対象範囲内に任意に設定し、人力にて掘削した。トレンチは1.5m×5mで設定した。基盤層まで掘り下げ、遺構の有無の確認等を行った。

層序は、前述の秋田県教育委員会による調査に準じた定義・表記とした。なお、今回の調査ではⅡ～Ⅴ層は存在していなかった。

Ⅰ層 表土。

Ⅱ層 明褐色を呈する軽石層で、大湯浮石層。

Ⅲ層 黒色を呈する。

Ⅳ層 黒褐色を呈する土層。

Ⅴ層 暗褐色を呈するⅣ層とⅥ層の漸移層。

Ⅵ層 黄褐色を呈するシルト層。

3) 調査の結果

調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。トレンチ東側は全面的に盛土され、盛土は1.5m以上ある。おそらく溜池の堤体として盛土されたのであろう。トレンチ西側はⅡ～Ⅴ層が確認できず、既に削平されたとみられる。この範囲は、埋蔵文化財が残存しないと判断される。遺物は調査地に隣接する北西側の山林でスクレイパー1点を表採した。



図 52 上聖遺跡調査区と周辺の地形 (1:2,500)

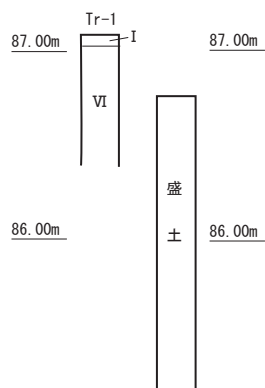


図 53 上聖遺跡土層柱状図 (1:40)



調査地遠景



調査地近景



作業状況



トレンチ 1



トレンチ 1 東側調査状況



図版 26 上聖遺跡調査状況と表採遺物

2 比内地区

(1) 市川遺跡

1) 調査の経緯

市川遺跡は、令和3年度に住宅新築工事に伴う確認調査が実施されている。調査では、遺構は確認されず鉄滓1点が得られている（大館市教育委員会2022）。

今回、前回調査地の東側隣接地において、個人による住宅新築が計画されたことから、建築主が依頼した工務店に新築予定地が市川遺跡内であること、事業着手前に確認調査の必要である旨説明した。土地所有者の承諾を得て、令和5年11月に確認調査を実施した。

2) 調査方法

調査にあたりトレンチは、対象範囲内に任意に設定した。1m×4mのトレンチを2箇所、1m×2mのトレンチを1箇所設定し、掘削は全て人力で行い、基盤層まで掘り下げ、遺構の有無の確認、遺物の収集等を行った。

調査区内の基本層序は、5層に大別することができる。

I層	黒褐色土	10YR3/2	耕作土
II層	軽石質火山灰層	10YR4/6	十和田a降下火山灰層
III層	黒色腐植土層	10YR2/1	遺物包含層
IV層	暗褐色粘質土層	10YR3/3	漸移層？
V層	黄褐色ローム層	10YR5/6	地山層

3) 調査の結果

調査の結果、遺構は確認できなかったが、Tr-1のI層から磁器片1点、III層から陶器片1点・縄文土器片14点・剥片1点、Tr-2のIII層から縄文土器片2点・加工痕ある剥片1点・剥片2点、Tr-3のI層から磁器片1点、III層から縄文土器片2点が出土した。なおTr-1内III層より出土した陶器片は、排土等からの混入品と考えられる。出土した土器のうち、縄文時代早期末～前期初頭に帰属すると考えられる土器片が2点（図版27-9・10）、中期に帰属する大木系土器と考えられる土器が4点（1・6）、後～晩期の土器が12点出土している（2～4）。いずれも胎土及び縄文の特徴から土器型式と帰属時期を推定した。なお、共伴して出土した剥片も同時期の帰属と考える。

また、周辺から4点の磁器片を表採した。出土・表採した遺物のうち、磁器片の産地はいずれも瀬戸・美濃産と見られ、帰属時期は近世末期～近代と考えられる。

今回の調査では、十和田a降下火山灰層（II層）以下が良好な残存状況であることを確認した。しかしながら、今回の新築工事に際しては1m程度盛土を行ったうえで基礎を設ける計画とのことで建築の詳細設計が確定したのちに協議を行い、基礎敷設による掘削は、盛土後の地表面から約40cmとのことで、造成土内で留まるため、慎重工事の軽微な対応で問題ないと判断した。

表28 市川遺跡出土遺物一覧

調査区遺構	P					S			合 計	
	2	4	5	8		計	1	2		計
				1	2		4			
T r - 1	2	2	12	1	1	16	1	1	1	17
T r - 2		2				2		2	3	5
T r - 3				1		3				3
表 採				4		4				4
計	2	4	12	6	1	25	1	3	4	29

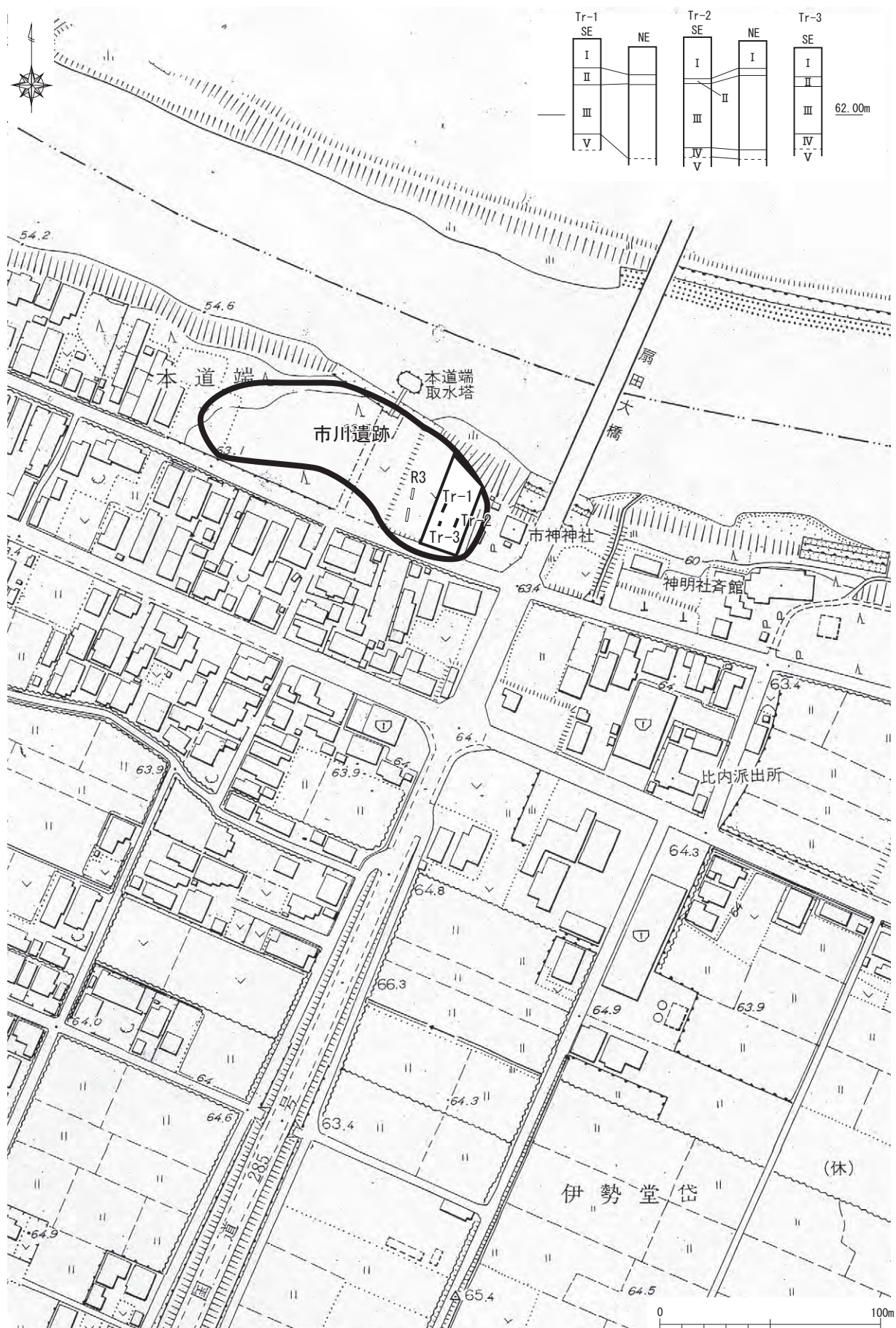


図 54 市川遺跡調査区と周辺の地形 (1:2,500)・土層柱状図 (1:40)



調査地近景（南西から）



Tr-1 遺物出土状況（南西から）



Tr-1 完掘状況（南西から）



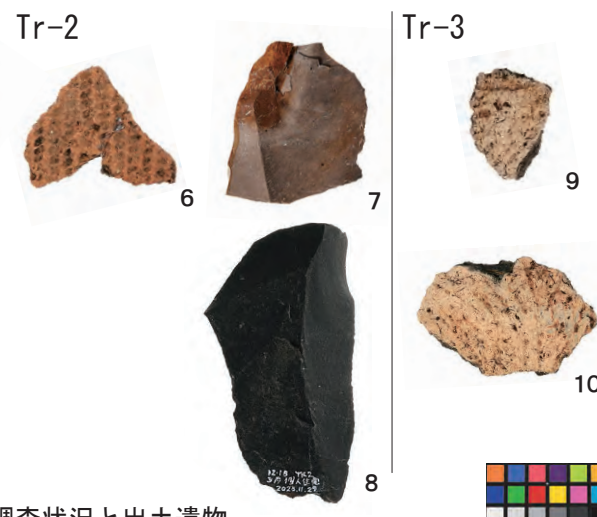
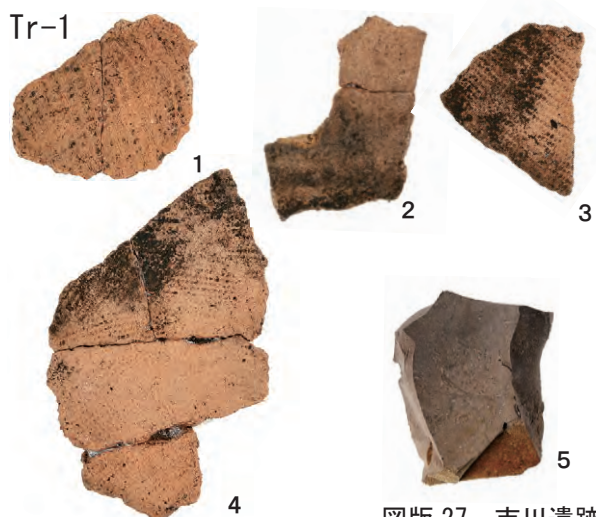
Tr-2 完掘状況（南西から）



Tr-3 完掘状況（南西から）



Tr-3 土層堆積状況（北西から）



図版 27 市川遺跡調査状況と出土遺物

3 田代地区

(1) 早口地区

1) 調査の経緯

早口字菅谷地地内において民間事業による家畜埋却計画がされたことから、事業主に計画予定地の南西400mに菅谷地遺跡が存在すること、事業着手前に試掘調査を含めた事前協議の必要である旨説明した。事業者及び土地所有者の承諾を得て、令和5年7月に試掘調査を実施した。

2) 調査方法

調査にあたりテストピットは、対象範囲内に任意に設定した。1m×1mの規模で4箇所設定し、掘削は全て人力で行い、基盤層まで掘り下げ、遺構の有無の確認・遺物の収集等を行った。

調査地内の基本層序は、基盤をなす灰黄褐色砂質土層（Ⅱ層）に表土及び造成土である盛土が厚く堆積するだけであった。以下に基本層序を示す。

I 層 表土・盛土層。

Ⅱ 層 灰黄褐色を呈する砂質土層。

3) 調査の結果

調査の結果、遺構・遺物は確認されず、調査区全域にわたり土地造成により削平及び厚く盛土されていると考えられ、今回の調査対象地には埋蔵文化財包蔵地は所在していないものと判断した。



図55 早口地区調査区と周辺の地形 (1 : 2,500)

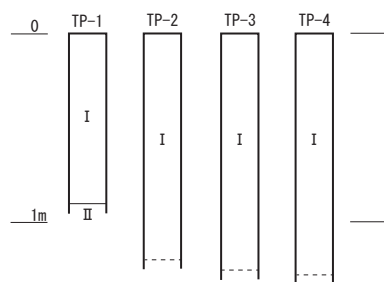


図56 早口地区土層柱状図 (1 : 40)



TP-1 近景 (南東から)



TP-1 (南から)



TP-2 (北から)



TP-3 (南から)



TP-4 近景 (北から)



TP-4 (西から)

図版 28 早口地区調査状況

(2) 茂屋下岱遺跡隣接地

1) 調査の経緯

茂屋下岱遺跡は、1969年に秋田県立大館鳳鳴高校社会部によって発掘調査が実施された遺跡であり、調査の結果、縄文時代前期に成立した遺跡であることが確認された。また特筆すべき事項として、茂屋下岱式土器の標式遺跡となった遺跡でもある（秋田県立大館鳳鳴高等学校社会部考古学班1971）。しかしながら、同年、周辺の県道改修工事によって遺跡の主体部であった丘陵が完全に削平され消失してしまい、現在では正確な遺跡位置及び遺跡範囲が不明となっている。

今回、山田字茂屋土栄口地内において民間事業による農業関係施設建設計画がされたことから、事業主に計画予定地が茂屋下岱遺跡の隣接地と想定されること、遺跡の広がり不明であることから事業着手前に試掘調査を含めた事前協議の必要である旨説明した。事業者及び土地所有者の承諾を得て、令和5年9月に試掘調査を実施した。

2) 調査方法

調査にあたりトレンチは、対象範囲内に任意に設定した。1m×8mのトレンチを1箇所、1m×1mのトレンチを2箇所設定し、掘削は全て人力で行い、基盤層まで掘り下げ、遺構の有無の確認・遺物の収集等を行った。

基本層序は4層に大別することができる。

I 層	表土・造成土層		
II a 層	黒褐色粘性土層	10YR2/2	締まり強い。IV層に由来する円礫をまばらに含む。旧耕作土
II b 層	黒色粘性土層	10YR2/1	締まり強い。旧耕作土
III 層	黒褐色粘土層	10YR3/2	
IV a 層	褐色砂礫層	10YR4/6	地山層。3～10cm大の円礫多量に含む。旧河道か
IV b 層	黄褐色粘土層	10YR5/8	地山層。
IV c 層	褐色土層	5YR2/2	地山層？非常に硬質。部分的に酸化鉄と思われる堆積物を含む。

3) 調査の結果

今回の調査では、遺構及び遺物は確認されず、遺物包含層も同様に確認できなかったことから、遺跡の範囲に含まれる可能性は低いと考えられ、埋蔵文化財に関する対応は必要ないと判断した。

なお、調査地北西側の茂屋下岱遺跡内で石器・石製品や縄文土器などの遺物が表採された。



図57 茂屋下岱遺跡隣接地調査区と周辺の地形 (1 : 2,500)

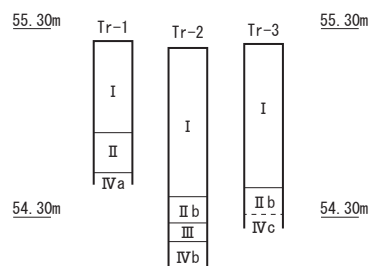


図58 茂屋下岱遺跡隣接地土層柱状図 (1 : 40)



調査地近景 (南西から)



掘削状況 (南西から)



Tr-1完掘 (北から)



Tr-1土層堆積状況 (西から)



Tr-2完掘 (西から)



Tr-3完掘 (西から)

図版 29 茂屋下岱遺跡隣接地調査状況

引用・参考文献

- 秋田県埋蔵文化財センター編 1992 『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第219集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター編 1993 『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』秋田県文化財調査報告書第236集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター編 2007 『土飛山館跡』秋田県文化財調査報告書第425集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター編 2011 『漆下遺跡』秋田県文化財調査報告書第464集 秋田県教育委員会
- 秋田県立大館鳳鳴高等学校社会部考古学班 1971 『茂屋下岱式土器群』
- 虻川嘉久 2023 「佐竹氏秋田転封時の阿仁・比内地方の動静―下遠家文書・各家伝由緒書から探る―」『大館郷土博物館研究紀要火内』第17号 大館郷土博物館
- 大館郷土博物館編 2008 『大館市内遺跡詳細分布調査報告書』大館市文化財調査報告書第2集 大館市教育委員会
- 大館郷土博物館編 2013 『扇田道下遺跡発掘調査報告書』大館市文化財調査報告書第8集 大館市教育委員会
- 大館市教育委員会 2019 a 『大館市内遺跡詳細分布調査報告書(5)』大館市文化財調査報告書第15集
- 大館市教育委員会 2019 b 『大館城跡発掘調査報告書』大館市文化財調査報告書第16集
- 大館市教育委員会 2022 『大館市内遺跡詳細分布調査報告書(6)』大館市文化財調査報告書第19集
- 大館市教育委員会 2023 『金坂遺跡・大館市内遺跡詳細分布調査報告書(7)』大館市文化財調査報告書第20集
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』ニューサイエンス社
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1980 『角川日本地名大辞典 5 秋田県』 角川書店

報 告 書 抄 録

ふ り が な	なかしだにいせき かねさかいせき（２） おおだてしないいせきしょうさいぶんぶちょうさほうこくしょ（８）							
書 名	中仕田Ⅱ遺跡 金坂遺跡（２） 大館市内遺跡詳細分布調査報告書（８）							
副 書 名								
巻 次								
シ リ ーズ 名	大館市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編 著 者 名	嶋影壮憲・滝内 亨・馬庭和也							
編 集 機 関	秋田県大館市教育委員会歴史文化課							
所 在 地	〒017-0012 秋田県大館市釈迦内字獅子ヶ森 1 番地 TEL 0186-43-7133 FAX 0186-48-2512							
発 行 機 関	秋田県大館市教育委員会							
所 在 地	〒018-3595 秋田県大館市早口字上野43番地 1 TEL 0186-43-7111 FAX 0186-54-6100							
発 行 年 月 日	2025年 3 月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
なかしだにいせき 中仕田Ⅱ遺跡	あきたけんおおだてしはやぐち 秋田県大館市早口	05204	15－38	40°17' 56"	140°24' 57"	20230427 ～ 20230524	87	記録 保存 調査
かねさかいせき 金坂遺跡	あきたけんおおだてしあざはちまん 秋田県大館市字八幡	05204	4－47	40°16' 25"	140°34' 9"	20240709 ～ 20240727	40	
こたてちょういせき 小館町遺跡	あきたけんおおだてしこたてちょう 秋田県大館市小館町	05204	4－141	40°15' 46"	140°33' 15"	20230317 ～ 20230318	37.7	試掘・確認調査
いもがたいにいせき 芋ヶ岱Ⅱ遺跡	あきたけんおおだてしゆきさわ 秋田県大館市雪沢	05204	4－173	40°17' 5"	140°40' 48"	20230401 ～ 20230425	444	
いもがたいさんいせき 芋ヶ岱Ⅲ遺跡	あきたけんおおだてしゆきさわ 秋田県大館市雪沢	05204	4－174	40°17' 3"	140°40' 41"	20231024 ～ 20231114	103	
かねさかいせき 金坂遺跡	あきたけんおおだてしあざはちまん 秋田県大館市字八幡	05204	4－47	40°16' 25"	140°34' 9"	20230525 ～ 20230608	31	
おおだてじょうあと 大館城跡	あきたけんおおだてしあざさんのまる 秋田県大館市字三ノ丸	05204	4－46	40°16' 21"	140°33' 43"	20230610 ～ 20230620	23	
はやぐち ちく 早口地区	あきたけんおおだてしはやぐち 秋田県大館市早口	05204	－	40°20' 54"	140°24' 40"	20230704 ～ 20230705	4	
おおだてじょうあとりんせつち 大館城跡隣接地	あきたけんおおだてしあざかねざか 秋田県大館市字金坂	05204	4－46	40°16' 21"	140°34' 12"	20230713 ～ 20230721	16	
からさわ ちく 柄沢地区	あきたけんおおだてしからさわ 秋田県大館市柄沢	05204	－	40°15' 22"	140°34' 48"	20230905 ～ 20230907	16	
もやしたたいいせきりんせつち 茂屋下岱遺跡隣接地	あきたけんおおだてしやまだ 秋田県大館市山田	05204	15－4	40°17' 52"	140°27' 34"	20230907 ～ 20230909	9.7	
しゃかないちく 釈迦内地区	あきたけんおおだてししゃかない 秋田県大館市釈迦内	05204	－	40°19' 3"	140°34' 27"	20230926 ～ 20230927	6	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コ ー ド		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘 原因
			市町村	遺跡番号					
はぎのだいにいせき 萩ノ台Ⅱ遺跡	あきたけんおおだてしこだてばな 秋田県大館市小館花		05204	4－67	40°15'23"	140°34'3"	20231002 ～ 20231003	48	試掘・確認調査
なかやまちく 中山地区	あきたけんおおだてしなやかやま 秋田県大館市中山		05204	－	40°13'41"	140°35'48"	20231115 ～ 20231116	6	
いちかわいせき 市川遺跡	あきたけんおおだてしひないまちおうぎた 秋田県大館市比内町扇田		05204	12－18	40°13'35"	140°35'23"	20231129 ～ 20231130	10	
もちた ち く 餅田地区	あきたけんおおだてしもちた 秋田県大館市餅田		05204	－	40°16'29"	140°31'17"	20240912 ～ 20240914	10	
					40°16'30"	140°31'19"	20241001 ～ 20241008	35.6	
まがた ち く 曲田地区	あきたけんおおだてしまがた 秋田県大館市曲田		05204	－	40°13'1"	140°36'53"	20241114 ～ 20241126	60	
かみひじりいせき 上聖遺跡	あきたけんおおだてしまがた 秋田県大館市曲田		05204	4－146	40°13'8"	140°37'26"	20241126 ～ 20241127	7.5	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
中仕田Ⅱ遺跡	散布地	縄文				縄文土器、石器、土製品		大木10式土器併行期	
金坂遺跡	集落 屋敷	縄文 江戸	掘立柱建物跡、炉跡、柱列、溝跡、土坑、柱穴・柱穴様ピット			陶磁器、土器、石製品、金属製品		金属生産に関わる遺構・遺物を検出	
芋ヶ岱Ⅱ遺跡	集落	縄文				縄文土器、石器			
芋ヶ岱Ⅲ遺跡	散布地	縄文				縄文土器、石器		新発見	
大館城跡	城館	江戸	土坑、溝跡、井戸跡、柱穴・柱穴様ピット			陶磁器			
市川遺跡	散布地	縄文 平安				縄文土器、石器			
要 約	中仕田Ⅱ遺跡は、大館市早口字中仕田に所在する。遺跡は早口川の河岸段丘上、標高64mに立地する。調査は個人住宅の新築工事に伴って実施した。範囲は住宅新築部分の東西約10m、南北約8mである。遺跡の範囲は調査区外に拡がる。 調査の結果、縄文時代の遺物が検出された。縄文土器は中期末を主体とするが、後期末頃の土器も散発的に存在する。調査対象は工事で掘削される深さまでとしたため、遺物包含層までで止まり、遺構は検出されなかった。出土土器は多量の大木10式併行土器が見られる。剥片石器は少ないが、礫石器の敲石がやや多く出土した。このほか、呪具として土偶や三角形土製品も得られた。 金坂遺跡は、大館市字八幡に所在する。遺跡は大館段丘北縁、標高71～74mに立地する。江戸時代には大館給人の居住する八幡町にあたる。調査は個人住宅新築工事に伴って実施した。範囲は住宅用出入口部分の東西約8m、南北約6mである。遺跡の範囲は調査区外に拡がる。 調査の結果、中世及び江戸時代の遺構・遺物が検出された。遺物で最も古い陶磁器は17世紀で、19世紀まで継続的に存在する。中世とみられる遺構には炉跡2基のほか、堅穴建物跡1軒がある。集落の成立は、遺構の新旧関係からみて、中世後期と推定される。江戸時代の遺構には掘立柱建物跡1棟、柱列1条、区割溝、柱穴、柱穴様ピットがある。遺構群の地割から江戸時代の侍屋敷跡と考えられる。江戸時代の出土遺物には陶磁器・土器のほか、金属製品・石製品がある。金属製品には器種不明の鉄製品と寛永通宝がある。石製品はおもに砥石である。 令和5年及び6年度の市内遺跡詳細分布調査は、17の開発事業予定地内の試掘・確認調査を実施した。その結果、2遺跡（金坂遺跡、大館城跡）については本調査が必要と判断した。また、芋ヶ岱Ⅲ遺跡を新規遺跡として登録し、3遺跡（芋ヶ岱Ⅱ遺跡、芋ヶ岱Ⅲ遺跡、萩ノ台Ⅱ遺跡）については工事立会が必要と判断した。これらの5遺跡について、引き続き開発事業との調整を図った。								

大館市文化財調査報告書第22集

中仕田Ⅱ遺跡 金坂遺跡（2）
大館市内遺跡詳細分布調査報告書（8）

発行日	令和7年3月29日	発行
編集	大館市教育委員会歴史文化課 大館市釈迦内字獅子ヶ森1番地	
発行	大館市教育委員会 大館市早口字上野43番地1	
印刷	有限会社さとう印刷工業 大館市字馬喰町37番地	



中仕田Ⅱ遺跡出土土偶